

# 外道に憑依した凡人

ひーまじん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Fateにおける外道代表こと言峰綺礼。

それに憑依した一般人が生き延びるために暗躍する。

ドジる、ミスる、慢心するのどうしようもない三拍子という一般人にありがちな欠点を抱えながら。

目次

始まりの歪み	1
戦端の歪み	17
戦場の歪み	31
早過ぎる激突	47
蠢く影	61
例え、光でなくとも	71
異端者二人	85
交錯する想い	105
贗作達	117
我、復讐者となりて	131
反則の切り札	146
求める答え	161

## 始まりの歪み

「頼り甲斐のあるご子息ですな。言峰さん」

『代行者』としての力量は折り紙付きです。同僚たちの中でも、アレほど苛烈な姿勢で修業に臨む者はおりません。見ているこちらが空恐ろしくなる程です」

「ほう……信仰の護り手として、模範的な態度ではありませんか」

「いやはや、お恥ずかしながら、この老いぼれにはあの綺礼だけが自慢でしてな」

峻厳さで知られる老神父――言峰璃正は、銜いもなく相好を崩した。

それは話し相手である魔術師。遠坂時臣に余程気を許しているものと見え、眼差しからは一人息子に向けられる信頼と情愛がありありと伺えた。

「五十を過ぎても子を授からず、後継は諦めておったのですが……今となつては、あんなにも良くできた息子を授かったことが恐れ多いぐらいです」

「しかし、流石に教会の意向とはいえ、難色を示しては……彼は」

「アレの信仰に懸ける意気込みは激しすぎるほどですからな。本来、異端の徒を葬る者の一人として、疑問を抱いたのでしよう」

「正直なところ、彼がマスターの権利を放棄せず、承諾してくれた事に關しては安堵したものです。彼からしてみれば、何の関係も無い闘争に巻き込まれたも同然のことだったでしょうに」

「いや……寧ろアレにとっては、それが救いだったのかもしれない」  
僅かに言葉を濁してから、璃正神父は沈鬱に呟いた。

「内々の話ですが、つい先日、アレは妻を亡くしましたな。まだ二年しか連れ添っていなかった新妻です」

「それは、また――」

意外な事情に、時臣は言葉を失う。

「態度にこそ出しません、令呪が現れる数日前までは酷い有り様で

してな。二年とはいえ、アレが初めて愛した女。余程応えたようです。……イタリアには思い出が多過ぎる。久しい祖国の地で、目先を変えて新たな任務に取り組むことが、今の綺礼にとっては傷を癒す近道なのかもしれません」

璃正神父は溜め息混じりにそう語る。

忘れもしない。

綺礼の生を見続けてきた璃正神父は、今の今まで信仰以外に何の情熱も示さなかった息子が――否、その信仰さえも情熱を示していなかった息子が妻を失った直後、人が変わったように取り乱した。

二年。感傷に浸るにはその年月はあまりにも短い。

けれども、綺礼にとってはかけがえの無いものだったのだろう、璃正神父は令呪の宿る昨日に至るまで、綺礼に暇を与えた。

本来なら長期の休暇を寄越すはずだったが、それも綺礼に令呪が宿ったことでキャンセルとなってしまったわけだが。

「時臣くん、どうか息子を役立ててください。アレには今、己が信心を確かめる事しかできない。苦難の度に、アレは真価を発揮することでしょう」

「痛み入ります。聖堂教会と二代の言峰への恩義は、我が遠坂の家訓に刻まれることでしよう」

老神父の言葉に、深々と時臣は頭を下げた。

「今度こそ、聖杯は成るでしょう。どうか見届けていただきたい」

時臣の堂々たる態度に、璃正神父は胸中で、今は亡き朋友の面影を祝福するばかりだった。

地中海からの爽風に髪を吹き煽られながら、言峰綺礼は、丘の頂の

ヴィラから続く九十九折の細道を、一人、黙然と引き返していた。

否、黙然としていたのは表面ばかり。その鉄面皮のような無表情の下には様々な感情が渦巻いていた。

(やっべ……全然話聞いてなかった……)

つい先程まで語り合っていた……と思われていたが、その実、綺礼は何も聞いていなかった。

というよりも、何かを聞く余裕がなかった。

右手に宿った聖痕。令呪と呼ばれるその代物を眺め、思う。

日本の冬木という場所に六十年に一度現れる万能の願望機。『聖杯』を奪い合う魔術師の闘争。

七人の聖杯に選ばれしマスターがサーヴァントと呼ばれる歴史や伝承に名を残す超人或いは偉人を使い魔として使役し、殺しあう。

その七人の一人として選ばれた綺礼だが、その時心中穏やかではなかった。

混乱に次ぐ混乱。聖杯に選ばれるはずが無い、と確信を持っていた綺礼にとつては寝耳に水だった。

俗世に染まった願望程度しか持ち合わせず、この世に生を受けたその時から精神を苛んでいた苦惱さえも消え失せた。今の言峰綺礼には、聖杯に選ばれるだけの理由が無いはずだった。

彼の魂は、既に言峰綺礼ではないのだから。

絶賛、鉄面皮の下でパニックっている彼は正しく言峰綺礼だ。

しかし、その中身は違った。

何の間違いか、はたまた運命の悪戯か、言峰綺礼の中には全く無関係の人間の魂が宿ってしまった。

キツカケはわからない。

言峰綺礼の中にいる男にも、そして今は欠片として残っていない本体にも、思い当たる節など微塵も無いだろう。

ただ一つ。キツカケのようなものがあるとすれば、それは妻の死であつたのだろう。

愛せなかつたと、そう自ら断じたはずの彼女の死がともすれば、言峰綺礼には何よりの衝撃だったのかもしれない。何も感じていない、

と思っていたのは本人だけだったのかもしれない。

そう、本来ならあり得ない現象を引き起こしてしまうほどに。

結果として、今現在の言峰綺礼は見た目こそそのままであるものの、全くの別人となってしまうた。

そして言峰綺礼を任された男は、当然の如く、いきなり放り込まれた環境に精神病棟への隔離が勧められかねない程に酷いことになっていた。その時の璃正神父が冷静に綺礼を慰めようとしていなければ、或いはこの場にいなかったのかもしれない。

もつとも、精神病院に送り込まれるのと、現状のどちらが良かったのかなど、今更是非を問うまでも無いが。

数日経ってようやく整理がつき始めた頃に令呪の顕現。時臣を交えた話し合いの最中も、綺礼はひたすらパニックっていた。既に別の中身になってしまったはずの綺礼に与えられた令呪。聖杯にかける大望など、一欠片も持ち合わせていない今の綺礼にとっては、傍迷惑以外の何物でも無い。

早々に放棄したい……のが山々であったのだが、それをどう切り出すか、考えながら適当に返事を返していたら、うっかり時臣の話を承諾、結果として聖杯戦争への参加を余儀なくされるのであった。

全くもって冗談では無い。

聖杯戦争は元よりこの世界には所謂『死亡フラグ』と呼ばれるものが氾濫する世界だ。

表はともかく、裏には魔術師と呼ばれる存在が当たり前のよう存在し、魑魅魍魎は疎か真祖と呼ばれるものまで存在する始末。例え一般人でもたまたま優れていれば、何かの餌になるという具合に何の安心もできないのがこの世界だった。

つまり、この言峰綺礼の『代行者』と呼ばれるものを放棄したところで、運が悪ければ何時でも死ぬるということである。死の大安売り。何もかも一般人には優しく無い世界だった。

そう考えた時、綺礼の脳内から一般人へと戻るという選択肢は放棄されている。何かの間違いで研究材料や餌になるのなら、それに対抗できる今の力を維持しよう。

何は無くとも、この肉体は既に凶器であるのだから。何も与えられていないよりは遙かにマシだ。

そうやって落ち着けたのが令呪の顕現する一日前の話である。目標を立てた途端の最悪の事態に綺礼は神を呪った。一応、この身は信徒であるにも関わらず、神殺しを真面目に考えたほどに。

様々な事に思考を働かせている間に、既に麓まで来ていた。

「聖杯戦争まで三年もの猶予があると考えるべきか……それとも三年しか無いと考えるべきか……」

遙か遠ざかった頂上のヴィラを顧み、綺礼は思う。

やはり聖杯戦争への参加を辞退させてもらえないかな、と。

言峰綺礼の身体に移った魂は、推して量る事もなく、凡庸な男だった。

凡俗。そう言えば耳障りは悪いが、こと世の中においてはその凡俗というものは存外に悪い話では無い。劣っていれば当然人並など不可能であるし、優秀であるが故に選べないものもある。

無論、凡人であれば選り取り見取りなどということは断じてないが、人は劣っていれば知性を損ない、優れていけば人間性を損なうという未熟な生き物である。

その点については、凡人というものは並の知性、並の人間性を有する。特筆するべきものはなくとも、欠点も無いと呼べる。

流石にそんな都合のいい話では無いが、それでも綺礼の身に宿ったものは優れてはいないが故に聡明で、劣っていないだけに愚かだった。



この世界、この物語を知っている。

だからこそ、男は言峰綺礼として生きたくはなかった。

この身はまさしく物語における主要人物であり、主人公に立ちふさがる害悪。いずれは悲惨な末路を迎える身であり、天寿を全う出来るような存在ではない。悪逆ではなく悪人。非道ではなく外道。そう言わせしめた人間に憑いてしまった。

既に世界から決められた、どうしようも無い悪ではあるが、それは言峰綺礼の本質があればこそそのもの。

中身がごくごく普通の感性を持った人間であれば、そもそもそのような役どころには抜擢されるはずも無い。

それをすぐに気づいた男であったが、しかしそうならないという確証は無い。

『IF』ばかりを考えるこの男はどうしようもなく、凡人だった。

結果、聖杯戦争参加を断るタイミングを失い、仕方なく原作通りに遠坂時臣を師事し、その元に降った。

綺礼自身にも、憑いた男にも才能なんてものは無い。

魔術師には悲しい事であるが、才が無ければ行き着けない極地があり、見えない世界がある。

武道武術とはわけが違うのだ。努力だけでは超えられない壁がある。どこぞの一族は『武で根源に至る』という目標を一時期掲げていたらしいが、男には関係のない話である。

それを綺礼は他人の十倍、二十倍にも及ぶ鍛錬によって身につけた。無論、その壁までの話だが。

それは言峰綺礼が答えを得たい一心で歩んできた遍歴であり、男に同じことができるわけでは無い。

同じ理由なら。

男には別の理由がある。

ごく普通の、人間なら殆どのものが同じ状況下で至る思考だ。

『死にたくない。殺されたくない』。

ただ生きたいという一心で、身を削る思いで、男は励んだ。

それは原初にして、理性を持たない獣にさえも持ち得る本能とし

て、男を突き動かした。

結果――。

男は物語通りの言峰綺礼と遜色ないほどに多芸に秀で、格別際立ったもののない異様な魔術師としての来歴を身につけた。

――その、精神性を除いては。

「うえええええええん！」

「あー、またやっちゃったな、ちくしょう」

頭をガシガシとかき、言峰綺礼となった男は面倒臭そうに呟いた。泣き喚く少年の額は赤く腫れており、余程のことがあったのだろうと思われる。

だが、実はそうではない。

単に別事を考えていた綺礼と少年がぶつかっただけである。

おまけに腫れた額も、歩行の際に自然と振られる軽く握られただけの拳が当たっただけ。

泣くほどのことでもない……綺礼が普通の人間なら。

全身凶器と言っても過言ではない綺礼とぶつかったら、だいたいこんな感じになってしまう。拳打で壁は砕くし、震脚で地面を凹ませる。

マジカル☆八極拳の担い手ともなれば、常に細心の注意を払って出歩かなければならない、ということを綺礼は心がけているつもりなのだが、一度思考の海に落ちると、周りが全く見えなくなる。これ危ないのが本人だけなら何の問題もないのだが、危ないのが周りの人間というのがまたタチが悪い。

聖杯戦争が近づくにつれ、おぎなりになっていく表の世界への気遣いに綺礼は溜息を吐く。

「泣くな、少年。傷というものは痛いと思うから痛いのだ」

少年の額をさすりながらそう告げる綺礼。

それでも鼻水を垂らして泣く少年は……ふと痛みがしないことに気がついた。

「よし、いい子だ。これをあげよう」

泣くのが止まった少年に綺礼はポケットから飴玉を取り出す。も

もちろん、綺礼が後で食べようと思っていたものであるが、この際仕方ない。丸く収めるには飴玉の力を借りるしかなかった。

少年はそれを受け取ると、そのまま走り去っていく。

礼の一つもないのか、とは言わない。そも、ぶつかつたのは綺礼が原因の一端を担っているし、大の男に迫られては子どもからしてみれば恐怖の対象でしかない。

寧ろ、泣き叫ばれて大事にならないだけマシだ。

「いかん。思わぬところで足止めを食った」

腕時計を見て、約束の刻限が迫っていることを確認した綺礼は周囲に気を配りながら、それなりの速さで師の遠坂時臣が待つ遠坂邸に向かう。

因みにそれなりとは綺礼の主観でしかないのです、とてつもなく速い。一般人の全力疾走ぐらい。

それを綺礼は駆け足をするような軽さで行っていた。化け物である。

程なくして着いたのは冬木市にある深山町の高台に聳える遠坂邸。

その地下の工房に綺礼は訪れていた。

聖杯戦争開催が間近となった現時点において、綺礼と遠坂時臣は既に袂を分かつているという事になっている。

なっている、というのはそれが時臣の筋書き通りに事実を歪曲して公表しているという事であり、既に三年前に手に入れていた令呪も、今月になってから『偶然』令呪を宿したという事にして、聖杯を相争

うものとして、決裂した事になった。

「遅くなりました。我が師よ」

工房に入った綺礼は思考のスイッチを切り替え、時臣に語りかける。

この三年間、男は言峰綺礼として振る舞うように努めてきた。

結果的に、素の状態も、とまではいかなかったものの、父にさえも『少し変わった』と感じられる程度。たったの三年でその程度は上々であると思っていた。

「ああ、綺礼。君にしては珍しい。何かあったのかね？」

「いえ。くだらない些事ですのぞ」

本当にくだらない。それこそ、この場には似つかわしくない理由だろう。

綺礼の答えに時臣はそれ以上の追求をせず、手にしていたまだインクの生乾きの用紙に目を戻した。

「師よ。それは？」

『時計塔』からの最新の報告だ。神童ことロード・エルメロイが新たな聖遺物を手に入れたらしい。これで彼の参加も確定のようだな。ふむ、これは齒応えのある敵になりそうだ。これで既に判明しているマスターは、我々も含めて五人か……」

「此の期に及んでまだ二人も空席があるというのは、不気味ですね」

間桐雁夜、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト、遠坂時臣、衛宮切嗣、そして自分。

残る二名も、綺礼自身は誰になるのか、既に見当が付いている。

というよりも、あえて行動を起こさなかった。残る二名を他の魔術師にしてはイレギュラーになりえる。

片方は正直言つてサーヴァントが非常に厄介であるし、もう片方に関しては魔術師ですらないただの殺人鬼。諸々の事情を考えると始末しておいたほうが良い、とも言えるが、今の綺礼に他人の命を尊ぶ余裕などない。非情であるが、この地で失われる命に感心など向けられるはずもなかったし、この聖杯戦争を勝ち抜くことが目的でない以上、どんなサーヴァントを引き当てられたところで、綺礼には関係の

ないことである。

故に口先だけでは不審がつているものの、心にもない言葉だった。「なに。相応しい令呪の担い手がいない、というだけのことだろう。時が来れば聖杯は質を問わず七人を用意する。そういう人数合わせについては、まあ概ね小物だ。警戒には及ぶまい」

実に時臣らしい。というよりも遠坂らしい楽観である。

三年の期間の中で、改めて確認させられた遠坂という家系の『うつかり』。準備においては用意周到でありながら、いざ実行に移す段に入ると足元を見なくなり、結果予想だにしないことに頭を悩ませる。

これ程敵として裏をかきやすい人物はそういないが、彼に死なれては困るのが現状であり、何かの間違いで自分が残らないように脱路ルートを突っ走りたい綺礼は、そちらについては自分が何とかしようと思っていた。

「まあ用心について言うのならー綺礼、この屋敷に入るところは誰にも見られていないだろうね？表向きには、我々は既に敵対関係なのだから」

「ご心配なく。可視不可視を問わず、この屋敷を監視している使い魔や魔導器の存在はありません。機械仕掛けのものに関しても同様です。保証はしかねますが……」

本来なら、ここで絶対に問題ないと言っておきたいのが綺礼の本音であるが、つい先日召喚したサーヴァントの関係上、そうもいけなくなってしまうた。

間諜の英霊たるハサン・サツバーハ。

このサーヴァントさえ引き当てれば、暗殺の危険性はなく、そして自身はアサシンに物語通りの仕事をさせてもよし、マスター暗殺に奔走させるもよしと多種多様な選択肢が用意されているはずだった。

戦略もまた、綺礼のアサシンが奔走し、他のマスター全員の作戦や行動方針、サーヴァントの弱点などについて徹底的に調査。そして各々の敵に対する必勝法を検証した後で、時臣のサーヴァントが各個撃破で潰していく算段だった。

そのために時臣は、徹底して攻撃力に特化したサーヴァントを召喚

する方針であったし、その触媒も選んであった。綺礼は聞かされてこ  
そくないものの、どの英霊であるか、既に知っていた。

「私の手配していた聖遺物が、今朝ようやく到着した。希望通りの品  
が見つかったよ。盤石の準備をしている、とは言えない状況になって  
しまったが、私が招くサーヴァントは全ての敵に対して優位に立つ。  
およそ英霊である限り、アレを相手にして勝ち目はない。ちよつとし  
たイレギュラーもさしたる問題ではないよ」

ほくそ笑む時臣は、持ち前の不敵な自信に満ち溢れていたが、正直  
な話、この男の自信はあてにならない。遠坂であるがゆえに。後、そ  
ういう発言をしたものが、思惑通りの結果を叩き出した試しがない。  
「早速、今夜にも召喚の儀を行う。――他のマスターの監視がないと  
いうのなら、綺礼、君も同席するといい。それにお父上も」  
「父も、ですか？」

「そうだ。首尾よくアレを呼び出したなら、その時点で我々の勝利は  
確定する。喜びは皆で分かち合いたい」

こういう傲岸なまでの自信を、何の銜もなく誇示できるのは、遠  
坂時臣の持ち味でもあるのだろう。ある意味尊敬にも値する。真似  
をしようなどとは露ほどにも思えないが。

「わかりました。父には私から伝えておきましょう。師は英霊召喚の  
ための準備を」

「ああ。とは言っても、後は触媒を置いて、刻限を待つだけだがね」

ふと綺礼は、振り子の宝石に目をやった。

FAXと同じような性能を示すその魔導器は、時臣のものだ。ロー  
ル紙に認め<sup>したた</sup>られる宝石の揺れは、まだ止むことなく続いている。

「新しいマスターの情報ですか？」

「いや、それは別件の調査でね。最新のニュースじゃない。――おそ  
らくアインツベルンのマスターになるであろう男について、調査を依  
頼しておいたんだ」

外界との接触を断絶しているアインツベルンの情報は、ロンドンの  
時計塔においても極めて手に入りにくいのだが、時臣はそのマスター  
について兼ねてから心当たりがあると語っていた。手元の紙を巻い

て書見台に置くと、彼は新たな印字紙を手元に取り寄せる。

「我が師。申し訳ありませんが、その書類を拝借してもよろしいですか？」

「……………ああ、構わんよ。なんなら、こちらの方も、私に代わって吟味してもらえれば助かる。時に君の忠告は大いに助けとなるのでね」

ざっと流し読みをした後、時臣は印字紙を綺礼に手渡した。

普通なら、自らも参加する聖杯戦争の参加者になるかもしれない男の情報だ。自らが吟味すべきであるのだが、それほどまでに時臣は綺礼を信頼しているし、裏切る気など毛頭無い綺礼はその信頼を損なうこともない。それらは綺礼の聖職者という魔術を忌避して然るべき身分でありながら、あらゆるジャンルの魔術に対して貪欲な吸収力でそれらの秘儀を学んでいった姿勢にあり、それが時臣を大いに喜ばせたからに他ならない。

一礼した後、綺礼は地下の工房を辞し、一階に戻る。

その頃には既に母子の姿はなく、居間には誰もいなくなっていた。

遠坂葵に遠坂凜。

時臣の妻とその娘であるが、その二名との関係は比較的良好と言える、

元より、無碍にする理由もなければ、体裁上師と仰ぐ人物の家族である。それなりに親しくはなったし、性格がまるで違う綺礼は、凜と予想以上に打ち解けていた。完全に近所の面倒見がいい年上のお兄さんとそれに懐いた小学生状態で、猜疑の色などまるで感じえない。おそらく、ここを出る前にあっていたのなら、本当に激励の一つでも貰えたのかもしれない。

幼いとは言え、誰かから激励の一つでももらえれば、多少なりモチベーションは違うのだろう、と考えつつも、我が物顔で居間を独占しつつ、手元の書類に目を落とした。

正直に言って、その経歴などどちらでも良いのだが、何かイレギュラーな要素を持ち得ていられては大いに困る。

そもそも自分が既にイレギュラーと化している以上、全てを再現す

ることは不可能であるにしろ、自分に死を与えてきそうな要素を持ち得ているものには最大限の警戒をせねばならない。時臣のサーヴァントや今手にしている書類の人物たる衛宮切嗣がそうだ。この二名に関しては始めからイレギュラー抜きで自分に死を運んでくるものだ。特に時臣のサーヴァントが物語通りであれば、自分に興味を抱くことはないだろう。機嫌を損なえば首が飛びかねない。

本音を言えば、時臣のサーヴァントもイレギュラー覚悟で別のものにして欲しかったところであるが、召喚されてもいないサーヴァントを伝承上の経歴を理由に変更させるなど、なかなか出来る事ではない。元より、それを吟味した上での時臣の選択だ。到底意思変更が出来るはずもなかった。

「ー随分と難しい顔をしていますね。今更怖気ついたんですか？」  
窓一つ開いていない部屋にふわりと一陣の風が吹く。

「……用もなく実体化するなどは言わんが、嫌味を言うために出てきたのなら霊体に戻れ」

「お断りします。例えマスターといえど、命令を聞いてあげる義理はないもの」

「ほとほと理解に苦しむな。どこの世界にマスターの命令を聞かないサーヴァントがいる？」

「ここにいますよ」

綺礼は深く溜息を吐いた。

何故このサーヴァントが呼び出されたのか、アサシンを、ハサンを呼び出そうとしていた綺礼の元に呼び出されたのか。未だに理解できない。

数日前のことだ。

時臣立会いのもと、綺礼の英霊召喚の儀が行われた。

触媒は無い。アサシンの枠こそがハサンを呼び出す触媒ゆえに聖遺物は必要なかったのだ。

だからこそ、ハサン以外のサーヴァントが出てくるなど想像もしないなかったし、何よりアサシンですら無いことも欠片も考えていなかった。



魔法陣の中に現れたサーヴァントの姿を見たとき、我が目を疑った。

端々が赤く染まり、ボロボロになっている黒マント。

薄明かりの中でも照らされて煌めく長髪と金色に染まった瞳。

全体的に黒を基調とした軽鎧と服を纏ったその女性にはハサンのような髑髏の仮面をつけず、素顔をさらしていた。

この時点で時臣はアサシンで無いと察したが、綺礼はそれ以上にそのサーヴァントの事を知っていた。

『サーヴァント、アヴェンジャー。召喚に応じ参上しました。……どうしました。その顔は。さ、契約書です』

そう言っただけで現れたのが、今の言峰綺礼の魔力を餌に現界しているサーヴァント。

本来なら存在そのものがないはずの、暗黒面に堕ちた聖処女。

とある時空において『彼女ほど悲惨な目に遭ったのなら復讐を考えていない筈が無い』という民衆の想いに寄生する形で存在の根拠とし、贗作の英霊を生み出し続けることで真作を上回り、乗っ取ろうと画策した竜の魔女。

決してこの世界には現界できる可能性が一パーセントも存在しない彼女が、綺礼のサーヴァントとして今確かに存在していた。

英霊は一人のマスターにつき一人しか召喚できない。

他のマスターのサーヴァントを奪うならその限りではないものの、綺礼に彼女と契約を結ぶ以外の選択肢はなかった。

「何ですか、その不満そうな顔は？ 縊り殺されたいのですか？」

「そんな事をすれば聖杯戦争が始まるでもなく、君は聖杯に焚べられるがね」

「……脅してるつもり？ 私は別に聖杯なんて興味ないんだけど」

「地が出ていゝぞ、聖処女。主に仕えるために出てくるような殊勝な奴や戦を望む戦士でない君が、聖杯に望みをかけずして出てくるなどあり得ん話だ。だから、早まって私を殺そうとは思わないことだ。いや、本当やめてください」

余裕そうに強がっていたものの、隣にいるサーヴァントの高まる負

のオーラを感じ取ったのか、勢いで殺されないように釘を刺した。と  
いうか、懇願した。

「フン。敬虔な信徒なら神に祈れば良いじゃない。アンタが神に仕え  
るものなら、助けてくれるわよ」

「神は信用していない。寧ろいるなら聖杯にでも神殺しを望みたいぐ  
らいだ」

「…………アンタ、本当に信徒なの？」

「無論、教会に属する者だ。しかし、神への祈り方はそれぞれだろう？  
呪詛ぐらい乗せてもいいとは思わないか？」

「…………アンタ、絶対碌な死に方しないわよ」

「ならば、天寿を全うできるように頑張るさ。少なくとも、この聖杯戦  
争で死ぬつもりは毛頭ない」

粗方書類に書いてあったことを記憶した綺礼は、何のイレギュラー  
らしきものも感じなかったことに、内心安堵の息を吐く。

これで参加者の中に自分以外の同じ境遇の者がいれば、間違いなく  
一番初めに狙われる。これはZeroだが、その次の十年後の話は自  
分が元凶となる部分がいくつもある。なら、その前に排除しておこう  
と考える者がいてもおかしくないはずだ。自分なら間違いなくそう  
する、と綺礼は言い切れる。

「？何処に行くのですか？」

「お前も聞いていただろう。父のところだ。今宵、我が師が英雄王を  
アーチャー  
弓兵のクラスで召喚する。後の事を考えれば、当分胃が痛い話だが、  
見届けなければな」

綺礼の言葉にアヴェンジャーは眉根を顰めた。

さして興味がなかったために話半分で聞いていた綺礼と時臣の会  
話だが、そこでは英霊の名もそのクラスも一言も口にしていなかっ  
た。

一つのクラスにしか該当しないサーヴァントならまだしも、英雄王  
はそういうわけではないだろう。かといって空き枠がアーチャーし  
か存在していなわけでもない。

綺礼もまたアヴェンジャーが自分のことを訝しんでいるのを察し

たようで、不敵に笑う。

「勘だ。特に自分の不幸に関しては聡いつもりだ」

「……何ですか、それは」

「何、ただの経験談だよ。では行くぞ。流石に人目につくわけにはいかんからな。外出時くらいは霊体化してくれ。後でアイス買ってあげるから」

「……やはり焼き殺そうかしら、この男」

子どもを釣るような言い方をする綺礼に、アヴェンジャーは割と本気でそう思った。

## 戦端の歪み

「本当に行かなくてよかったですか？」

刻限は丑三つ時。

自らが用意した一軒家(元の綺礼の貯蓄で購入)の畳の上に座り、テレビを見ながら綺礼は湯呑で茶を啜り、煎餅をバリバリと齧っていた。

傍にいるものからすれば、うるさいことこの上ないものの、綺礼は表情一つ変えることなく、ただただ煎餅を齧る。

「ちよつと、聞こえているんでしょう。何か言ったらどうです」

バリバリバリ。

「ねえつてば。無視するんじゃないわよ」

バリバリバリバリバリバリ。

「あああつーうるっさいわね！燃やすわよ!?!」

「待て。破壊される可能性を秘めているとはいえ、この拠点は先月私が高実費で購入したものだ。燃やされたら、その後お前も私も路頭に迷うことになる」

「じゃあ、返事しなさいよ！なんで行かなかったの!」

「行く必要がなかったからだ。私は師がいかなるサーヴァントを呼び出すか既に知っている。ならば行く必要はあるまい」

「でも、その師匠とやらには来るように言われてたでしょう。なんで嘘ついてまで行かなかったのって、聞いているのよ」

綺礼は虚言を吐いてまで、時臣の召喚の儀に立ち会うことをしなかった。というのも、そもそもあの場に行く理由が皆無であり、あそこにいけば確実にひと悶着あるというのが想像に難くなかったのである。主にアヴェンジャーとアーチャーがある。

もちろん、行くつもりはあった。あつたが、下手をするとその場でアヴェンジャーとアーチャーが殺し合いかねない。同盟を欺くのは最適だが、綱渡りが過ぎる。仮にそれを令呪で収めようものなら、開幕早々不利を強いられる。笑えない冗談だ。

もちろん、それをアヴェンジャーには言わない。いえば、天邪鬼精

神のアヴェンジャーのことだ。今からでも間に合うと言って、遠坂邸に行くといいだしかねない。

「……面倒だからだ。基本的に怠惰に過ごす主義なんだ、私は」

「……時々、あなたを聖職者か疑いたくなる時があります」

「立派な聖職者だよ。ただ、ほんの少しだけ、他者とは違う価値観で動いているだけのな」

大嘘である。

綺礼は聖職者であるが、信仰心なんてものは欠片も持ち合わせていないし、神様なんて死ねばいい、とすら思っている。割と本気で。

だから精一杯怠ける。起きているのはもう寝ているとバレたら、後々面倒だからで、舞い上がった時臣辺りが連絡してきた時のために備えているからだ。

「どうだ、アヴェンジャー。お前も食べるか？」

「食べないわよ。サーヴァントに食事は必要ない。そんなことも知らないの？」

嫌味たらしく言うアヴェンジャーに、綺礼は顎に手を当てる。

「ふむ。私の記憶違いでなければ、アイスクリームを食べて『なにこれ、美味しいんですけど!? 誰こんなもの作った人!』と人目も憚らずに叫んで——」

「そ、そんなわけないでしょ!? 本当に脳みそまで腐ってるんじゃない!? 焼いてあげようかしら!」

慌てふためきながら詰め寄るアヴェンジャーに、綺礼は内心ほくそ笑む。

一見、口調は丁寧に内容は粗暴になっているアヴェンジャーだが、感情が昂ぶると口調まで粗暴になる。

それが良いことなのかと問われれば、悩むところではあるものの、そちらのほうが親しみやすいという意味では或いは本来の聖処女よりもずっと親近感が湧くのかも知れない。

結局、時計の短針が三を指す頃にも時臣に貸し与えられた宝石通信機は何の反応も示すことなく、綺礼は眠りについた。

しかし、どうやら何の連絡もなかったのは綺礼が既に眠っている可能性を考慮しての、時臣なりの気遣いだったらしい。

時刻が午前十時を過ぎたころ、時臣から宝石通信機越しに英雄王ギルガメツシュの召喚に成功し、この聖杯戦争は紛れもなく自分達が勝利したと、努めて冷静にしているものの、若干の高揚を含んだ声音で語った。

綺礼は一応の賛辞を送りつつ、今後の戦略について相談する。

原作のようにアサシンに斥候をさせるということとは出来ない。アヴェンジャーには気配遮断も、それと限りなく同等のものである圏境も持ち得ない。完全に一騎当千のサーヴァントなのである。

幸いなことに、やろうと思えば、全サーヴァントと一戦交え、その能力を推し量ることが出来なくはないサーヴァントなのだが、そうなった場合はギルガメツシュとも矛を交えなければならぬ。でなければ、早々に時臣と袂を分かつてはいないということが露見してしまうだろう。

かといって、ギルガメツシュが三文芝居に付き合ってくれるはずもない。アヴェンジャーがギルガメツシュの逆鱗に触れば全力で殺しにかかるであろうし、アヴェンジャーもそも全てのサーヴァントを倒さないようにしろ、なんていうのは令呪でも使わない限り聞き入れないだろう。

ともすれば、能力的には可能であれ、それ以外が不可能としているため、その作戦は論外。

アヴェンジャーは何処までも斥候には不向きなサーヴァントだった。もつとも、それはアヴェンジャーを召喚した時点で綺礼が一番分かっていたところだが。

「では、暫くは？」

『様子見、ということになるだろう。英雄王が自ら賊の討伐に出る事は考えられない。刃を向けられれば、その限りではないだろうが……それは極力避けたい事態だ』

僅かに歪んだ音質は、さながら時臣の心中を表しているかのようだった。

高い単独行動スキルをギルガメツシュが持ったのは、時臣にとって大きな誤算であったのだろう。認め得る限り、最大限に相手の意思を尊重しようとしている時臣だが、あくまでもギルガメツシュの動員は最後の切り札ないし、確実に勝利で決する時以外には戦わせたくないのだ。ましてや、何の情報もない、何の対策も立てられない状態で全力投球は、いかにギルガメツシュといえど足をすくわれるかもしれない。

そうになると、令呪を使うしかないが、それは三度のみ。ましてや、マスターを尊重する心掛けなど微塵も持ち合わせていないギルガメツシュを律するとなれば、尚のこと貴重であり、タイミングを間違えれば関係は破綻する。

まさしく、天命を待つ、といったところである、

「で、あれば、やはり我々が？」

『そういう事になる。君のアヴェンジャーは、幸いにしてサーヴァントとしてのステータスはかなり高い。エクストラクラスという事もあるのだろう。それならば三騎士と戦うことがあっても遅れはとることはないはずだ』

結果として、どのような手段を取らざるを得なくなつたかということ、アヴェンジャーが他のサーヴァントを挑発し、戦闘を行うことで情報を得るといったものだった。

挑発と言つても、ただその気配を撒き散らして、誘うだけだ。その腕に自信を持ち、数々の武勲を打ち立てた英霊ならば、十中八九臨んでくるだろう。無論、マスターに止められる可能性もある。

『しかし、心配なのは未だ君のサーヴァントが真名を話さない事だな。それでは戦術も立てられまい』

「……そうですね。どうにも気難しいサーヴァントのようで」

ちらりと横目でアヴェンジャーを見ると、あからさまな矜め面で綺礼を見ていた。

気難しいサーヴァントというのは言い得て妙だ。このサーヴァントはやはりというべきか、自分のテリトリーに入られる事を拒んでいゝる。綺礼自身、さりげなく打ち解けようとは試みているものの、下手に出れば突っぱねられ、馴れ馴れしくすればキレられる。距離を測りかねていた。それが現状だ。

だが、真名を話していないというのは、明らさまな嘘であった。

綺礼はアヴェンジャーの真名を知っているし、それを本人の口からも聞いた。

何故、時臣に話さないのか、というところが一を考えてのことだ。

アヴェンジャーの真名はおおよそ伝承とは似ても似つかない。普通に考えれば、その思考に行き着くはずがない英霊だ。

だからこそ、黙っていれば、英雄王はともかく、他のサーヴァントはまず辿り着けるはずがない。

これはかなりのアドバンテージと言えた。

(……いや、もう一人は一目で看破するかもしれない)

あのキャスターなら、ひよつとすると気づくかもしれない。

もともと、その在り方を、魂を反転させているアヴェンジャーに、気づけばの話であるが。

『綺礼?』

「……申し訳ありません。少しばかり、思考に耽っていました」

『アヴェンジャーの真名の事は気に病む必要はない。私達のように、裏で手を組んでいると分かれば、疑心暗鬼になるのも当然。おいおい、知ることができれば、それで構わないだろう』

「気遣い、痛み入ります。我が師よ」

時臣は、綺礼がアヴェンジャーの真名を聞き出せずにいることを、引け目に感じていると思ったらしい。

勘違いもいいところだが、綺礼はその勘違いに便乗する事にした。自分を真面目で誠実な弟子だと勘違いしてくれているのはありがた



い。裏切るつもりは無くとも、裏工作がしやすいというものだ。

『それと、だ。昨晚、どうやら私以外のマスター達もサーヴァントを召喚したらしい。残る枠はキャスターのみだそうだ』

「いよいよよ、という事ですね」

『ああ。いよいよ、遠坂の悲願を成就する時が来たようだ。綺礼、君の働きも大いに期待しているよ』

「未熟者ではありませんが、全力を尽くさせて頂きます」

『うむ。では、私はここで失礼させてもらう。当分、君との連絡は控える事になるだろうから、健闘を祈らせてもらう』

それきり、宝石通信機からの言葉は切れた。

ふう、と一つ息を吐く。

相変わらず、時臣との会話には神経を使っている。綺礼の価値観はあくまでも普通の人間と変わり無く、時臣は何処までも魔術師然としている。ともすれば、当然会話の中に差異は生まれるだろうし、妙に自信に溢れた時臣が、わけのわからない事を言い出さないと常に気を張っている。

遠坂のうっかりは最早呪いの域だ。敵に回すと実にやりやすい事この上ないのだろう。しかし、味方である綺礼はそのうっかりのカーにも奔走しなければならぬ。中途半端に優秀なだけに尚タチが悪い。

その辺りは考えるだけでも頭が痛くなりそうなのに、綺礼は思考を切り替え、隣で話を一応耳に入れていたはずのアヴェンジャーに声を掛けようとして、何かを見ている事に気付いた。

「アヴェンジャー？何をしている？」

「……あなた、妻子がいるのですか？」

アヴェンジャーが眺めていたのは、たった一枚しか無かった妻の写真と、時臣に弟子入りする前に撮った娘の写真。

もちろん、それは以前の綺礼のつくが。

何故そんなものを持っているのか、と問われれば、回答に困るのが現実だ。

綺礼にとってはどちらも赤の他人である。だと言うのに、何故そん

なものを持っているのか、綺礼はその答えを持ち合わせてはいない。あるとすれば、それはただの自己満足というやつだろう、

「……ああ。だが、妻は既に他界した。生来体が弱く、少しの傷でも致命傷になり兼ねなかった。娘も、どうやら妙な体質を持って生まれたらしい。人並みに生を謳歌するのは難しいそうだ」

「そう。では、あなたの望みは妻の蘇生、娘の体質改善、といったところですか」

「いいや。いくら聖杯が万能の願望機だとしても、亡くした者を取り戻そうとは思わんよ。それは彼女が短い生を必死に生き抜いてきた事に対する冒瀆だ。娘の方は、考えているがね」

アヴェンジャーの問いに、努めて冷静に綺礼は答えた。

もちろん、嘘だ。今の綺礼にとつて、言い方は悪いが、死んだ綺礼の妻は赤の他人。死を悼む事はあれど聖杯に蘇生を願おうとは思わないし、仮に聖杯を勝ち取ってもアヴェンジャーが出てくる時点でこの聖杯は当然のごとく、物語通りに汚染されている。そうでなくても、その聖杯は時臣に取らせる算段だ。万に一つも、綺礼が願いを叶える事はない。

そして奇跡的な確率で願いを叶えられる状況にあったとしても、妻の蘇生は絶対に望みはしない。そんなことをすれば、今の綺礼が全くの別人であると気づいてしまうからだ。

娘に関しては、元の綺礼のようにには育児を放棄するつもりは毛頭無かった。

しかし、娘の体質上、ただの孤児院に預ける事もできず、聖杯戦争に参加する以上、父である璃正神父にも頼れなかったために、今はある修道院に預けている状態だ。上手く生き残る事ができれば、この冬木の地で生活をしようと画策している。何せ、綺礼は日本語以外ほぼ喋る事ができないから。海外で住むとか不自由すぎて考えられないのである。それにこの地なら、遠坂に頼る事ができるわけであるし。

「……なんだか、他人事みたいですね。あなたのその言い方」

嫌味もなく、皮肉もなく、アヴェンジャーはぼつりと呟いた。

このサーヴァントが召喚されてからまださほど経っていないが、そんな事を言うのは初めてだった。

唐突に、けれども的を射た発言に、綺礼は息を呑んだが、三年間演じてきた事が功を奏したのか、表情に出る事はなかった。

「……仕方あるまい。私も、お前も、初めから聖杯に辿り着けぬ身だ。叶えられない願いを話して何の意味がある」

一つ息を吐いて、綺礼はそう答えた。

それ自体は何ら間違いではない。

綺礼はこの聖杯戦争に何の意義も持ってはいない。ただの事故のようなものだ。もう少し自分が注意を払う余裕を持っていれば、この地に足を踏み入れる事なく、生を謳歌していた事だろう。

それ故、聖杯などには欠片も興味を抱いていないし、汚染されたものに興味はない。まして、それを周囲に納得させるだけの能力も、証拠も、綺礼は持っていない上、破壊できる宝具をアヴェンジャーは持っていない。

アヴェンジャーはそれで納得したのか、はたまた始めから問いかけたつもりなどなかったのか、つまらなそうに綺礼を一瞥すると、霊体化してその場から消えた。

未だアヴェンジャーに信用されていない、というその一点は何の偽りもない。まさしく、その通りだった。

召喚されて早々に『私は彼に聖杯を取って貰う為に参加している。故にお前に聖杯は手に入らない』などと言われては、信頼も何もあつたものではない。寧ろ、未だ自分のサーヴァントとして現界している事が不思議でならない。

そもそも打ち明ける意味などあつたのかと聞かれれば、それは大いにあつたと言える。仮に途中で綺礼の方針を知り、他のマスターに鞍替えしようなどと画策された場合、綺礼はどのタイミングでそれを知られたかを知らない。必然、寝首をかかれる形となる。

だが、その場で打ち明ければ、令呪を使えば御しきる事はできる。高い対魔力を持っている裁定者ルンラの場合なら一角では心許なかったが、アヴェンジャーにはそれがなかった。

幸い、一角も令呪を使う事はなかったが、アヴェンジャーは当然のごとく、態度が刺々しい。そもそも、それが普通なような気がしなくもない。

だが、アヴェンジャーと必要以上に親密になるつもりはなくとも、一定の信頼関係だけは築いておきたい綺礼としては、やはり話すべきではなかったかと少しばかり後悔していた。ついでにまたアイスを買ってあげたら機嫌直してくれないかなとか。

「どちらにせよ、サーヴァントが出揃うまでは静観を決め込む他ないな。アレが、焦れて何かしでかさなければいいが……」

遠坂邸のある深山町の方を見て、綺礼は無意識のうちに呟いた。

結局、時臣と他のマスター達がサーヴァントを召喚したその翌日に名乗りを上げないものの、キャスターが召喚され、七騎サーヴァントが出揃ったという事で聖杯戦争が開始された。

数日経つが、未だどの陣営も動く気配はない。アサシンによる暗殺を警戒している為だ。

遠坂邸と間桐邸付近には使い魔と思しきものが飛び回っているようだが、綺礼の方には一体たりともいない。ここでダミーのホテルを用意した事が功を奏した。そうでもしなければ、住居が爆破解体は本気で洒落になっていない。

だからこそ、自由に動けた。

綺礼の住居周辺には使い魔が飛んでいない。元より、さして警戒されていらないという事で優先順位が低いのだろうが、どちらにせよ、そ

れは好都合だった。

実に動きやすい。拠点を知られる事なく、堂々とした足取りで、綺礼は夜道を歩く。

こんな事ができるのは、父である璃正神父から他のマスターの元にアサシンが現界していないという事を聞き知らされているからに他ならない。やはり、アサシンの柙にアヴェンジャーが召喚された事の裏付けでもある。

ある意味、この聖杯戦争で一番警戒しなければならぬ相手——メイガス・マードー魔術師殺しの異名を持つ衛宮切嗣も、今の時点では自分を監視してはいない、と高をくくっていた。

同じ軌跡を辿ってきた以上、切嗣は同様に綺礼を畏怖し、最大限の警戒をするだろう。

それを綺礼も承知しているが、だからと言って、綺礼にばかり警戒を向けていれば他のマスターに不意をつかれる羽目になる。

まだ何も行動を起こしていない今は、意識の隅には置かれていても、その中心を占める事はない。

『どこに向かっていいるのです?』

行き先を告げられていないアヴェンジャーは、霊体化したまま、綺礼に問いかける。

「人目につかず、かつ戦場に適した場所だ。そろそろ、我が師も焦れてくる頃だろう。ここで一つ、私が戦局を動かそうというわけだ」

その言葉で、アヴェンジャーは察した。

今から自分は戦場に向かうのだと。

もちろん、戦になるとは限らないのだが、それでも何かしら、状況に変化が訪れるであろう事は事実だ。

『それは情報集めですか?それとも——獲りに行くのですか?』

「可能ならば獲りに行って構わん。だが、相手は一騎当千のサーヴァントばかりだ。そう易々と首は獲らせてもらえんだろう。特にアヴェンジャー。お前は並外れた剣技を持って武勲を打ち立てた英霊ではない。例え、能力は高くとも、技術の面では遅れをとる事もある。努力、それを忘れない事だ」

アヴェンジャーの逸話を鑑みても、戦士として優れていたと記されたものはない。

ならば、技術面においては戦乱の世を武勲を持って道を切り拓いてきた英雄達には劣るのは明白と言えた。

ましてや、能力に物を言わせた力押しが通じると言われれば、それも否。宝具による強引な突破なら或いは可能かもしれないが、それは一度きりだろうし、確実とは言い切れない。

『あら。私が負けると、あなたは良いんじゃないの』

「まあ、それはあるがな。いくら何でも最初に脱落するのはマズイだろう。初戦ともなると尚更な」

『……全く、面倒くさい「それにだ」……なんですか?』

「これでも、私は自分の呼び出したサーヴァントが一級のサーヴァントだと自覚している。そう易々と負けるはずがあるものか」

綺礼はそう言って不敵に笑う。

アヴェンジャーが自分をどう思っているのかはわからないが、綺礼は自分の呼び出したサーヴァントを信頼しているつもりだ。自分のサーヴァントにさえも疑念の目を向けるつもりはない。後ろから刺されるような事があれば、それは完全に自分の非だ。手段は選ばないつもりであるが、外道に堕ちるつもりは毛頭ない。

その言葉に、アヴェンジャーは……。

『はあ? キモい顔して何言ってるの、アンタ。言われなくても、負けるつもりなんてないわよ』

ガチトーンで綺礼に返した。

ドストレートな罵倒は綺礼の心に深く突き刺さるが、それがアヴェンジャーに知れると追い打ちを食らう。

何でも無いように前を向きなおして……民家の塀の上から飛び降りてきた猫が顔面に当たった。

……やはり、何でも無い事はなかった。

海浜公園の西側に隣接する形で広がるのは、無味乾燥なプレハブ倉庫が延々と連なる倉庫街。

港湾施設も兼ね備えたその区画は、さらに西の工業地帯を新都から隔てる障壁の役割も担っている。

夜になれば人通りも絶え、まばらな街灯が無益にアスファルトの路面を照らしている様が、より一層景観を空虚にしている。

人目を忍んで行われるサーヴァント同士の対決には、まさにうつつけの場所であった。

無人の大通りの真ん中でアヴェンジャーはその気配を惜しげもなく晒しながら、悠然たる態度で佇んでいた。

仮にアーチャーが敵であり、ギルガメツシユではないのなら、このような愚かな行為をする事はないだろうが、アーチャーは決して闇夜に紛れて狙撃してくるような者ではないし、現時点においては敵ではない。ならば、このような大胆な策も、アサシンの不在とアーチャーのマスターが同盟相手だとわかって以上、愚策ではない。

とはいえ、それを知っているのはあくまで綺礼と時臣の陣営のみ。アサシンの暗殺を警戒している他の陣営がこれに乗るか否かはつきり言って賭けだ。

出てこなければそれはそれで構わない。場所を変え、また同じようにするだけだと綺礼の発言に、アヴェンジャーは辟易していた。

確かに一騎当千のサーヴァントではない彼女は、伝承上の『旗の持ち手として兵を鼓舞した』というものとは別に『卓越した戦略家』だったのではないかと言われている。

それ故に、この策自体、成功するものと思っていなかった。

（こんな見え透いた挑発に乗るとしたら、余程の自信家か、馬鹿のどつちかでしょうね。まあ、どっちも一緒でしょうけど）

まだ暗殺の危険が蔓延る中でサーヴァント同士を闘わせる愚か者がいるとは思えない。

そう高を括つていたアヴェンジャー。

しかし……………いた。

アヴェンジャーは予想はしていたものの、信じられないとばかりに眉根を寄せた。

前方十メートル。

沸々と放つ法外な魔力は人ならざる超常の存在——サーヴァントであることの証拠であり、そのサーヴァントは、見え透いた挑発に乗って現れた。

癖のある長髪をぎっくりと後ろに撫でつけた、端正な男。右手に軽く握られた身の丈を超える二メートル余りの長槍と、左手に握られた三割ほど短い短槍。いずれも柄から刃先まで、びっしりと呪布らしき布が巻き付けられ、その実態を見る事は叶わない。おそらくは宝具としての真名を秘匿するためのものだろう。

そしてこの男の得物を見れば、三騎士の一つ、槍兵である事はすぐに察しがついた。

「驚いたぞ。まさか、練り歩くでもなく、そちらから誘いをかけてくるとはな」

「……………こちらも驚きました。まさか、本当に誘いに乗ってくるサーヴァントがいるなんて、思っていませんでしたので」

「主からの命令だ。獲物が自ら誘っているのなら、その首級を持ってこいとな」

「随分な自信家ですね」

かかったのは本当に馬鹿だったが、それよりも気になるのはこの槍兵から感じる鬱陶しい魅了<sup>チャーム</sup>。

嫌悪感を隠そうとしないアヴェンジャーを見て、ランサーは苦笑した。

「悪いな。これは持つて生まれた呪いのようなものだ。如何ともしがたい」

「生まれながらのハーレム体質ってわけ？はっ、これだから見境のな



「い男は」

「その様子だと、どうやら対魔力かそれに追随する物を持ち合わせているらしい。結構。この顔のせいで腰の抜けた女を斬るのでは、俺の面目に関わる。その腰に携えた剣と闘気を見るに、お前がセイバーと見受けるが……どうだ？」

「答えてやる義理なんてないわ」

この時ばかりは、アヴェンジャーであるにもかかわらず、何故か身についている対魔力に感謝した。それは程度の低いものであるが、ランサーのものもそう強くはないのだろう。僅かばかりの苛立ちも、戦いが始まれば気にならない程度のものであった。

腰から剣を抜き放ち、無造作に構えるアヴェンジャー。

ランサーもまた、それに合わせて、担いでいた右の長槍を一旋させて持ち直し、左の短槍も、またゆるゆると切っ先を持ち上げる。

両者ともに全く流儀の読めないものだった。まさしく『我流』と云ったところだろう。

しかし、同じ『我流』といえど、培ってきたものに圧倒的な差がある。

綺礼に言われるでもなく、アヴェンジャーは重々承知の上だ。

元よりこの身は戦士でも、純然たる英霊でもない。

けれども、アヴェンジャーは陰惨な笑みを浮かべた。

例え、戦士でなくとも、純然たる英霊ではなくとも。

自らは異端の英霊であるならば、その異端を以って相手を滅するだけだ。

今まさに。

本当の意味での聖杯戦争開始の火蓋が切られた。

## 戦場の歪み

闇夜に紛れ、二人のサーヴァントが演じている白兵戦を見届ける綺礼は、その光景に息を呑むばかりだった。

そこで行われているのは、謂わば前時代的な決闘。

剣を、槍を交えた。己が肉体を行使した命の駆け引きである。

けれどと、迸る魔力が、激突する熱量が違う。

ただ鋼と鋼が打ちあうだけで、破壊的な力の奔流が吹き荒れ、そこでテロに見舞われたかのような惨状となっていた。

これが聖杯戦争か……。

無意識のうちに出た言葉は、その脅威と驚愕を物語っていた。

なるほど。確かに彼らは神話、伝説の世界の住人だ。少なくともただの人間同士の戦闘でこうはなるまい。

予想はしていたが、それを遥かに上回る領域の世界。

瞬きすら許されないその状況で、静かに呼吸を整える。

——まだだ。まだあのサーヴァントの名を明かす時ではない。

綺礼はランサーの名を知っている。

その顔を見て、呪布に包まれている槍を見て、自分の知るサーヴァントとなんら変わりはないとわかった。

しかし、今の時点ではそれを自らのサーヴァントに伝えられないでいた。

自分のいる位置は二人の戦場から少しばかり離れている。注視すれば、顔が視認できるといったところだろう。声は風に遮られて聞こえることはない。

そしてかの槍兵の槍さばき。これに関して言えば、当然見えるはずもなかった。

仮にも英霊と呼ばれるものの絶技である。いくら綺礼が己が肉体を極限まで鍛えていようとも、その変幻自在で奇抜な挙動を捉えることは叶わない。

現在明らかになっっている皆無に等しい情報では、アヴェンジャーにそれを伝えたところで信じさせられるだけの材料がない。

(せめて、宝具を晒せば、それを理由に伝えられるのだがな)

当然、ランサーが宝具を晒すことはないだろう。あのマスターが焦れるまで、アヴェンジャーが持ちこたえるのを信じるしかない。

そして何より。

己が目的はそれだけではないのだから。

戦場から視線を外すと、綺礼はより深い闇に紛れた。

戦況ははつきり言って、ランサーの優勢だった。

それは始めからわかっていた事である。幾多の戦場を駆け抜けた騎士と、主に旗手として、或いは軍略家として戦場を生き抜いてきた者では、潜ってきた修羅場こそ同じであれ、踏んできた場数の質が違う。

まして、この槍兵は一本を両手で扱う常道の武器を、二本を駆使して両手で繰られるのに遜色ない速度と重さを誇っていた。それどころか、常道の槍術にはないために対処に困っていた。

攻め手に出ようにも、その槍術を超えられない。

いかな研鑽を積んだ槍術が。これほどの離れ業を可能とするのか。かろうじて、剣一本で凌いでいるアヴェンジャーだが、それは相手が未だ様子見に徹しているからに過ぎない。獲りに来れば、剣一本で凌ぐことなど到底出来はしないだろう。

「どうしたセイバー。よもや、その程度とは言うまい」

挑発を含んだ笑みに、アヴェンジャーは思いの外冷静だった。

いつもなら怒りの炎が燃え滾るところではあるものの、出し惜しんでいるのは自身も同じである。

出来る事ならば、ここはごちらの手を明かさずに乗り切りたい……が、それを相手のマスターが許すはずもない。仮にこれがアヴェンジャーの全力だと勘違いしたのなら、確実に獲りにくるだろう。

「いいでしょう。ならば、我が憎悪の一端。見せてあげましょう」  
アヴェンジャーの持つ剣が黒い魔力を迸らせる。

(来るか……いや)

一瞬、真名解放による宝具の一撃を警戒したランサーだが、それ程の高まりを感じない事に、アヴェンジャーが宝具を使用しない事を悟った。

ようやく二度目の攻めにアヴェンジャーが出た。

ランサーはアヴェンジャーがどのような手を打ってくるのか、警戒と期待を抱きつつ、その一撃を長槍を以って受け流すと、内心落胆した。

魔力が込められ、先ほどよりも重さも速さも上がったように思える。本気で無かったのは相手も同じである。その一撃は確かにランサーが正面から受け止めるには、いささか分が悪いだろう。

しかし、それだけだ。

受け止められなければ、流せばいいだけのこと。

相手の方が力が上だとわかっているのに、力勝負に出るほどランサーは馬鹿ではない。力が劣っているなら、その技量で以って絡め取るまで。

その一撃を難なく流すと、ランサーは左の短槍で、アヴェンジャーの喉笛を一突きに――。

「ッ!」

瞬間、ランサーの真上から幾つもの槍が降り注いだ。

それに気づくことができたのは、幾多の戦場を生き抜いてきた戦士としての『勘』だろう。一瞬でも気づくのが遅ければ、落胆を秘めた内に、その代償として命を差し出す事になっていた。

ここに来て、初めてランサーが後方に退いた。

槍を掠めた腕に一筋の傷が生まれる。完全に回避とはいかなかった。

それ程までにアヴェンジャーの攻撃は完璧だった。

ランサーの瞳が微かに落胆の色を帯び始めていたのをアヴェンジャーは感じ取っていた。だからこそ、わざわざ大ぶりかつ隙が生まれるように剣を振るったのだ。殺すことはかなわなくとも、手傷の一つも負うだろうと思っていたアヴェンジャーにしてみれば、この結果はあまり良いとはいえない。

手の内の一つを晒したというのに、擦り傷一つ。そして槍兵は僅かに持っていた油断というものを捨て去るだろう。差し引きはマイナス、といったところだ。

「……どうやら、お前の手の上で転がされていたらしい。甘かったのは俺の方だな」

槍兵の中にあつた僅かな油断がこの瞬間に消えて無くなる。

何の前触れもなく——否、前触れがあつたとすれば、それはアヴェンジャーの剣に黒い魔力が迸った時だが、どちらにせよ、ランサーには一体どの場面であの無数の槍が出現したのか、全くわからなかった。真上への警戒が他に比べ薄かったというのも幾分かあるかもしれないが、あれ程の禍々しさを放つものをそこまで悟らせないというのは、何か仕掛けがあるに違いない。

（剣技こそ、目を見張るものではないが、これはなかなか……）

最初の敵を前にして、予想を裏切られた事で死力を尽くした激闘を予感し、その血の滾りに悽愴な笑みを浮かべた。

対してアヴェンジャーは忌々しそうに舌打ちをした。

アヴェンジャーは戦士でもなければ、騎士でもない。

故に、戦とは忌避すべきものであるし、嫌悪するものだ。クラスは違えど、そのあり方は違えど、決してアヴェンジャーが闘争を好む事はない。今の彼女には忌避する理由も、嫌悪する理由も、『ひどく面倒』の一言に尽きるが。

（まだなのかしら。あの似非信徒。早くこいつの真名看破しなさいよ）

アヴェンジャーは、綺礼に渡された小型の通信機の役割を持つ魔術礼装が、未だ何の反応も示さないことに苛立ちを感じていた。もつと

も、それは元々の通信機をアヴェンジャーにも使いやすく配慮したものであるため、殆ど魔術礼装というよりは科学に近いものがある。

小手調べではなく、獲りにいく事が許可されているとはいえ、先陣を切って戦うサーヴァントではないと自負がある。

真名さえ分かれば、綺礼を引き連れてさつさと退散をする腹積もりであるのだが、未だその命令は下らず、それどころか――。

『戯れ合いはそこまでだ。ランサー』

どこからともなく響き渡る冷淡な声。

それは綺礼のものではない。

そして綺礼のものでない、となるのなら、残るはランサーのマスター以外にありえない。

声は不自然な反響を行い、男か女か、それどころか発信源すらわからないように偽装されている。あくまでもランサーのマスターは敵の前に姿を見せない腹つもりでいるのは明白だった。

『これ以上、勝負を長引かせるな。そのセイバーは、思った以上に難敵。他のサーヴァントと三つ巴になるのも厄介だ。速やかに始末しろ。――宝具の開帳を許す』

「了解しました。我が主よ」

見えざる魔術師の言葉に、ランサーは肅然と声を落として、武器の構えを改めた。

左手に持っていた短槍を何の未練もなく足下に放り捨てる。

（つて事はあの長いほうが本命ってわけね）

アヴェンジャーが凝視する前で、ランサーの右手の長槍から、呪符の緊縛がはがれ落ちていく。

それは深紅の槍だった。さつきまでとは桁違いの魔力が、不吉な蜃気楼のように、ゆらり、と槍の穂先から立ち上る。

「――そういうわけだ。ここから先は殺りに行かせてもらう」

ついに露わになった得物を、今度こそ両手に構え直して、ランサーは低い声で呟いた。

こちらの方が本命だというのなら、アヴェンジャーはこれまで以上に苦戦を強いられるだろう。

おまけに相手の宝具の効果もわかっていない以上、迂闊に飛び込むわけにはいかない。

さて、どうしたものか。

「より一層警戒の色を濃くしたアヴェンジャー。」

——と、その時。

『アヴェンジャー。聞こえるか。聞こえるのなら、一步後ろに下がれ』  
綺礼の声が、すぐ耳元で聞こえる。

もちろん、綺礼の姿はそこにはなく、それだけの声量があるわけでもない。ただ、そういう風に改良が施されているだけだ。アヴェンジャーとしては酷く不快であるものの、その有用性は確かだ。

言われるがまま、アヴェンジャーは一步後ろに下がる。

それに対し、幸いにもランサーは相手が間合いを測っているのだと勘違いしたらしく、ゆっくりと距離を詰めた。ここで仕掛けられれば、綺礼の言葉はもう邪魔でしなくなってしまう。

『そのランサーの真名はデイルムツド。フィオナ騎士団、随一の戦士。輝く貌のデイルムツドだ』

宝具を解放した途端、自分のマスターが告げた朗報にアヴェンジャーは目を丸くした。

早く真名を暴けとは思っていたが、今の時点での赤い長槍の正体はわからないし、ともしれば黄色い柄を持った短槍も呪符に包まれたままだ。真名を暴くにしては情報が少なすぎる。

と、抗議したいのは山々であるものの、生憎とこれは一方的に聞く手段しか持ち合わせておらず、なおも綺礼は続ける。

『今は古き時代とは違う。科学の発展した現代において、少ない情報でも真名は導き出せる。戦争である以上、使えるものは全て使うのが私の流儀だ。無論、外法に手を染めるつもりはないがな』

要約すると『勝つためには手段は選ばない。下衆なことはしないけど』という事である。

これは本気で信徒としてどうなのだろうか、外道にさえ染まらなければアリなのか。場違いな事を考えつつも、なるほど、聖杯戦争において科学の使用を禁じられているわけでもなし、それで真名がわかる

のならば安いものだ。とアヴェンジャーは割り切った。

そして真名が分かった以上、ランサーの持つ長槍も、足下に落とされた短槍も、その効果は露見している。しかも、相手に悟られていない形で、だ。

これはかなりのアドバンテージと言える。相手が『真名を知られていない上で立てた戦術』に対し、アヴェンジャーは裏をかかれる事がなくなった。それどころか、その戦術を逆手に取る事すら可能となっている。

ニヤリと笑い、アヴェンジャーは先程のように黒い魔力を剣に迸らせる。

ランサーは、それを見て一瞬目を細めるが、同じ手を二度は食わなれないという意思の表れか、仕掛けてきたかと思うと、これまでの曲芸めいた変幻自在な槍の舞いに比べ、いつそ愚直にすら思える一直線の突き込みを放ってきた。

それはアヴェンジャーでも何の苦もなく打ち払える代物であったが、ランサーの目論見は既に看破していた。

ランサーの持つ赤槍。その名を『破魔の赤薔薇』。

その穂先に触れた魔の類を無力化する槍である。

アヴェンジャーが先程出現させた槍が、黒い魔力を依代にしているのなら、打ち払った瞬間にその魔力を霧散させ、続く二撃でその心臓を穿つ。ランサーの狙いはそれだった。

呼び出されたサーヴァントは各々が己が生前着用していた鎧や甲冑、服装に身を包んでいるが、それらは当然現世のものではない。

聖杯を通じてサーヴァントが呼び出された以上、その装備も魔力で編まれたものとなる。

無論、宝具などは別の代物であるし、アヴェンジャーが今使用している剣もそれらに近いものである。

故に魔力で編まれたアヴェンジャーの鎧はランサーの槍を前にしては紙屑同然である。

だからこそ、ランサーの宝具は初見において、相手の虚をつく事が可能であるが……。



ランサーの槍を阻んだのは、アヴェンジャーの剣ではなかった。その一撃を阻んだのは、アヴェンジャーであるのは当然の事。しかし、アヴェンジャーの剣は槍を阻む事なく、振り上げられ、ランサーに迫っていた。

すぐさま槍を引き戻し、剣を捌くランサー。剣を迸る魔力は霧散し、アヴェンジャーの目論見は外れた……かに思えた。

ランサーを救ったのは、痛みに対しての反応の速さであった。

剣を止める槍をそのままに、ランサーは体を横にずらす。まさしく間一髪といったところだろう。襲ったのは、まごう事なき、槍の一撃だった。

コンクリートの下から突き出るように出現した三本の槍。

先の剣の一撃に対し、ランサーが回避を選んでいたのなら、そこには串刺しにされた一人のサーヴァントがいた事だろう。

咄嗟に跳躍し、距離を置いたものの、しかし、その傷は擦り傷とは言い難い。

致命傷でないが、浅い傷でもない。

ランサーは、数メートル先にしたり顔で立つアヴェンジャーに問うた。

「……それも、お前の宝具か。セイバー」

ランサーが指摘したのは、アヴェンジャーの右手に握られた凡そ武器とは呼べない代物だった。その上部を白い布で包まれた先端が鋭利になっている代物。

それは槍に見えなくもないが、それにしてもは装飾であろう布が大きすぎ、自分を貫いた槍の方がまだ実用的である。

すぐにランサーの傷はマスターによって治されるが、痛みはそう易々と消えるものではない。

違和感に苛まれながらも、ランサーは槍を構え直した。

仕切り直し、といったところであるが……アヴェンジャーはそうでなかった。

(もう退き時よね。相手の真名もわかったし。これで他の陣営も動くでしょう)

臨戦体勢を崩さないものの、後は綺礼からの指示を待つのみだった。

——その時、不意に轟いた雷鳴の響きに破られた。

「ツツ!」

ともに、東南方向の空を振り返るアヴェンジャーとランサー。

轟音の元は明らかだった。もつれ合う紫電のスパークを夜空に撒き散らしながら、こちらをめぐがけて一直線に空中をかけてくるそれは、古風な二頭立ての戦車だった。

轅に繋がれているのは軍馬ではなく隆々と筋肉をうねらせる逞しくも美しい牡牛。その蹄が虚空を蹴って、壮麗に飾られた戦車を牽いてくる。そしてその度に戦車の車輪が、蹄が、紫電を蜘蛛の巣状に閃かしていた。その都度迸る魔力は、アヴェンジャーやランサーの繰り出す一撃を優に上回るものだろう。

これ程の怪異、魔力の放出が、宝具でなくてなんとするのか。

雷電に乗った戦車は、居丈高にアヴェンジャーとランサーの上空を旋回すると、それから速度を緩めて地上へ降り立った。対峙していた二人の英霊のちようど真ん中。両者の矛先を阻む位置である。着地と同時に目映い雷光が収まり、御者台に立ちはだかる威風堂々たる巨漢の姿が露わになった。

「双方、武器を収めよ。王の御前である!」

やおらそう吼えた大音声は、雷鳴にも匹敵するものだった。

炯炯たる眼光は、その気迫だけで対峙する剣と槍の切っ先を押し返さんばかりの圧力である。

もちろん、アヴェンジャーやランサーも有象無象の英霊ではない。怒鳴られた程度で威圧される器ではない。ランサーは乱入者の意図を判じかねて躊躇し、アヴェンジャーは一先ず対決を中断してくれた事には感謝しつつもあまりの声のデカさに顔を顰めた。

一先ず、両名の氣勢を削いだところで、巨漢の御者は厳かに先を続ける。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

居合す二人と、そして隠れていた者達が今度こそ呆氣にとられた。まさか攻略の要たる真名を自ら名乗るサーヴァントがいるなど誰が考えようか。

アヴェンジャーだけでなく、ランサーさえも、ライダーの正気を疑った。バーサーカーでもないのに、理性が飛んでるんじゃないかと。

しかし、その誰よりも動転したのは、ライダーの隣で御者台に蹲っていたライダーのマスターだった。

「何を——考えてやがりますかこの馬ッ鹿はああ!!」

金切り声で喚きながら、征服王のマントに掴みかかるが、非情のデコピンが夜気に鳴り、抗議の声は沈黙に沈んだ。その様子はアヴェンジャーでさえも、憐憫の眼差しを送る程だ。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが……矛を交えるより先に、まずは問うておくことがある。うぬら各々が聖杯に何を期するのは知らぬ。だが今一度考えてみよ。その願望、天地を喰らう大望に比してなお、まだ重いものであるのかどうか」

「それを聞いてどうするつもりですか？我々の願いを聞いたところで、あなたには関係ないはずですよ」

「それはそうだがな。……うむ、少々回りくどかったか。端的に言うのだな」

ライダーは威厳だけはそのままに、妙に飄々と碎けた口調に切り替わった。

「ひとつ我が軍門に降り、聖杯を余に譲る気はないか？さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を征する快悦をともに分かち合う所存でおる」

「………あんた、底抜けの馬鹿じゃないの？」

あまりにも突拍子もない提案に、感情が昂ぶってもいないどころかむしろ冷めきっているにもかかわらず、アヴェンジャーは素でそう返した。ランサーもまた話についていけず途方にくれるばかり。

征服王イスカンダル。確かに破格の英霊だが、こんな別方向にもぶっ飛んだ人間なのかと思うばかりである。英断なのか愚拳なのか、

それすらも判じ難い。

「先に名乗った心意気に、まあ感服せんでもないが……その提案は承諾しかねる。俺が聖杯を捧げるのは今生にて誓いを交わした新たな君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞ、ライダー」

「聖杯云々はともかく、あんたみたいな脳筋も良いところの、征服馬鹿の下につくなんて死んでもごめんだわ。それならまだあの似非神父の方がミジンコ分マシよ」

「……待遇は応相談だが？」

「くどい（のよ）！」

なおもおもねるように申し出るライダーを、アヴェンジャーとランサーは声を揃えて一蹴した。

「こりやー交渉決裂かあ。勿体無いなあ。残念だなあ」

そうぼやきつつ、ライダーの視線はある一点に向けられる。

「なあ、そこにいるやつ。貴様はどうだ？こそこそしとらんで、姿を見せたらどうだ？」

ライダーが誰もいない、未だ辛うじて原型を留めている倉庫の一角に言葉を投げかける。

それで漸くアヴェンジャーとランサーも気づく。真剣勝負に続いて、あまりにも破天荒すぎるライダーの所為で、周囲への警戒がやや散漫になっていた。そちらに意識を向けると、確かに。そこには秘しているものの、サーヴァントの気配があった。

「——これはすまない。私も、出る機会を伺っていましたが、騎士の闘いに横槍をいれるのは憚られる。こうして身を晒す機会を与えてくれた事に感謝する。征服王」

姿を見せたのは、黒いスーツに身を包んだ男装の麗人。

身長百五十センチ台半ばの少女が着るには、いささか無理があるかと思いきや、その少女が纏うとなるともはや絶世の美少年とも言える。

そしてその後ろには明らかに人間とはかけ離れた容貌の女性。おおよそ、日本のものではないということが容貌は疎か服装にさえも現れていた。

「そこにいるのがセイバーとランサー、余がライダーであるとする……その清廉な闘気はアーチャーか？とても暗殺者や魔術師には見えぬが」

「いや、私がセイバーだ。征服王」

その一言にランサーとライダーが怪訝そうな表情で唸り、アヴェンジャーを見やる。

当のアヴェンジャーはと言うと何処吹く風。ただ一言。

「私は『答える義理なんてない』としか言つてませんよ」

と答えた。

確かにアヴェンジャーは一言として自らをセイバーとは称していない。ただ、剣を主な武器として闘つていただけに過ぎない。だからこそ、ランサーや遠くで見物していたライダーはセイバーと勘違いしたわけだが。世の中には剣で戦うアーチャーや最強技が物理なキャスターもいるので、別におかしくない。

「貴様が本当のセイバーか？ ならば、うぬがアーチャーか？」

「私が弓兵に見えますか？」

言外に否定するアヴェンジャーに、ライダーもまた頷く。確かにアーチャーには見えない。かといってアサシンやキャスターにも見えないのが一層困らせるが、クラスなど瑣末な問題であるとライダーはセイバーに意識を向ける。

「セイバー。うぬはどうだ？ 余の臣下となる気はないか？」

「名を明かさぬとはいえ、征服王。貴様の誘いには乗れない。いかな大王といえど、臣下に降るわけにはいかぬ」

「むう……」

今度こそ、ライダーは押し黙った。

それもそのはず。

ライダーは本気で臣下に出来るとは思つていなかった。所謂ものは試し、というやつである。

真名をものは試しでバラされたマスターの方、ウェイバーは堪ったものではない。というか、実際に非力極まる両手の拳でポカポカと連打をくれながら泣きじゃくっている。その光景は哀愁すら誘つてい

た。

『そうか。よりにもよって貴様か。ウェイバー・ベルベツト』

微妙にした空気が、低く地を這うような怨嗟の声によって、再び凍りついた。

発信源は、未だ姿を現さぬランサーのマスター。殆ど口を挟んでこなかったかのマスターが、先刻とは打ってかわって、何か曰くがあると思えない憎悪の念を剥き出しにしていた。

『いったい何を血迷って私の聖遺物を盗み出したのかと思ってみれば——よりもよって、君自らが聖杯戦争に参加する腹だったとはねえ』

「あ……う……」

『残念だ。実に残念だなあ。可愛い教え子には幸せになってもらいたかったんだがね。ウェイバー、君のような凡才は、凡才なりに凡庸で平和な人生を手に入れられたはずだったのにねえ』

幻覚で攪乱されて、声の出所はわからないにもかかわらず、ウェイバーはもう幾度味わったか知れない胃の腑の反り返る感覚をランサーのマスター、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトの酷薄な細面の、侮蔑と憐憫の入り混じった碧眼が、頭の上からじっと自分のことを見下ろしてくる感覚を、まざまざと再体験していた。

こんな戦場のど真ん中にサーヴァントに引きずってこられた挙句、意趣返しをした相手に遭遇する。こんな酷い目にあっているマスターもなかなかいないことだろう。全部自業自得とはいえ、本当に哀れとしか言いようがなかった。

『致し方ないなあ、ウェイバー君。君については、私が特別に課外授業を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺しあうという本当の意味——その恐怖と苦痛とを、余すことなく教えてあげるよ。光栄に思いたまえ』

ケイネスの言葉に、事実としてウェイバーは恐怖に身を竦ませ、死を観念するということを事ここに至ってようやく身にしみて味わっていた。それほどまでにどこからとも無く浴びせられるあの男の視線はおぞましく致命的だった。

しかし、その独り恐怖に震えていた少年の小さな肩を、その時、優しく力強くライダーの手が包み込んだ。

「おう魔術師よ。察するに、貴様はこの坊主に成り代わって余のマスターとなる腹だったらしいな。だとしたら片腹痛いのう。余のマスターたるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ。姿を晒す度胸さえない臆病者など、役者不足も甚だしいぞ」

返ってくる言葉はないが、確かに姿なき者の怒りだけが夜気を伝播する。ライダーは呵呵と剛胆に大笑すると、今度は誰にともなく夜空に向けて大音声を張り上げた。

「おいこら！ 他にもおるだろうが。闇に紛れて覗き見しておる連中は！」

地味にその言葉が耳に痛いセイバーは、苦笑して頬をかく。

別に盗み見していたわけではない。アヴェンジャーの気配に誘われて来てみたものの、そこでは既にアヴェンジャーとランサーが交戦していたために、姿を見せては騎士の闘いに水を差してしまう。それはセイバーとして、本意ではなかったために機会をうかがう羽目になり、結果ライダーが割り込むまでずっと息をひそめる事になってしまった。

「聖杯に招かれし英霊は、今！ ここに集うがいい。なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものと知れ！」

ライダーが吼えた後、黄金の光が姿を現した。

金色の輝きは地上十メートルあまりの高さに佇立する街灯のポールの頂上に、輝く甲冑の立ち姿となって現界した。

ここには今、セイバーとランサー、ライダー、クラスが知られていないアヴェンジャーが存在する。

全身をくまなく甲冑で覆った重装は、キャスターとは思えず、またライダーの呼びかけに応じた以上、アサシンでもなければ、応えるだけの理性があるためにバーサーカーでもない。そしてアヴェンジャーがアーチャーではないと断じた以上、必然的に残るのは三大騎士クラス最後の一つ、アーチャー。

「我を差し置いて『王』を称する不埒者が湧くとはな」

開口一番、黄金の英霊はさも不愉快げに口元を歪め、眼下に対峙する四人のサーヴァントを侮蔑の込められた視線で睨みつける。

「おまけに、なんだ貴様は。よもや貴様のような贗作までいようとはな」

アヴェンジャーに視線を向けたアーチャーはより一層嫌悪感を露わにし、そう吐き捨てる。

アヴェンジャーはすぐに気がついた。アレが綺礼の言っていたサーヴァント。同盟を組んでいる時臣が使役しているアーチャーであると。

とはいえ、アレがはたして使役されている、という状況を素直に受け入れそうもないのは誰の目にも明らかだった。

すぐに綺礼から窺めるような言葉が飛んでくる。

『アレは師のサーヴァントだ。多少は苛立つかもしれないが、大目に見てくれ。頼むから』と。

アヴェンジャーとて、子どもではない。

同盟の相手ともなれば、少しは大目に見るし、アレの正体は英雄王と知っている。迂闊にちよっかいを出せば、問答無用で殺しにくるだろう。その時、自分がアレを相手に真つ向から勝負を挑めるか、と問われればなんとも答えにくい。

おまけにマスターから駄目押しときた。ならば――。

「はあ？ 初対面の相手に対していきなり贗作とか失礼じゃない。原初の王様は礼儀知らずなのかしら？ それとも、それを指摘してくれる友達いなかったの？」

明らかに馬鹿にしたような発言に世界が凍った。凍りついた。

天邪鬼精神のアヴェンジャーにとって、『敵対するな』なんて念を押されれば、もうこれは敵対してくれと同義である。元より綺礼の言うことなんてこれっぽっちも聞いてやるつもりは無いのだ。お願いされたからには絶対に裏切る。

「贗作の分際で……王たる我を愚弄するか――！」

瞬間湯沸かし器とはまさにこのことだろう。



一瞬で怒髪天を衝き、憤怒の形相を浮かべるアーチャー。少しからかうだけで予想以上のリアクションを見せるアーチャーに、アヴェンジャーは『何こいつ、超面白いんだけど』とほくそ笑んだ。無論、それらは死と隣り合わせであるが。

通信機越しに綺礼の悲鳴のようなものが聞こえたものの、アヴェンジャーはそれを気にとめることはなかった。

## 早過ぎる激突

「アヴェンジャー……余計な事を言うなどあれほど言っておいたのに……！」

アヴェンジャーの挑発に、それによる英雄王の激怒。

綺礼は頭を抱えていた。

ランサーとの戦闘。さらにライダーの乱入と、アヴェンジャーの誘いで引き寄せられてきたセイバー。そしてライダーの呼びかけに結果的に応じた形になったアーチャー。

ここまではほぼ想定内。イレギュラーがなければ、こうなる事は大体予想できた。

特にランサーに関しては、マスターがああロード・エルメロイ。自信に裏打ちされた実力を持ち、生粋の魔術師だ。どちらかといえば研究者としての側面は強いものの、この聖杯戦争において一、二を争う実力者だ。それ故に人を見下す傾向があり、今回の聖杯戦争も時臣ぐらしいかマトモに相手にしていないだろう。自信は過ぎれば慢心になる。それを含めても、綺礼に正面から勝てる見込みは無いが、やりようはいくらでもある。

だからこそ、誘いに乗るのは必ずロードだとわかっていたし、こうなる事も大方予想はついていた。

予想外だったとすればアヴェンジャーがランサーに技術的な面では押されていたものの、裏をかく形で戦況を有利に運んだことだ。

正直言つて、もつと苦戦し、最悪令呪を使つての撤退も視野にいれていた。伝承や逸話を鑑みても、到底アヴェンジャーがランサーと白兵戦において勝利できると考えていなかったからだ。

ライダーの乱入がなければ或いは、勝利を収めていたかもしれない。

もちろん、その保証はないが、それだけの実力をアヴェンジャーは綺礼に見せた。

（いや、勝つことが目的ではない。あくまでも生き残ることが目的だ。アヴェンジャーの実力が高い事は嬉しい誤算だが……出来れば、奴に

は令呪これを使いたくはない)

右手の聖痕を見て、綺礼は思う。

もし最後まで勝ち残るようなことになれば、アヴェンジャーには令呪で自害を命じなければならぬ。

それは仕方のないことだ。仮に最後に残ったのが綺礼と時臣の陣営、ギルガメッシュとアヴェンジャーになれば、十中八九負ける。マスターもサーヴァントもだ。

いくら綺礼が肉体を鋼のように鍛え、異端の徒を駆る執行者として優れた代行者だとしても、魔術師として優れているわけではない。魔術戦になれば時臣に綺礼が勝てるわけがない。何せ、彼の師であり、そも敵対すること自体を考えていなかった綺礼は時臣に隠れて別の魔術の鍛錬をしていたわけではない。というか出来ない。

それを分かった上で敵対するほど馬鹿ではない。理想的なのはどこかでアヴェンジャーが敵のサーヴァントと相打ちないし、それに近い形で敗北すること。

(ふっ……外道に墮ちるつもりはない……か。これではそう大差ないな)

自らの手を汚さずに、恨まれずに目的を果たそうなどとしている自分に綺礼は自嘲めいた笑みを浮かべる。

これではアヴェンジャーが言うことを聞かないのも無理はないだろう。自分だけ安全なところから高みの見物を決め込み、サーヴァントに戦わせ、剩え聖杯は与えないなど、普通に考えれば令呪を使わない限り使役することはかなわない。

「……少しは身体を張るか。今のうちに消しておきたい人間もいることだしな」

首から下げたロザリオを握りしめた後、綺礼は懐に入れてあった黒鍵の柄部分を取り出す。

聖堂協会の代行者が使用する特徴的な投擲武器で、その刀身は魔力によって生成される。基本装備ではあるものの、その扱いは非常に難しいとされ、綺礼自身もすでに体に馴染んだそれを寸分違わず再現するのは半年も費やした。

綺礼はそれを右手の指全てに挟み込むと無雑作に投擲する。

だが、それは無雑作にしては綺麗な弧を描き、数メートル先の標的に直撃……する前にかわされる。

「やはりそう簡単には取らせてはもらえんか。流石は魔術師殺し。不意打ちをされた時の対処法も心得ているというわけか」

標的たる人物——衛宮切嗣はワルサーWA2000を投げ捨て、懐からトンプソン・コンテNDERを抜き放ち、綺礼に向けて構えていた。「狙いはランサーのマスターか？確かに、魔術師ならば狙撃に対する警戒はしていないだろうな。特にロードともなれば、科学は忌避して当然だろう」

綺礼の問いに切嗣は何も答えはしない。元よりそんな言葉は持ち合わせていないとばかりにただ視線を綺礼に向けたままだった。

「どうした。何か言ったらどうだ？或いは今生の最後の言葉になるかもしれないぞ」

銃口を叩いてはいるものの、向けられた銃口から視線を外さない。何故ならアレの破壊力を綺礼は知っている。

放たれる弾丸は自動防御とはいえ、あのロードの礼装を突破し、彼の起源である『切断』と『結合』の効果を有した弾丸は、全ての魔術師を人としても、魔術師としても再起不能に追い詰める。衛宮切嗣を「魔術師殺し」たらしめる、まさに必殺の礼装である。

それは鋼の肉体を持つ綺礼も例外ではない。事実、原作において、その弾丸を右手で庇った綺礼はただの一撃で粉碎されている。

だからこそ、黒鍵は使わない。アレの刀身は魔力で出来たものだ。弾こうとすればたちまち魔術回路がズタズタに引き裂かれる。

(流石に……自慢の礼装は持っていたか。暗殺をするなら必要最低限の装備だと思っていたが……甘く見ていたな)

少しばかり早計だったかと内心で後悔しつつも、それでもここで逃すわけにはいかない。

綺礼だけではない、時臣にとっても、この男は厄介極まりない人物だ。魔術師然とした時臣が切嗣に到底勝てるわけがない。魔術師として優れているほど、切嗣との相性は悪くなる。

だからこそ、綺礼が切嗣の相手をするしかない。例えセイバーを屠ろうとも、切嗣は他のマスターを殺して、サーヴァントを奪い取るだろう。そういう男だ。

対する切嗣もまた、自分を嗅ぎつけた相手を睨みつけるように見据えていた。

切嗣がここに来たのはほんの十分ほど前だ。

先にサーヴァントの気配を感じて辿り着いたアイリスフィールの発信機の信号に導かれて、夜の倉庫街に駆けつけた切嗣と、助手であり彼を支えるパーツである久宇舞弥は、距離を隔てた位置から戦況を見極め、隙を見て敵のマスターを狙い撃つのが目的だった。

元より霊的存在であるサーヴァントに傷を負わせることができないのは、神秘を宿したものに限られる。ワルサーWA2000にどれほどの火力があろうとも、サーヴァントには豆鉄砲ほどの効果もない。

監視には絶好の位置であるデリッククレーンも、他の監視者が現れることを予期して、あえてデリッククレーンを見張れる位置に切嗣と舞弥は陣取り、アヴェンジャーとランサーの戦いを見届けていた。

アヴェンジャーのマスターの姿が見えない事に警戒を抱きつつも、ランサーのマスターを狙撃しようとした直後にライダーの乱入。タイムリングを完全に逸した事で静観を決め込む羽目になった。

早々に現れたアーチャーとアヴェンジャーが対立したのは僥倖だったが、その強烈な殺気に紛れて、接近していた綺礼の存在に気づくのが遅れてしまった。綺礼がほんの一瞬放った殺気に気付いたのは幸いだっただ。あと少し気づくのが遅れていれば、串刺しになっていただろう。

気づいたところで分が悪いのは確実に切嗣の方だった。

最大の武器こそ持っているものの、牽制用に見えるキャリコム950はこの場に持ってきておらず、狙撃用のワルサーはとても実戦向きではない。あんな取り回しの悪いものを対人戦に用いるなど自殺行為だ。

そして何より、切嗣はこうして正面からの戦闘を避けるタイプであり、相手を知り尽くした状態でない限り、敵前に姿を現わすことはな

く、先程までのように意識の死角から相手を殺す事に長けた人間だ。故にタイミングとしても、切嗣にとつては最悪。代行者としての実績を残している綺礼の脅威こそ知れど、その戦術、戦略が全く予測できない上に推し量ることができる装備ではない。

切嗣が仮に魔術師としても優れた人間であるのなら、或いは綺礼を攪乱し、その場から逃げおおせることもできたのかもしれない。

だが、切嗣は決して優秀な魔術師というわけではない。魔術を手段としてしか見ず、それ故に魔術師の心理的盲点を利用した殺害を行っていた人間だ。当然、魔導を極めるつもりなど欠片もないために綺礼を魔術戦で圧倒する事はかなわない。

ならば、切嗣が見極めるのは相手を殺すことではなく、相手の隙を ついて逃走するための手段。

切嗣の足が一步、後ろに下がる。

こちらで不測の事態が起きたことは、既に反対側に移動していた舞 弥にも伝わっているだろうが、すぐに駆けつけることは出来ない。時 間稼ぎに費やすよりも、逃走する方がよほど建設的だろう。令呪によ る己がサーヴァントーセイバーの強制転移による召喚は論外だ。 その時はセイバーのすぐ隣にいるアイリスフィールが全くの無防備 となる。現時点ではアイリスフィールがセイバーのマスターだと思 われている以上、そこにサーヴァントもなく立っている状況を他のマ スターが許すはずもない。

もつとも、令呪による召喚自体を綺礼が許すはずもないが。

予備動作を含めコンマ八秒。

恐るべき速さで抜き放たれた黒鍵は、左右から切嗣の退路を断つよ うにして迫る。

ー速い！

警戒を怠っていたわけではない。

綺礼の動作にあまりにも無駄がなく、あまりにも早過ぎた。ただ、 それだけのことだった。

しかし、驚きに反応を遅らせたのは僅かのことです、すぐさま切嗣は 自らの魔術回路を起動させ、詠唱する。

「Time alter world double accelerate！」

瞬間、世界全てが停滞したかのように全ての動きがスローモーションになる。

「否、停滞したのではなく、術者である切嗣が加速したのだ。」

自らの体内を固有結界とし、術者の時間を文字通り加速ないし停滞させるのが固有時制御。それ自体に殺傷能力はなく、効果が解除されれば世界の修正力によりフィードバックがその身に返る。そのダメージは変化した速度によりけりではあるが、切嗣はそんな事を気にも留めない。退路を断つように正面から無手で迫っていた綺礼に倍速のままに迫る。

切嗣の固有時制御を、知るものは殆どいない。

今まで切嗣が屠ってきた相手は数知れず。けれども、誰一人として標的になったもので生き延びたものはいないのだ。

故に彼がどのような手段、方法を用いたのかは所詮第三者の目からでは知ることが出来ない。

それを綺礼が知り得るはずもない。凶らずも奇襲を仕掛ける形になったことで、切嗣はすぐさま戦略的撤退ではなく、撃退に切り替え、綺礼の眉間にコンテナダーの照準を合わせ、引き金を引く。

その距離にして僅か3メートル。発砲からの回避はまず不可能であり、その魔弾から綺礼は逃れる術を持っていない。

そう、逃れる術は。

綺礼は表情一つ変えず、魔装の凶器と化している肘先で螺旋を描き、竜巻を生まんばかりの勢いでねじ上げられたその腕の動きはまさしく『纏』の化勁だった。

本来ならば敵の拳を巻き取って流すだけの受け技で、初速毎秒二千五百フィートの弾丸を弾く術も、綺礼を守る術も持ち合わせてはいない。

だが、綺礼はそれを何も弾くつもりも守るつもりもなかった。

ただその弾丸が眉間から、己が命を刈り取る軌道から、逸れればいいだけのことだ。

魔術も、令呪も使用していない。あるのはこの時のためにつけてお

いた神秘も何もない硬さに特化しただけの手甲と、純粹な膂力だけのそれは、とても軌道を完全に変えるだけの力はなく、寧ろ拮抗するでもなく眉間ごと頭部を吹き飛ばしかねないものだった。

しかし、そんなことはわかっている。令呪二画を使用してようやく軌道を完全に逸らせる代物だ。いくらその一撃を防ぐために作らせた手甲をつけているとはいえ、それが気休めであることも十分わかっている。

「う、ぐおおおおおおおー」

結果、その手甲を凹ませ、軌道をずらした弾丸は肉を裂き、骨を砕いた。ついに綺礼の頭部を吹き飛ばす事はなかった。

その代わりに左手から肩口にかけて直進する弾丸は、彼方へと飛んでいく。

左腕はもうこの場では使えない。だが、それに見合う結果を得た綺礼の直進は止まらない。

眼前にまで迫った綺礼は、全力の拳打を放つ。狙うは心臓。治癒の術を持たない切嗣には必殺の一撃たり得る。

奇しくも二倍速の解除に合わせて放たれた一撃は、切嗣に詠唱の暇を与えない。

咄嗟にコンテナーを持たない左手で庇うように防御するが、拳が触れた瞬間、まるで鉛細工のように腕があらぬ方向を向いた。

それだけではない。防御したはいいが、威力自体はほぼ死んでおらず、致命傷は避けたものの、そのまま数メートル先まで吹っ飛び、コンテナの上を転がる。下に落ちなかったのは幸いだが、それもこの全身凶器の神父が近くにいるのなら何の意味もないことだ。寧ろ、落ちていた方がいくらか望みはあったかもしれない。

対して、綺礼は残心の後、ふと左腕に視線を飛ばす。

(手甲が無ければ手首ごと頭蓋を撃ち抜かれていたな……我ながらとんでもない賭けに出たものだ)

変形した手甲と、軌道を変えた弾丸によりズタズタにされた左腕を見て、綺礼は表情を歪める事なく、そう思った。

綺礼は生憎と痛みには慣れてる。問題は治るか治らないかのみ



に絞られるが、治癒魔術においては時臣すらも上回っている。元より肉体を酷使する事前提の戦術を組む事になると考えていた綺礼は、その治癒魔術にだけは鍛錬を怠らなかつた。

一瞬の攻防を制した綺礼は、息を吐いたあと、黒鍵を抜き、静かに切嗣に歩み寄る。

片腕がひしやげ、次弾の装填すらままならない切嗣に残された手段は令呪のみ。だが、それを使用すればアイリスファイルが無防備になる。そうでなくとも、令呪を発動する素振りを見せた瞬間に黒鍵が切嗣を貫くが、それすらも切嗣には思考できる状態ではなく、吹き飛ばされ、頭を打ったせいで意識が混濁していた。

どちらにせよ、切嗣に生存の道は残されてはいなかった。

綺礼も悠長に構えるつもりはない。先の銃声でこちらに他の者達がいる事をサーヴァントも、マスターも知った。特にロードに関しては綺礼も勝ち目はない。ここで素早く切嗣の命を刈り取り、危険分子には退場願おう。

「悪く思うな。私の生存に、お前という存在は最も危険なのだ」

右腕を振り上げ、そのまま首を刎ねるように横に振るう。

それだけで切嗣は絶命し、この場における最大の目的は達成される……はずだった。

黒鍵の切っ先が首の手前で止まる。

何者かの介入も干渉も受けてはいない。

ここに居るのは未だ切嗣と綺礼だけだ。故に綺礼が切嗣を殺せるという状況だけは覆ることはないのだ。

しかし……綺礼は何者にも介入されていないにも関わらず、そのトドメの一撃を放てないでいた。

何故だ、何故動かん。

必死に力を込めているはずの右腕は微動だにせず、まるで金縛りにもあっているかのように動きを停止させていた。

ならばと、綺礼は心臓めがけて突き刺そうとする……が、こちらも寸前で切っ先が止まる。

(何かの魔術的防御か？……いや、そんな痕跡はない。だというのに、

何故。私の手は動きを止める?)

わからない。

あと少し。数センチ押し込めば、危険分子は排除され、自分の生存率は飛躍的に上がる。

自らを阻むものは何一つないというのに動かない手に、ついに綺礼は焦れるのと、轟音が響いたのは同時だった。

視線をサーヴァント達のいる方へ向ければ、どういった経緯があったのかは想像に難くない。いつの間にか現れたバーサーカーとアーチャーがぶつかっていた。

黒い靄がかかり、二重三重に見える狂戦士の姿ははつきりと見えなくとも、こちらも自分の知るものと同じだと理解する。となると、おそらくはここで師は令呪を使用するのだろう。

(……いかな。師に令呪を使用させるわけにはいかない)  
失念していた。

切嗣の事ばかり気にしていたが、同じように事を進めるといふのなら、バーサーカーとアーチャーは激突し、時臣はアーチャーを撤退させるために令呪を使うという事も当然ある。そちらの方を全く考えていなかった。

(アヴェンジャーに邪魔をさせるか?……いや、アレの邪魔をさせるのは正気の沙汰ではないな。まして私に何の得もない以上、同盟の可能性を示唆させかねない)

少し前のアヴェンジャーとアーチャーのやり取りで、凶らずも時臣と綺礼の同盟関係を感じさせるものが無くなったというのに、ここで下手に邪魔をすれば、アーチャーの怒りを買ひ、バーサーカーの標的にされ、同盟関係を疑われるという何の得もないどころか、己が首を絞めかねない事態に発展する。

思考した結果……：最早令呪の使用を止められはしないと断じた綺礼は、切嗣の服に手を伸ばす。

どういうわけか殺せない。殺せないなら仕方がない。雀の涙だろうが、武装を剥いでおこう。

それが綺礼の魂胆だ。ついでにコンテナーも破壊すれば、時臣を

脅かすものはなくなるし、運が良ければロードが切嗣を殺してくれるかもしれない。

自分にできない以上、適材適所というわけだ。

切嗣の懐から弾丸を数発。手榴弾二個とサバイバルナイフ一本を取ると、綺礼は無雑作にナイフをへし折り、他をポケットの中に入れて……るその前に額を弾丸が掠めた。

それが切嗣の協力者である久字舞弥のものだと瞬時に悟った綺礼は使える右手だけで頭部を守りつつ、その場から離脱していく。

片腕が使えない状態では、攻撃と防御を同時に行うことができない。いくら僧衣に防護符を貼っていたとしても、頭部となると話が別だ。先の一撃で額から血が出て右方向に死角もできた。相手が切嗣でないにしろ、深追いをして危ないのは綺礼の方だ。

切嗣から離れた際に追撃が無くなったことを確認すると、綺礼はすぐさま倉庫街を後にした。

アヴェンジャーとアーチャーの一触即発の空気を破ったのは、六体目のサーヴァントの出現だった。

すぐ近くで銃声が聞こえ、サーヴァントの意識がそちらに向く中で、唯一その黒い霧に包まれたサーヴァント……バーサーカーは、アーチャーに視線を向け、アーチャーもまた許しもなく自分を見上げるサーヴァントに嫌悪感を露わに宝具を展開、石礫のように無雑作に投げつけられた宝具を、バーサーカーは難なく掴み取り打ち払うというおよそ理性を失ったとは思えない芸当を持って、危機を脱した。

しかし、それはさらなるアーチャーの怒りを買うもの。

汚らわしい手で、己が宝物に触れられたことでその怒りは計り知れぬもので、最早己以外に王を名乗る輩も、己を侮辱したサーヴァント

の存在も、彼方に吹き飛んで行った。

無尽蔵の備えがあるかのごとくー否、事実無尽蔵に宝具を持つアーチャーは、ただの一つとして同じ宝具を出さず、バーサーカーめがけて宝具を放つ。

その規格外さに、誰もが度肝を抜かれ、目を剥いていた。轟音は夜気を揺るがし、炸裂する閃光は夜空すら払わんばかりで、不可解な銃声もまた、一瞬で思考の隅に追いやられるほどの攻防が目の前では行われていた。

バーサーカーが打ち払うたびに倍々計算で増えていく宝具だが、それでもバーサーカーには一つとして到達することはない。ライダーも融通の利かないアーチャーに呆れたような態度をとる。アヴェンジャーもまた、同盟相手である以上、他のサーヴァントに比べ、驚愕の度合いが少ないものの、あれで本当に他のサーヴァントを倒せるのか。正直煽り耐性の低さに足すくわれ放題じゃないのか、と。

そしてバーサーカーの投げた宝剣がアーチャーの立つ街灯のポールを寸断し、それよりも先に身を翻っていたアーチャーは地表に着地を決めながらも、憤怒がついに臨界点を突破。さらに宝具を展開したところで……時臣からの令呪による撤退を命じられ、憤懣やるかたない面相のまま、アーチャーは『雑種ども。次までに有象無象を問引いておけ。我と見えるのは真の英雄のみで良い』とだけ言い残し、その場から姿を消した。

一波乱あったものの、殺意と殺意のぶつかり合いにようやく落ち着きが見え始めたところで……はたとセイバーが気づく。

黒い狂戦士が、その茫洋と光る双眸が、新たなる獲物を見定めて、爛々と燃え盛っている事に。

怨念の色だけに染まった視線に見据えられ、セイバーの背筋を悪寒が奔り抜ける。

「……ur……」

地の底から湧いたような声。祟るような、呪うような、人語としての意味すらなさない怨念の呻き。

誰もが初めて耳にした、バーサーカーの声音だった。

「……ar……ur……ッ！」

まるで人型の呪いであるかの如く総身に殺意を漲らせたまま、黒い騎士はセイバーめがけて突進する。

野獣の如き勢いで迫るバーサーカーに、セイバーは即座に白銀の甲冑をまとい、不可視の剣を出現させ、防御に入る。

低く地を這うような不気味な気迫とともに、バーサーカーは手にした得物をセイバーの脳天に振り下ろす。

それを難なく受け止めたセイバーであったが、受け止めたその武器の正体を見極めたところで、彼女は愕然とする。

鉄柱一さつきまでアーチャーが足場にし、バーサーカーに切り倒されて地に転がっていた街灯のポールの、残骸である。セイバーへと突進しながら、バーサーカーは足許にあつたそれを拾い上げていたのだ。

長さ二メートルあまりに寸断されていたその鉄屑、さながら槍に見立てたかのように両手で構えて、バーサーカーは凄まじい圧力でセイバーの剣を圧迫してくる。だが、驚くべきはその膂力より、得物がただの鉄屑でしかないということ。

不可視の剣。『風王結界』インヘジフル・エアと呼ばれる風の結界に覆い隠されたセイバーの剣はまさしく宝剣中の宝剣。他に並ぶもの無き至高の宝具である。たかが路傍で拾った鉄塊などで鏝迫り合うなどあり得ない。

「なん……だと?」

歯を食いしばって耐えながら、セイバーは目を疑った。

バーサーカーの手にした鉄柱が、黒く染まっている。

葉脈のような黒い筋が、幾重にも鉄柱に絡みつき、今もじわじわと広がりながら侵蝕していく。

起点はバーサーカーの両手だった。黒い籠手に掴まれたその場所から、黒い筋は蜘蛛の巣状に鉄柱全体に広がっている。

それこそがバーサーカーの宝具であり、時にサーヴァント自身に備わる特殊能力として発揮されるタイプのものであった。

それをセイバーが、ランサーが、ライダーが、アヴェンジャーが理解した。バーサーカーの宝具の正体を。

アーチャーの投げ放った無数の宝具を強奪して自在に駆使したバーサーカーの絶技の正体に。

セイバーとバーサーカーが交戦する最中、ふと何の音沙汰もなかったアヴェンジャーの通信機に声が届く。

『アヴェンジャー。撤退だ』

「はあ？」

突然の宣言に、アヴェンジャーは眉を顰める。

この戦を始めたのは元は綺礼自身の策であり、撤退のタイミングを見極めるのも綺礼自身である。それをアヴェンジャーは理解していたし、多少の無理は強いられると踏んでいたのだが、どういうわけか、この不可解なタイミングでの撤退を要求してきた。

此度はランサーの真名を明かし、ライダーが自ら暴露したことで戦果は上々。セイバーやバーサーカーの戦い方を少なからず知れたこともプラスではあるし、まだ退くにしては他のサーヴァントが追撃してくる可能性もある。

綺礼ほど、アヴェンジャーは他のサーヴァントの性格を知らないが故の警戒だった。

しかし、アヴェンジャーの疑念とは裏腹に綺礼が続ける。

『即時撤退しろ。バーサーカーの標的にはお前も含まれているのだぞ！』

やや焦った声で二の句を告げた綺礼と、攻めあぐねていたバーサーカーの視線が不意にアヴェンジャーを捉えたのははたして偶然であつたのか。

アヴェンジャーの疑念を振り払ったのは、バーサーカーの殺意と憎悪が自らに向けられたことによる背筋の悪寒だった。

瞬時に思考を切り替えたアヴェンジャーは剣を構え直し、バーサーカーへと切っ先を向ける。

セイバーから一度離れたバーサーカーは二人を交互に見て、より強い怨嗟の声を放つ。

かの英霊の名はわからない。けれども、その英霊の放つ殺意と憎悪は、計り知れるものではなかった。

それは自らがアヴェンジャーであるからこそ、理解できた事でもあった。

「a r : : u r r r r r r ! !」

バーサーカーの咆哮が響く。

迷いを打ち払うように吼えたバーサーカーは、ついにアヴェンジャーにも殺意に漲る鉄柱を振るった。

「何よコイツ……見境いなしってわけ……!」

アヴェンジャーは両手で剣を持ち、バーサーカーの一撃を受け止める。

強烈な一撃に屈しなかったのは、単純にサーヴァントとしての筋力値がバーサーカーに拮抗しており、突進力の含まれたその一撃も、僅かに膝を折るだけだった。

しかし、技だけは別だ。

バーサーカーの絶技を目の当たりにしているアヴェンジャーは、正面から戦って勝てる見込みは少ないとわかっている。

(目くらましに使うのなんて、本当は嫌なだけどー！)

アヴェンジャーは内心でそう毒づくくと、剣に黒い魔力を迸らせる。

それはランサーと戦ったときと同様に見えるが……違った。

迸る魔力はアヴェンジャーの剣だけにとどまらず、バーサーカーの持つ鉄柱を奔る。

そして次の瞬間、バーサーカーを炎が襲った。

跳ねるように鉄柱を離し後方へと下がるバーサーカーに合わせて、アヴェンジャーも後ろに下がり、それと同時に霊体化する。

バーサーカーに攻撃されたときこそ、厄介なものに目をつけられたと苛立ったものの、結果として逃げるタイミングを生み出すことができた点に関しては僥倖だった。

霊体化した自分を追ってくる気配がないことを確認したアヴェンジャーは、予め、決められていたポイントに一直線に向かった。

その戦場を見る者がいたことになどまるで気づかず。

## 蠢く影

その空間は闇に閉ざされていた。

空漠なるの闇ではない。ねっとり濃縮され、醗えるほどに糜爛した、限度を超えて黒すぎる、闇。

噎せ返る程に濃密な血の臭気。そこかしこから湧き上がる、弱々しい呻きや啜り泣き。そんなおぞましい気配の数々から察するに、視界を閉ざす闇の帷はむしろ慈悲深い目隠しであったのかもしれない。

そんな闇の中、まるで水底から見上げた満月のように、茫洋とした光を放つ手鞠大の水晶玉は、朧げな光と共に球の中に映像を浮かび上がらせる。

そこは無人の閑静な倉庫街。

つい先程まで、熾烈な戦いの繰り広げられていた戦場である。

その全てを見届けた二人の人物は、球の茫洋たる光を顔に浴びて、それぞれに異なる喜悦の相を浮かび上がらせていた。

「スツゲエ。マジにスゲエ!!」

切れ長の目を、童子のように無邪気な歓喜に輝かせて歓声を上げるのは、およそ天文学的な確率の稀少度によって、超常の世界に踏み込んだ快樂殺人鬼、雨生龍之介であった。

ただの偶然でキャスターのサーヴァントと契約を果たしてしまった事は、彼にとって突如舞い込んだ幸福であり、この聖杯戦争の地に住む者達にとっては不幸以外の何物でもない。極上のエンターテイメントと称して行われる行いはまさしく悪魔の所業であった。

「セイハイセンソウだったっけ？ 旦那も今のアレに嘔むんでしょ？ やっぱり旦那もアレなの？ 空飛んだり光ったりとか？」

その問いかけにキャスターは答えず、熱を帯びた眼差しで水晶球を見つめている。映し出される小さな夜景の中、そこに佇むさらに小さな人影に、まるで憑かれたかのように見入っている。

倉庫街の戦いを監視し始めた当初から、キャスターはこの有様だった。マスターである龍之介の興奮をよそに、ただ二人のサーヴァントに目を走らせていた。



セイバーとアヴェンジャー。

そのどちらにも視線を飛ばしながら、キヤスターは澎湃と溢れる涙に異相を濡らし、それと共に頭の中を混乱させていた。

「……或いは、とは思っていたが……よもや聖杯が、ここまでの力を持つているとは……万能という言葉すら、おこがましい……」

ーだが、それもすぐに治まる。

仮にキヤスターに一部でも正気があれば、どちらかが別人である可能性を考慮し、そしてセイバーがそうではない事に気づいただろう。

しかし、今のキヤスターは気付けなかった。

彼は狂気に彩られし悪霊。バーサーカーとはまた別の意味で正常な思考を持ち得ないサーヴァントなのだ。

「……旦那？」

何が、と問うしかない龍之介であった。

キヤスターの喜びようは何やら並々ならぬことのようにだが、彼にはその所以が全くわからない。

「聖杯は私を選んだのですよ！」

マスターの当惑など眼中にもないまま、己の歓喜を共有せんとばかりに、キヤスターは龍之介の手をブンブンと振り回す。

「ただの一度も戦うまでもなく、我々は勝利を遂げたのです。まちがない。既に聖杯は我らが手中にある！」

「いやオレ……そのセーハイってやつ、まだ見たことも触ったこともないんすけども？」

「そんな事は問題ではない！見たまえ！彼女こそが答えだ！」

キヤスターが目を剥いて断言するのに対し、龍之介はまじまじと水晶球に映る少女を観察する。

「……あのさ、旦那。一つ聞いていい？」

「よろしい。彼女の事なら、なんでも答えて差し上げましょう」

「旦那の言う彼女って……どっち？」

眉を顰めて、龍之介はセイバーとアヴェンジャーの両方を交互に見た。

片や華奢な体軀を包み込む白銀の甲冑を着た少年にも見える美少

女のサーヴァント。さらにもう片方は明らかに女性ではあるが、漆黒の甲冑とマントを羽織った美少女。どちらも一目で別人である事は龍之介にもわかる。

だからこそ、キャスターはどちらかの人物の事を話しているのだと、そう思っていた龍之介だったが、キャスターはそれを否定した。「何を奇妙な事を。彼女こそが、否！彼女達こそが！我が光！我が導き！彼女が私に命を与えた！我が人生に意味をもたらした！」

キャスターは溢れ出る激情を吐き出すかのように、感涙に咽びながら、両手で頭を掻き毟る。

「かつて神にすら見捨てられ、屈辱のうちに滅んでいった彼女がー、今、ついに復活を遂げた！これが！これほどの奇跡が！我が願望の成就で無くしてなんだというのか!？」

龍之介は依然全く事情が飲み込めなかったが、ともかく敬愛する『青髭』が今限りなくハイになっていることだけは理解できた。そして、まださほど長くもない付き合いの中で知ったことだが、『青髭』がこんな風にカツ飛んでいるテンションの時には、しばしば龍之介でさえ仰天させ感嘆させるほどの素敵な趣向を提示することがある。全く新しい犯し方、罫り方、そしてとどめの殺し方……龍之介が師と仰ぐこの怪人物は、まさに嗜虐の芸術家であった。

そんな次第で、青髭ことキャスターが喜んでいるこの状況は、どういう事情であれ、龍之介にとっても期待のできる喜ばしい状況であることに間違いない。

例え、キャスターの言葉が矛盾に塗れていたとしても、それらは些末な事でしかないのだ。

「なんだかオレも楽しみになってきたよ。青髭の旦那」  
「そうだろうー！そうだろうともー！」

髪を振り乱して泣き笑いながら、キャスターは両手で水晶球を掴み抱えると、その冷たい表面に額を押し当てて、球の中に浮かぶ少女達の面影にむしゃぶりつかんばかりの執念を込めて熱い視線を注ぎ込

んだ。  
「嗚呼、『乙女』よ、我が聖処女よ……すぐにもお迎えに馳せ参じます

るぞ。どうか、しばしお待ちを……」

「あはははは！裏で一体何してるかと思ったら、そのザマってわけ？  
おつかしいー！」

机をバンバン叩きながら、アヴェンジャーは涙目で大笑いしていた。

倉庫街の一戦から帰還した綺礼は手際良く傷の治療を行っていた。

このような時に魔術の便利さを感じさせられながらも、目の前でも変わらず今の自分を笑っているアヴェンジャーに辟易していた。

「……あまり笑ってくれるな。こう見えても、かなり傷ついている。それにこれも計算に入っている。名誉の負傷というやつだ」

「物は言いようね。後ね、いい事教えてあげるわ。負傷に名誉も何も  
ないわよ。第一、誰も倒してないでしょ、アンタ」

ぐうの音も出なかった。

実際、綺礼は切嗣を殺せなかったし、結果として奪った武器も切嗣には大した被害ではないだろう。最低でも令呪か、或いはコンテンツダーを奪っておかなければならなかった。

切嗣は用心深い。同じ二の轍を踏む事はないし、次はどの場でも綺礼に警戒を置いて当たるだろう。今回のように不意を突くなんて事はできない事を、綺礼も理解している。

まして、綺礼としては二度と切嗣と闘いたくはなかった。今回は左腕の負傷程度で済んだが、次は命を落としかねない。それどころか、この家もバレれば爆破解体待った無し。日頃から狙撃の警戒など、今回倒せなかったのは痛手どころの騒ぎではない。

（最悪、令呪を魔力源にした闘い方にする他ないか。使えて二画までだが、二画で衛宮切嗣に勝てるのならまだ安いものだ）

原作のように璃正神父から令呪を委ねられるようなことは、このまま行けばまず無いだろう。今回の襲撃で、流れは確実に変わっている。アヴェンジャーの召喚から衛宮切嗣との対決まで、重要なイベントは全て変化している。同じように原作を踏襲していくことはまずあり得ないだろう。

故にここから先は予測不可能。可能な相手といえば、せいぜいはキャスター陣営ぐらいだろうが、あちらに関して言えば、さしたる害はない。セイバーが負傷していない現状、超弩級の化け物呼び出されたところで、宝具によつて蒸発させられるのがオチだ。

「これで当分は行動不能ってところかしら？ 無様なものですね」

「ああ。だが、そちらの方が好都合だ。私は無闇矢鱈と死地に赴く趣味はないのでな」

そも、マトモに話を聞いていけば、こうして聖杯戦争に参加する事もなかったわけなのだから、綺礼としては闘わずに他のマスターが脱落していく事は寧ろ大歓迎である。特にライダーとバーサーカーに關しては早々に脱落してほしいというのが本音である。

ライダーは宝具の相性が悪く、バーサーカーは技量差が圧倒的。ひよつとすると、これらを覆すだけのことをアヴェンジャーがするかもしれないが、希望的観測で敵に挑むのは愚かな事だ。

特にバーサーカーは本格的に挑む必要はない。あれは放つておいても自滅するし、いざとなればマスターである間桐雁夜さえ殺してしまえば数分の現界すらままならない。障害というにはさしたるものではないだろう。だから、目下一番の問題はライダーに絞られる。マスターを殺す事も叶わず、サーヴァントでの闘いは分が悪い。

勝つ気が毛頭ないだけに、負ける相手としてはライダーは申し分ない相手ではあることに間違いはないのだが。

どちらにせよ、腕が回復するまでは外に出歩く事はしない。聖杯戦争が始まるまでに家に買いだめはしているし、家に籠っていれば、十中八九見つからないだろう。それこそ、アヴェンジャーが何かしでかさない限り、完治するまでの間は拠点がばれる事はないはずだ。

その時、座っていたアヴェンジャーが何かに気づいたように立ち上

がり、綺礼もまたそちらに目を向ける。

黄金の粒子がふわりとその場に現れたかと思えば、それは形を成し、悠然とした佇まいでそこにいた。

「ほう。そんな贗作めを召喚したものに興味が湧いて足を運んでみれば……随分愉快ではないか」

「……何用か。アーチャー……いや、英雄王ギルガメッシュ」

「何、ただの暇潰しだ。時臣めと同盟を結んでいるのは貴様だろうか？ 贗作のマスター」

「ああ。彼女のマスターであり、時臣師の同盟相手は私だ」

アーチャーとアヴェンジャーとの間に入るように立つ綺礼は、何故ここにアーチャーが来たのか、そもそも来る事が出来たのかという事に思考を走らせていた。

誰にもばれないようにあえて結界などの魔術の類は避け、使い魔さえも外出の時のみしか放っておらず、帰還もまた同義だ。強いて言うならアヴェンジャーの気配ぐらいのものだが、それに関しても戦闘状態でもないアヴェンジャーから発せられる気は微々たるもの。他の陣営に比べれば魔術の類を使用していない事もあり、近くを通らなければわからないレベルだろう。

だが、アーチャーは『暇潰し』と称した。

ならば、ここに来たのは偶然ではなく、必然という事になる。

一体どこで……そう考えている綺礼をよそにアーチャーは口を開く。

「そんな贗作は存在自体が見るに耐えん。だが、存在する理由には私も興味がある。ましてそれを呼び寄せたお前自身にもな」

「別に。大した事をしたつもりはない。彼女を呼び寄せたのはただの偶然だ」

興味を持つような言われはない、と切り捨てる綺礼。

確かに彼女の存在理由には自らも興味を抱いていないのかと問われれば、否である。何故彼女が自らの召喚に応じ、こうしてサーヴァントになるに至ったのか、気になるのも本音だ。

だが、考えるような事でもないだろう。どんなサーヴァントを呼び

寄せたとしても、結果は『如何に上手く負けるか』の一つに尽きる。ならば、この際どんなサーヴァントが出てこようとも、そのサーヴァントにさしたる興味はない。もちろん、それを呼び出すに至った自身にもだ。

「……何？」

しかし、その発言にアーチャーは眉根を寄せた。

失言だったかと綺礼は生唾を飲んだ。

このサーヴァントは不敬を働くのであれば、同盟相手だろうがマスターだろうが等しく裁く相手だ。その為に時臣は常にアーチャーのご機嫌とりをしているわけだが、その実アーチャーは酷く退屈をしている。何をするにもイエスマン。立てる作戦も何の面白みもない上に、その本人も拍子抜けするほどにくだらない人間だ。それ故にアーチャーは単独行動の高さを活かしてそこらかしこを歩き回っている。綺礼の拠点を見つけたのも、ただの偶然だ。

そして、ただの偶然で……見つけてしまった。

此度の現界において、アーチャーに興味を抱かせるだけの理由を持つサーヴァントの存在と、そのマスターを。

「く、ははははははー」

アーチャーは哄笑する。

綺礼が自分に嘘を述べているわけではないと気づき、アーチャーは笑わずにはいられなかった。

この男は気づいていないのだと。何故贗作の英霊を呼び寄せる事ができたのかという事を。

対して、いきなり笑い始めたアーチャーに綺礼もアヴェンジャーもちよつとだけ引いている。こちらからしてみれば、訳も分からずに相手がいきなり爆笑し始めたわけなのだから、それも当然の反応だ。

「ー良い。そこな贗作は存在する事が罪だが、お前自身が『呼び寄せた』のなら話は別だ。今の我は気分が良い。誰の赦しもなく我を見る事も特に赦そう」

「感謝する、英雄王。だが、ここに来るのはやめてもらいたい。他のマスターに見られたら、事だ」

「そのような事は我には関係ない……と言いたいところだがな。お前に脱落されるのも今は困る。また機を見て来る。その時は盛大にもてなす事を許可するぞ、贗作のマスター」

そう言い残して、アーチャーは姿を消す。

現れるのも消えるのも勝手なサーヴァントだ、と綺礼は思うが、よく考えれば、その勝手なサーヴァントは何もアーチャーだけの話ではないと思ひ、溜息を吐いた。

「……なんですか、その溜息は？ 酷く不愉快なのですが」

「いいや。アレに限った話ではなく、サーヴァントが現世の人間とズレているというのは誰でも同じなのかと納得しただけだ」

本音を言ったらアヴェンジャラーがキレるのは目に見えている。綺礼は言葉を濁しつつ、立ち上がる。

「外には行かないのではないのですか？」

「外出はしないが、その間やる事はいくらでもある。特に、私の左腕をこんな風にしてくれた輩を次こそは倒さねばなるまい」

「いや、アンタのそれは自分のミスでしょ。それっぽく言ってるけど」  
「……まあ、物の見方によってはそうかもしれない」

バツサリと斬り捨てられた綺礼はまたも、心に浅からぬ傷を負って、とぼとぼと自室に帰って行った。

「輝く貌のデイルムッドに征服王イスカンダル、か。初戦にしては上出来と言えなくはないが、それにしても令呪一画の消費は大きすぎるな」

時臣は工房の中で、令呪の宿る手をまじまじと眺めながら呟く。

三画あつた聖痕はその一画を失い、二画だけになっている。それはアーチャーとバーサーカーの戦闘で、アーチャーが更に宝具を展開

し、真名を露呈させるきつかけを作らないためだ。いかに複数の宝具を所持する英霊がいるとはいえ、あれだけの宝具群を展開していれば、その正体はあっさりとばれてしまう。

それ故の配慮だったが、はたしてそれが正しい選択だったのか。微妙なところである。

かの英雄王が、アーチャーのクラスでさえなければ。或いは使役のしようもあつただらう。高すぎる単独行動スキルを持つがゆえに、<sup>パス</sup>経路を一方的に切つて動き回る彼を止められるのは令呪のみ。しかし、時臣の目的のためにも、契約を解かれないようにするためにも、令呪は使えても後一画のみ。つまるところ、残り一画の令呪でこの聖杯戦争を乗り越えなければならぬのだ。

ここに来て、幸いなのは綺礼がアサシンではなく、アヴェンジャーを召喚した事だが、あくまでもそれは真つ当な勝負を挑めるだけの話。武芸においてはランサーやバーサーカーなどに一步遅れをとると、綺礼からも伝えられていた。

しかし、そのアヴェンジャーが今も敗退していない。それどころか大した手傷も負わされていない辺り、彼女にはその武芸の差を埋める何かがあるのだとわかる。彼女もまた、並のサーヴァントとは一線を介した英霊なのだ。

綺礼が負傷した事で、こちらの陣営に暫く表立った動きを出来るものはいないに等しくなつてはしまつたが、戦場の火蓋は切られた。少し前までのようにこそそこそと探り合いをする事はなく、これからは切つた張つたの勝負が繰り広げられる事になる。それを監視していけば、他のサーヴァントの真名や宝具も明らかになり、一層時臣にとっては有利な状況になる。

問題は英雄王。アーチャーが自由奔放に動き回っている事ぐらいだが、アーチャーも臣下としての礼を尽くし、また臣下の提言という形であるのなら、ある程度はこちらの意思を汲み取ってはくれる。もつとも、それがアーチャーにとってより一層退屈を極める事になるのだが、思考が全くの対極の位置にある時臣は知る由もない。それどころか、英雄王ほどの者が、無聊の慰みとして、この俗世を闊歩して



いる事の方が理解出来ないほどだ。一体何が、これ程の存在に興味を抱かせるのか。その点については興味がないわけではないが、それが所謂『ただの暇つぶし』ともなれば、また話も違ってくるだろう。

後は、未だ姿を見せないキャスターだが……こちらはそれこそさしたる問題ではない。どのような英霊が呼び出されようとも、アーチャーより優る者はいない。一人の魔術師として神代の魔術師に畏敬の念こそ抱けど、相手にするにどうという事はない。何処に拠点を構えようと、アーチャーの圧倒的武力を前には塵芥も同然なのだから。

令呪を一面失ったものの、今もまだ自らの勝利は揺るがない。

此度こそ、万能の願望機である聖杯は我が手にー。

彼もまた、意識は違えど、キャスター同様に、聖杯戦争の勝利を信じてやまなかつた。

……どのような結末が待っているかも知らずに。

## 例え、光でなくとも

人差し指で用心鉄の下のスプールを引き、薬室のロックが解除されると銃身がぐくりと前に倒れこむ。

開放された薬室に、魔弾の一発を装填。手首のスナツプのみで銃身を撥ね上げて薬室を閉鎖する。

長年のブランクあつてか、劣化していた技術も、今となつてはそのブランクが嘘のように以前までのキレを取り戻している。

(……勘の方はあまり戻つてないか)

装填した弾丸を取り出し、自身の専用礼装とも言えるコンテナダーを机の上に置くと、切嗣は日本に来てすぐ、何の気なしに購入した煙草を一本銜えて、火をつけた。

遠い異郷のインツベルンでこそ、吸い慣れた銘柄が手に入らないことと、それ以上の母子への気遣いがあつて吸わなかつた煙草も、戦いの本番に入ってから、頻繁に吸うようになった。

今までは控えていたにもかかわらず、特にここ数日は、見る見るうちに煙草が消費され、一日に最低でも一箱は空いてしまう。

それは、切嗣が元々ヘビースモーカーだった、というわけではなく、先日の倉庫街での出来事が関係している。

あの日、切嗣は死んでいてもおかしくなかつた。

『魔術師殺し』たる切嗣の戦法は、聖杯戦争だろうと変わりはない。魔術師の常識を上回る方法で魔術師を屠る。それが衛宮切嗣の戦術だ。

先日も、マスターの一人であるケイネスの籠城するハイアットホテルを爆破した。

何故ケイネスを狙ったのかと問われれば、偏に最も狙いやすかつたからに他ならない。

魔術師は優れたものこそ、足元を見ない。自分の能力を信じて疑わず、相手の魔術レベルを見て、初めて正当な評価を下す。

もちろん、それが全ての魔術師に通じる道理でないにしろ、多くの魔術師がこれに該当し、エリート街道真つしぐらかつ挫折を知らないケイネスはその典型と言える。

よもや、時計塔きつての一流魔術師はホテルが爆破解体されることを一ミリも考えていなかっただろう。しかし、脱落していないのは既に聖杯の器であるアイリスフィールを通じて知っている。そのあたりで言えば、成る程。確かに並の魔術師でないのは確かだ。いくら負傷もあり、死体の確認まで出来なかったとはいえ。

もつとも、いかに優れた魔術師であれど、魔術師である限り、切嗣は勝てる自信がある。魔術師の常識に囚われている限り、切嗣の戦術は予想できず、掌の上で転がされていることにさえも気づかないだろう。

だからこそだ。

衛宮切嗣にとって、言峰綺礼はこの聖杯戦争における一番の危険人物だった。

何の情熱もなく、空虚さを感じさせる男。

元が異端狩りを主とする『代行者』である事はそうだが、それ以前に言峰綺礼の在り方が切嗣は悍ましいと感じていた。

そしてその男が、あの日自らの前に現れた。

結果から言えば完敗だ。故に切嗣は最初の脱落者となってもおかしくなかった。

だというのに、今もなお生きているというのは合点がいかない。それは幸運であるが、何故自分が生かされているのか、何故綺礼は自分を見逃したのか。

その疑問が、目下、切嗣の頭を悩ませている。

怪我の方はアイリスフィールに治療してもらい、ほとんど完治しているが、それを考えるたびに傷が疼く。

(やっぱりあの男が一番危険だ。早く居場所を見つけ出して、始末しておかないと)

身をもつて理解している。この聖杯戦争で切嗣は魔術師全てに対して天敵であるが、その切嗣に対する天敵こそが綺礼であると。だからこそ、早々に見つけ出して、早い段階で脱落してもらわなければならない。

でなければー。

湧き上がる恐怖を紛らわせるように切嗣は頭を振る。

暗殺者である切嗣は、英雄や武人のように、五分の生死を懸けて競い合う、そんな勇気や誇りとは無縁の臆病者だ。故に慎重に、的確に、最低限のリスクで勝利と生存を勝ち取ることをだけを狙う。狩人にとって最大の悪夢は狩られる側に立たされることだ。

それでもかかつての切嗣なら、己の窮地だろうが、天敵の出現だろうが、眉ひとつ動かさず、最善の打開策を見出すことに専念していた。それもこの数年で愛する者を得てしまったが故に、欠落し、弱点となっていた。

もしも、もう一度あの男と出会った時、自分は勝つことができるのだろうか。

恐怖に怯え、足をすくませることはないだろう。いくら心が脆弱になつてしまったとしても、切り替えられないほどに落ちぶれたわけではない。戦になれば、すぐに『魔術師殺し』の顔に切り替わる。

だが、勝算は別だ。

少なくとも、初見時には全くと言っていいほどに勝機が見えなかった。今も、正面からの戦闘では、綺札に対して勝ち目を見出せないでいる。どういう訳か、あの男はこちらの行動はおろか、戦術、使用する魔術まで理解している節がある。

由々しき事態だ。暗殺者が手の内を知られているのは。

ならば、どうするか。

煙を肺に入れることでクリアになっていく脳で、答えを導き出そうと思考を走らせる。

答えはすぐに出た。

実に簡単なことだった。

セイバーに、自分のサーヴァントに任せればいいだけの話なのだ。けれども、自分のサーヴァントはマスター殺しを許容しない。清廉潔白を謳う騎士の王だ。不意を打つことさえも躊躇い、戦うならば堂々と名乗り上げ、相手が臨戦態勢になるのを待って攻撃に向かうことだろう。

であれば、綺札のサーヴァントを、と思っていたが、それでは他の

マスターを殺して、サーヴァントを奪い、復帰しかねない。切嗣の不安は綺礼を完全に殺してしまわない限り、拭えないのだ。

こうしているうちにも、あちらは自分を虎視眈眈と狙っている。せめて、次に相見えた時も引き分け以上に持つていかなければ……。

それが脳裏をよぎった時、切嗣はただ自嘲気味に笑った。

未だかつて、そんな可能性を視野にいれたことがあつただろうか。それ程までに切嗣にとって、強大な相手なのだ。他のどの陣営よりも、今まで相対してきた誰よりも。

——その時、切嗣の私室の扉をノックする音が響き、返事をする間もなく、扉が開かれる。

「舞弥か。どうした？」

「マダムの結果が侵入者を捉えました。——キヤスターです」

キヤスター討伐命令が出たのは、英霊ならぬ怨霊がアインツベルンの城を訪れる数時間前のことだった。

神秘の秘匿もない、それどころか、ただの快樂を追求するだけの行いが冬木のセカンドオーナーである時臣の逆鱗に触れた。

そこで聖杯戦争のルールが変更。キヤスターの討伐まで一時休戦とし、その報奨として、令呪一画を監督役から進呈されるというもの。無論、それは璃正神父の時臣に対する計らいである。

アーチャーを撤退させるために使用した令呪を、最後の最後でアーチャーにキヤスターを討伐させることでプラスマイナスゼロにしようという算段だった。

その為に、綺礼もまたキヤスター討伐に駆り出される事になった。キヤスターを追い詰めたところで、時臣にそれを伝えるために。

それが、時臣と璃正神父の決めた方針で、綺礼もアヴェンジャーも特に異論はなかった。

「イーキヤスターが目の前に現れるまでは。」

「お迎えにあがりました。聖処女よ」

恭しく頭を垂れて、畳の上に膝をつき、臣下の礼を取るキヤスター。その姿に、綺礼もアヴェンジャーも、互いに別の意味で当惑していた。

綺礼は自身の拠点が暴かれている事に対してだった。

しかし、相手は魔術師<sup>キヤスター</sup>クラスで現界したサーヴァントだ。たかだか一人の、魔術師でもない相手の拠点を見つけ出すのは容易だ。それが、いくら正規の者でなかったとしてもだ。

対するアヴェンジャーは、一目でその男に気づいた。眼前に跪く男の風貌に覚えがあった。

「ジル……」

「おおお……！そうでございます。貴女の忠実なる永遠の僕、ジル・ド・レエに御座います。今一度貴女と巡り会う奇跡だけを待ち望み、こうして時の果てにまで馳せ参じてきました」

歓喜の念に打ち震えるような声音と表情で、自らの胸中と共に真名を吐露するキヤスター。

それに対して綺礼は眉根一つ動かさない。そんなものは既に知っている。未だ他の陣営は「否セイバー陣営も例外的に知っているが、それを除いて未だにキヤスターの真名は知られていないにも関わらず、綺礼が知っているのは偏に元の知識のお蔭である。

「ああ……我が麗しの聖処女よ。貴女にこうして巡り会えた事を私は聖杯に感謝します。未だ神に囚われたままの貴女がいる事も捨て置けぬ事実ですが、今はただ、この奇跡を噛み締めるだけでございます」キヤスターの言葉に、アヴェンジャーは疑問を抱いた。

確かに自分は聖処女だ。かつて誰よりも激しく、誰よりも敬虔に神を信じ、フランスの救世主として、そして最後には魔女として処刑された存在。

だが、それは本来の彼女の話である。

今のアヴェンジャーは、何の加護も救済もなく、処刑された彼女の最後を、後世の人間が恨みつらみを抱かぬはずがないという想いを依代に、全く別の次元から生み出された贗作。

ならば、この聖杯戦争に、彼女は二人存在してもおかしくはないのか？

答えは否だ。

いくら、贗作の彼女でも、英霊として不完全な彼女でも、自分の事は誰よりもわかる。

アレが、あの女が、この聖杯戦争に召喚されるはずがない。

用意されるクラスそのものが、今回のような正規の聖杯戦争ではあり得ないのだ。

裁定者ルーラーを必要としない聖杯戦争で、あの女がー聖処女ジャンヌ・ダルクが呼び出されるはずがないのだ。

だからこそその疑問だ。

本来のジャンヌ・ダルクがいなくてもかかわらず、キャスターの発言は、あたかもアヴェンジャーを含めて二人存在するような物言いであつた。

「ジル。私は今、ここにこうして存在します。神の呪いに囚われてなぞいません」

「ええ。ですが、貴女の半身は、未だ神に囚われたままです。ですから、今夜、私が今度こそ貴女を神の呪いから解放いたしますよー！」

「ですからー」

「無駄だ、アヴェンジャー。その男にマトモな話が通じるわけがない。例え、お前であつてもな」

念願の再会とあつて、今まで黙秘を続けていた綺礼も、噛み合っているようで、ズレている会話に口を挟んだ。

あわよくば、このキャスターをアーチャーが討つように仕向けようとした綺礼だが、例えジャンヌ・ダルク当人を目にしても、未だセイバーの事もジャンヌ・ダルクだと勘違いしているこのキャスターには、どんな言葉を用意しても意味はないのだと理解したからだ。

この男にとっては、一人の人間が複数存在する事さえも瑣末な事なのだ。

そもそも、聖杯戦争でクラスの違う同一人物が召喚される可能性はゼロではないが、ことジャンヌ・ダルクにおいてはそれはありえない。彼女のクラスは元々一つしか存在しないためだ。

とはいえ、このキャスターがそれを知る由もない。

綺礼の疑問はそこにはなく、あったのは『今のアヴェンジャーを見て、正しくジャンヌ・ダルクだと認識したこと』だ。

アヴェンジャーとして召喚された彼女は同じジャンヌ・ダルクであつても、その魂の在り方を変えているはずだ。清廉潔白とは程遠い。セイバーとは似ても似つかない。

だというのに、何故この怨霊はジャンヌ・ダルクであると気づいたのか。

それを問おうとしたが、それよりも先にキャスターが言葉を紡ぐ。「では、これにて私は失敬させていただきます。ジャンヌ、必ずや貴女を、神のしがらみから解放致しましょう」

そう言い残して、現れたとき同様にキャスターは姿を消した。

それを見届けたアヴェンジャーは複雑な表情だった。

彼女は知らなかった。正規の英霊ならば、少しは覚悟もできていたかもしれない。

けれども、彼女は知らなかったのだ。正規の英霊ではない故に、聖杯から与えられた知識が不十分であつたために、自らが死した後、キャスターが、ジル・ド・レエ伯が何を為していたのかを。

だが、現世で何をしているのかは既に知ってしまったているし、それは彼の様子を見ても明らかだった。自分のように『黒く染まった』わけではない。あれは『狂っている』。

複雑な表情の彼女を見て、そう思った綺礼は、その空気を打開しようとして口を開く。

「アヴェンジャー」

「……何ですか？」

「気になるか？ キャスターの事が」



「否、打開するどころか、全力で渦中に飛び込んだ。元より、こうなる可能性は考えていた。」

「アヴェンジャーがこういうリアクションを取るのには意外ではあったが。」

「ひよっとしたらー。」

「そう思っただけで、問いかけた綺礼を、アヴェンジャーはいつものような嘲笑を見せる。」

「はっ。何を言うかと思えば。気になるか、ですって？ 私には関係ありません。私は復讐者。ジルがどうなろうと、何を成そうと関係のない話です」

「……本当にそう思っているのか？」

「くだいですよ。それとも、私が感傷に浸っているとでも？」

「少なくとも、先程までの綺礼にはそう見えた。」

「けれども、今はそれが芝居だったのでないかと思えるほどに、今まで通りに見える。」

「……でも、本物と同じにされるのは心外ね。例えば元は同じでも今は全く別の存在なんだから。それに、そんな奴がいるなら、見過ごすわけにもいかないわ」

「やはり……」

「何？」

「それ以上は焼く。」

「暗に目がそう語っていた。因みにネタではない。本気で焼かれる。」

「……奴の言っていた『半身』とやらはおそらくセイバーだ。キャスターを待ち伏せるなら、セイバーのマスターがいるアインツベルンに向かうのが最適だろう」

「これ以上追求しても仕方がない。」

「綺礼はキャスターの言動と、記憶を頼りに、キャスターが次に起こす行動を予測する。」

「キャスターがジャンヌ・ダルクと勘違いしているセイバーの元に向かうのなら、あそこで戦が起きる。」

「綺礼とて、わざわざ戦場に身を投げる趣味はないが、あそこには何」

かと用があるのも事実。アヴェンジャーが結果的にその気になつて  
いるのなら、便乗しておいて損はない。その理由がなんであれ、ア  
ヴェンジャーを御することは至難の業だ。なんといつても性格が捻  
くれてる。頼んでも承諾しないし、かといつて突き放すように言っ  
ても反発する。伊達に反抗期の女子高生じみているわけではない。  
(……いや、まだマシか。なんていうか……この捻くれ具合なら緊張  
感が寧ろ増すし)

それとなく、記憶を遡れば、彼女のキャラ崩壊ぶりを思い出す。可  
愛いのは許されることだが、いかんせん、これは聖杯戦争。文字通り  
命のやり取り。そして今の自分はそれを画面の向こう側でポチポチ  
している第三者ではないのだ。こちらの方が良いに決まっている。

「行くわよ。あの女に似ているっていう奴も、狂つてくだらない事を  
言うジルも、我が憎悪の炎で燃やし尽くしてあげるわ」

「(あ、なんか地味に怒ってる)それはいいがな、アヴェンジャー。ア  
インツベルンの拠点がどこか、貴様は知っているのか?」

「はあ? 知っているわけないでしょ。さつさと案内しなさい、ポン  
コツマスター」

何気にどんどん自分に対する評価が下がっているような気がしな  
くもない。

ついでに言うと、主従関係も何もあつたものではない。他のマス  
ターなら、ここで額に青筋の一つでも浮かべ、サーヴァント風情が、と  
口汚く罵るところであるが、どうにも綺礼はそういう気にもなれず、  
渋々頷いて、アヴェンジャーを引き連れ、家を出た。

時は戻り、キャスターの侵入をアイリスフィールの結界が探知して数分後。

噎せ返る程の臓物臭のする、血の海にセイバーはいた。

数分前にこの地に侵入したキャスターは、生贄の子どもを連れ、余興と称して、無辜の子どもをセイバーが到着するまでの数分で虐殺した。

キャスターが人質としていた少年も、つい先ほどセイバーの元に来たかと思えば、身体を真つ二つにして現れた青黒くうねくる異形の生物によって原型も留めないほどに寸断された骸と化した。

そして騎士としての誇りも今は胸になく、怒りに燃えた騎士はまさしく嵐のような勢いで現れ出る異形をまるで歯牙にもかけず、切り刻まれ、血海の一部へと成り果てている。

それはキャスターにとつて、大いに誤算であった。

武功の程度だけで覆せる数の差にも限度はある。かの怨霊も、狂っているとはいえ、元は武人だ。決して無策に、ただ己が欲望に身を任せているわけではない。

けれども、その誤算はやはり彼が狂っているからこそその誤算なのだろう。彼が本来の精神性を宿していれば、この白銀の騎士が現れたその時に、勝機はないと悟っていたはずなのだ。

徐々に、などという生易しいものではなかった。

怒濤の勢いで攻め立てるセイバーに、異形の生物の召喚速度は追いついていない。一匹復活する暇があれば、セイバーは五匹は叩き斬っている。それでもキャスターに届かないのは、彼の宝具に溜め込まれた魔力によるものだ。倒された異形を餌に復活するものとは別に、溜め込んだ魔力を消費して召喚している。それは無尽蔵にも思えるが、例えばそれがどれだけあろうと、その前にセイバーの剣がキャスターの体軀を斬り伏せることはそう遠くない未来であった。

いかに自信過剰なキャスターといえど、撤退を視野に入れ始めたその時。

「――随分と魅せる剣だな。流石はセイバークラスといったところか」

閃いた赤と黄の稲妻が、怪魔の群れを薙ぎ払った。

「ツ……ランサー。どうして……」

「主からキャスターを討つよう命じられた。セイバー、これより我が槍はお前と共にある」

ランサーの言葉に、セイバーはふつと笑う。

どういう理屈かはわからないが、ともあれこの槍兵が来たことで、キャスターはより苦しい状況に立たされている。否、それどころか逃げる事すらままならなくなった。

そう、詰んでいた。

キャスターには、最早逃げることさえも選択肢には与えられなかった。

或いはセイバーが右手だけなら、どうにかなったのかもしれない。

セイバーの実力の程を目にしていれば、この程度の策で挑まなかったのかもしれない。

だが、万全の三騎士クラスのうち二人を相手にするには、キャスターでは力不足が過ぎた。

最早手遅れ。近くも遠くもない距離では、暴発させた魔力による目くらましも意味をなさない。かといって、近づけては、それよりも早くに頭と胴が決別を果たすことになるのは目に見えている。

「その気高き闘志、尊き魂の有り様は、紛れもなく貴女がジャンヌ・ダルクであることを証。それなのに、何故だ？ 何故目覚めてはくれないのです？ 未だ神の加護を信じておいでか？ 貴女の魂を、未だ縛りつけている神を、貴女は信じるというのか！」

しかし、そのような窮地でも、キャスターにとってはさして重大なことではなかった。

彼にとつて重要なのは、あくまでも未だ縛られ続けているジャンヌ・ダルクの魂の救済なのだ。

故に、戦況など最早視野に入っていない。自らが何を成さなくても、解放されている魂を、自分の命を賭して神の呪いから解放するまで。

キャスターは自らの所有する宝具。己をキャスターたらしめるソ

レを開き、惜しむことなくー。

ヒュツという風切り音と共に飛来した真紅の槍が、キヤスターの手にした魔導書の表紙を切り裂き、キヤスターの肩を貫いた。

それを投擲したのは、無論一人しかいない。

「貴様ツ……キサマ貴様キサマ貴様キサマアアツ!!」

「何をするつもりかは知らんが、そのように隙だらけではな」

その身を傷つけられてなお、絶望的状况に立たされてなお、白目を剥くほどに表情を歪め、泡を吹いて逆上するキヤスターに対して、苦笑交じりに言うランサー。

それとは別に静かな怒りを声に滾らせながら、セイバーは不可視の剣を掲げ、その切っ先でキヤスターを睨み据えた。

「……覚悟はいいな、外道」

既にキヤスターを守る異形の化け物はいない。

魔導書であり、宝具である『螺<sup>ブレラー</sup>湮<sup>テイーズ</sup>城<sup>スベル</sup>教<sup>ブック</sup>本』は、ランサーの宝具、

『破魔<sup>ゲイ</sup>の紅薔薇<sup>ジャルグ</sup>』によって、その効果を一時的に失い、異形の化け物を生贄の鮮血に回帰させた。

ランサーの宝具自体は「刃に触れた瞬間だけ魔力を遮断する」のみであるため、宝具そのものを破壊する威力はないが、この状況ではどちらも同じことだった。

再び召喚の術を唱える暇などない。その前に、セイバーの剣が、キヤスターの首を刎ねるだろう。

セイバーとキヤスターの距離が、あと一歩で剣の間合いに届きそうになったその時、二人の間に漆黒の炎が奔った。

「くっ……い」

キヤスターの術かと後方に下がるセイバーだが、その炎の向こう側。

熱量で歪んだ空間の向こう側に立つアヴエンジャーの姿を目にした時、彼女が脳裏にバーサーカーから逃げた時の光景を思い出した。

しかし、何故このようなことをするのか。

よもや、キヤスターに助成するのではあるまいか。

状況のわからないセイバーは、致し方なしと判断し、自分の剣を覆

い隠す風の一撃で炎ごと彼等を吹き飛ばそうと考え………はたと思  
い留まった。

助成にしては様子がおかしい。

アヴェンジャーはセイバー達に見向きもしないし、キャスターもま  
た臨戦態勢と呼ぶにその姿はあまりにも無防備すぎた。

セイバーが構えていた不可視の剣の切っ先を下げたちようどその  
時だった。

ーアヴェンジャーがキャスターの首を刎ねたのは。

キャスターにとって、彼女の存在は全てだった。<sup>ジャンヌ</sup>

彼女の旗の元に集い、彼女の副官として、一人の騎士として、輝き  
を追って馳せた。

しかし、その結末は、屈辱と憎悪に染められ、貶められた。

だからこそ、キャスターは鬼畜に堕ちた。

彼女こそが生きる意味だった。腐敗した現実において、彼女こそが  
神の存在の証明と言えた。命を与えた存在が、異端の烙印を押されて  
断罪されたその時、神への深い信仰心は、呪いへと変わった。

陵辱と残虐の限りを尽くし、それでもなおキャスターを裁いたのが  
人であり、その理由もまた浅ましいモノであるがゆえに、キャスター  
は絶望せずにはいられなかった。

だがー。

「おお……ジャンヌ……」

今確かに。彼女はここにいる。<sup>ジャンヌ</sup>

過ぎし日とカタチこそ違うが、その在り方はまさしくキャスター  
が、ジル・ド・レエが望んだ姿だ。復讐と憎悪に染まった、神への信

仰心など欠片も感じさせないその立ち姿。神に裏切られた彼女なら、  
そうであつて然るべきだと断じていたキャスターには、今までの行い  
全てを肯定するものに見えた。

「何をしているのです、ジル」

「ジャンヌ……！ 私は貴女の魂を……」

「何を言っているのですか。いつまでも愚かだと殺しますよ。私は、  
ジャンヌ・ダルクはここにいます。アレは私ではない。あんな最後を  
迎えたというのに、未だあのように愚かにも清廉さを謳い、神の操り  
人形に甘んじていると？」

侮蔑の込められたその言葉に、キャスターは我に返るかのようだっ  
た。

「そうだ。今こうして、目の前に立つ彼女こそが、神への復讐を誓い、  
怒りと憎しみを以つて立ち上がった彼女こそが、あのような最後を迎  
えたジャンヌの、正しい姿なのではないかと。」

「そうか……神に謀られていたのは、ジャンヌではなく……」

「ええ。でも、もう良いわよ。あなたは最後にちやんと気付いたじや  
ない。アレが偽物で、私こそが本物だという事に。それで十分よ」

頬に添えられた手に、懐かしむように、慈しむように自らの手を添  
えるキャスター。

元より、解放する意味などなかったのだ。

聖杯が自分を選んだその時から、彼女の魂はとうの昔に解放されて  
いたのだ。

はらはらと涙が流れ落ちる。

それは感動か、或いは後悔か。

理解する事さえも、キャスターにはなかった。

「だから、さよなら。ジル」

それよりも早くに振り抜かれた一撃が、キャスターの首を刎ねたの  
だから。

## 異端者二人

「ふーん。ここがアインツベルンとかいう魔術師の根城？陰気臭さ全開ね」

「魔術師とは元来陰気臭いものだ。セイバーのマスターぐらいだ。引き籠もらないのはな」

時間は遡って、数分前。

キヤスターが到着して間もなく、その反対側からアインツベルンの敷地内に侵入した綺礼とアヴェンジャー。

本来なら、その背後からキヤスターを襲っても良かったわけだが、それではキヤスターを追跡しているはずのケイネスに存在がバレ、かつ切嗣にもバレると判断した綺礼は、先にケイネスとランサーが侵入したのを見計らって、この地に足を踏み入れた。

これならば、気づかれるにしろ、少なからず時間は稼げる。子どもを救うことに関しては、残念ながら初めから計算に入れていない。あれらは元より助かるはずのない人間だ。既にキヤスターに魔術を仕込まれ、助けたところで化け物の依代になる。そんな希望を与えるぐらいならば、いっそ殺されてしまった方がマシなのだ。

「ここからは二手に分かれるぞ。私はランサーのマスターを叩く。お前は……」

「あなたの命令なんて聞くつもりないわよ。私は私で勝手にやらせてもらうから」

「……そう言うと思っていた。好きにしろ」

キヤスターが、アヴェンジャーに対して『ジャンヌが』と言った時から、アヴェンジャーは心底不機嫌だ。常に粗暴な口調のまま。道中でも、気を紛らわせるためか、綺礼に対して毒を吐いた。別段、綺礼は気にしていなかったが、アヴェンジャーの心中は大体察していた。

「だが、一つだけ忠告しておく。……奴は狂っている。情けをかけようと思うな」

「はっ。何を言うかと思えば、そんなものをかけるのはあの女だけよ。」



私は復讐者。救いの手を差し伸べる事も、罪を赦す事もないわ」

それだけ言って、アヴェンジャーは霊体化してその場から消える。アヴェンジャーが離れていくのを感じながら、綺礼もまた逆方向へ向けて走り出す。

綺礼の狙いは二つ存在する。

一つ目はキャスターの討伐。

それに関しては、アヴェンジャー次第だが、先程の反応を見れば、彼女がキャスターに情けをかける事も、加勢に入る事もないのは火を見るよりも明らかだ。捻くれてはいるものの、通すべき筋がある事をキチンと理解している。自分が関係しているだけに、自らケリをつけに行っただのだ。

ならば、綺礼はどうするか。

答えは至ってシンプル。

キャスターはアヴェンジャーに任せ、自分はサーヴァントを連れていない者達を狩る。

そしてその標的は……意外にもすぐに出会った。

とはいえ、出会ったのは人ではなく音。

不意の殺気が、フルオート射撃の圧倒的火力が、綺礼を襲った。

だが、綺礼はそんな事などわかっていたとばかりに抜き放った黒鍵で全て叩きおとす。

この不意打ちを覚えていたわけではない。流石に細部までは綺礼として覚えていない。

それに対応できたのは、『相手が衛宮切嗣か、或いは久宇舞弥の何れかである』と踏んで、不意打ちに対する全てに警戒をしていたからに他ならない。

続けて放たれる第二射。

全く別の方向からの射撃に、綺礼は幻惑の術にかかっている事に気づく。

これはマズい。

銃撃の方角はおろか、殺気さえも演出できるのなら、五感はアテにならない。ともすれば、戦士としての経験値を、この綺礼は持っている

ない。所詮は成りかわり。言峰綺礼というロボットを動かす操縦者でしかないのだ。

しかし、だからこそ。

背後から襲った銃弾の雨を綺礼は全て叩き落とし、そして銃弾の主を見つけることが叶った。

五感が頼りにならないならば、経験値が不足しているのならば、後は知識で補うほかない。

事ここに至って、綺礼は『あの者達ならば、こうする』というただの予測を以って、その弾丸を弾いてのけた。

タイミングはドンピシャ。脊髄を撃ち抜くはずの弾丸をゆうに叩き落とし、その目は狙撃位置にいた舞弥を捕捉していた。

完全なる不意打ちに対応しきった綺礼に、身を強張らせた舞弥であつたが、彼女とて伊達に切嗣の助手をしているわけではなかった。驚きとは無関係に手にしていたキャレコの照準は綺礼に向けられ、発砲していた。

だが、綺礼は両腕で頭をガードするだけで、避けようとすらしない。詰め襟の僧位は袖まで分厚いケブラー繊維製。しかも、教会代行者特製の棒の呪札によって隙間なく裏打ちを施されている。九ミリ口径の拳銃弾程度ならば、例え至近距離であろうとも貫通は望めない。それでも秒間十連発で叩き込まれる二百五十フィートポンドの運動エネルギーは、まさしく金属バットの猛打のように綺礼の総身を殴り続ける。

しかし、それに怯む綺礼ではない。

鍛え上げられた肉体が、骨と内臓を守りきっているお蔭で、表面的な痛みが走ろうとも、臆するほどではないのだ。今ここで臆せば、それこそが死につながりかねない。

ただの数歩でその距離のほとんどを詰め寄った綺礼に、弾が効かないと判断した舞弥はキャレコを投げ捨て、太ももからサバイバルナイフを引き抜いた。

ケブラー繊維は弾丸に対する耐性とは裏腹に、刃物による切断にはきわめて脆い。その判断は間違っていない。

こと、相手がこの綺礼であることを除けば。

弾幕が途切れたところで、綺礼は右手に一本だけ黒鍵を手にする。あくまで投擲に特化した刃物であるために、機敏さや取り回しにおいては、舞弥のサバイバルナイフよりも圧倒的に不利。特に懐に飛び込まれれば、どうしようもない。

だが、それは無傷で相手を制する場合である。

突き込まれたサバイバルナイフを、綺礼は空いていた左手に突き刺すことで、受け止めた。

「っ！」

予想だにしない防御に、今度こそ舞弥は隙を作ることになった。そして、その隙は綺礼に最も見せてはならないそれだ。黒鍵の握られた腕は舞弥の首めがけて放たれー！。

「動くな、とは言わん。死にたいのなら動け」

首元で止まった。

この攻防にかけられた時間は十秒にも満たない。

その十秒にも満たない時間で、綺礼は左手に風穴を作り、舞弥の生殺与奪の権利を握っていた。

「くっ……」

「やめておけ。そちらが指一本動かすよりも、こちらが首を掻き切る方が速い」

自分の命は優先順位の中で、最も低い舞弥であるが、その命を賭しても、この代行者に与えられる傷は微々たるものである事を悟っていた。

絶体絶命の状況、この状況で舞弥が取るべき選択肢は、ただ一つ。切嗣から指示されたアイリスフィール逃走の援護のみ。それに対して最善策を考えるだけだった。

だがそこで、舞弥は目を疑った。

「マダム、いけない！」

舞弥自身、これほどまでに今の自分が恐怖や狼狽を表に出してしまふとは思ひもなかった。

綺礼の侵入を察知し、その迎撃に当たると結論を出した時、アイリ

スフィールは終始身を隠して掩護に徹するものと、申し合わせてあったのだ。その彼女が、魔術の行使以外には一切の闘争手段を持たないはずのアイリスフィールが、木陰から飄然と姿を現して、綺礼に対峙したのである。

無謀の極みである。

アインツベルンという魔導の一族は錬金術に特化するあまり、戦闘魔術の運用を不得手とすることで知られている。三度の聖杯戦争において悉く緒戦での脱落を余儀なくされたのも、彼ら北の魔術師一門が実戦において、甚だ脆弱であったが故だ。衛宮切嗣という傭兵を召抱えるに至ったのも、その屈辱の記憶による反省だった。

ならば、護衛の女が地に伏したこの状況下において、セイバーのマスターと認識されているはずの彼女が、単身で綺礼の前に立ちはだかるといふ展開は、まずありえない事態である。

けれども、綺礼は全くと言っていいほどに驚かない。驚く要素など何もないからだ。

「アインツベルンの女よ。意外に思うかもしれないが、私はお前を倒す目的でここにいるわけではない」

「解っていますとも。言峰綺礼。あなたの目的は知っています。しかし叶わぬ相談です。あなたが衛宮切嗣にまで辿り着くことは――」

「だから、それが違うと言っているのだ」

アイリスフィールの言葉を、綺礼はぴしゃりと言い放ち、否定した。

これに驚いたのは、他でもないアイリスフィールと舞弥であった。

この男の狙いは切嗣。

その確信を持って、彼の元には行かせないと立ちはだかつたにもかかわらず、その相手は否定したのだ。衛宮切嗣の元に向かうのが目的ではないと。

「なんですって?」

「私の目的は、衛宮切嗣ではない。私よりも先にこの地に侵入したランサーのマスターが目的だ。どこへ行ったか、行方が分からなかったが、キャスターを追う過程で偶然見つけた。あの男を排除するためには、私はこの地に来た」

元より、アイリスファイルも舞弥も、綺礼は眼中になかった。切嗣さえもだ。

ここに来たのは、キャスターの討伐とランサー陣営の排除。前者はアヴェンジャーとの因縁から、後者は時臣と対峙することがあった時、魔術戦で時臣を制することが唯一出来る人間であるからだ。

切嗣に関しても言える事だが、今は優先順位が違う。仮にここで切嗣を消したとしても、その直後に今度は自分がケイネスに襲われる。それならば、いつそケイネスを排除してしまおうという魂胆だった。

「そこでだ。お前達と交渉がしたい」

綺礼は懐から一枚の文書を取り出し、アイリスファイルの足元に向けて投げた。

魔術的な仕掛けがないかと警戒をしたアイリスファイルだが、それも綺礼の略歴を見ていただけに無いと判断し、おそろおそろ拾い上げる。

「つ……これは……『自己強制証明』!?」

『セルフギアス・スクロール  
自己強制証明』。

権謀術数の入り乱れる魔術師の社会において、決して意識しようのない取り決めを結ぶ時にのみ用いられる、最も容赦ない呪術契約の一つ。

自らの魔術刻印の機能を用いて術者本人にかけられる強制ギアスの呪いは、原理上、いかなる手段を用いても解除不可能な効力を持ち、命を差し出そうとも、次代に継承された魔術刻印がある限り、死後の魂すらも束縛される。決して後戻りの効かない危険な術だ。この証文を差し出した時点での交渉は、魔術師にとっては事実上、最大限の譲歩を意味する。

魔術回路を十分に開発していない綺礼とて、例外ではない。その呪いは十分に効力を発揮する。

それを出された事にも驚きだったが、内容もまたアイリスファイルを驚かせるものだった。

「どういっつもりっ!」

「それはさつき説明した。私の目的はランサーのマスターだ。衛宮切

嗣には此度は用がない……が、それだけでは到底信用されまい。なればこそ、私は交渉を持ちかける」

その内容を要約すれば――。

『言峰綺礼とその関係者及びサーバントは、ランサーとそのマスターを排除するまで一切の危害をセイバーのマスターとその関係者及びサーバントに対して直接的・間接的にも与えない』。

『セイバーのマスターとその関係者及びサーバントは、ランサーとそのマスターを排除するまで一切の危害を言峰綺礼とその関係者及びサーバントに対して直接的・間接的にも与えない』。

『また、ランサーとそのマスターを排除した後十二時間は、互いに危害を加えられないものとする』。

というものだった。

あまりにも目を疑う内容に何度も繰り返し目を通すが、証文の内容が変化することもなく、違う解釈が成り立つ余地もないことを理解した。

「もちろん、それはお前ではなく、本当のセイバー衛宮切嗣のマスター綺礼に持ちかけるものだ。お前達にはこちらを要求する」

綺礼もう一つ投げ渡したのは、要約すれば『これより十二時間の間、言峰綺礼、久宇舞弥、アイリスフィール・フォン・アインツベルンは互いの危害を加えることを禁ずる』というもの。こちらは舞弥とアイリスフィールの同意があれば、すぐに契約完了となるようにされていた。

「所謂停戦というやつだ。私からしてみれば、お前達と戦う理由も、殺す理由もない。そしてお前達も、私が衛宮切嗣に危害さえ加えなければ、特別敵視する意味もないわけだ。ことこの場に限って言えばの話だがな」

確かにその通りだ。

あくまでも二人が綺礼を阻むのは切嗣のため。綺礼が切嗣を狙わないのなら、阻む理由がない。

だが、それでも理解できない。

何故この男がこのような交渉を持ちかけてきたのか。アヴェン

ジャーのマスターが、綺礼である事は既に分かっている。アヴェンジャーは決して弱くない。ランサーを相手に一歩も引かず、それでいて浅くない手傷を負わせたほどだ。遅れをとってははいない。

だというのに、何故ランサーを排除することに拘るのか、その疑問が脳裏をよぎった時、綺礼がそれに応えるように言う。

「私は魔術師狩りを専門とする代行者だ。しかし、ものには限度がある。かのロードは私では到底勝てる道理がない」

「……それで、切嗣となら勝てるかと踏んでの交渉というわけ？」

「ああ。『魔術師殺し』メイガス・マーダーの異名を持つ奴ならば、ロードなどに遅れは取るまい」

切嗣がどのようにしてケイネスを相手に立ち回るのはアイリスフィールにはわからない。仕事をしている切嗣の姿を見たことがない彼女はそれに対して力強く頷く事はできないが、何も勝算無しに切嗣がケイネスを迎え撃とうとするはずがないのは理解している。

「私などいなくとも衛宮切嗣はロードを倒す可能性は十分あるが、それでは困る。確実にロードにはこの聖杯戦争から脱落してもらおう。そのダメ押しとしての一時的な同盟関係だ。断るならお前達を排除して、衛宮切嗣がロードを倒した後、奴も殺すつもりだが……どうする」

悩むアイリスフィールにダメ押しとばかりに綺礼は言い放つ。

もしもこの交渉に応じなければ、貴様達にはここで死んでもらうと暗に綺礼はそう告げていたのだ。

今のこの状況では、アイリスフィールも強く出られなかった。交渉を終わらせた時点で、応じなければ舞弥の首が飛ぶ。そして殺傷手段を持たない自分では、ほんの数秒程度の時間を稼ぐので精一杯だ。そしてその程度時間を稼いだところで、切嗣のところに向かうのは明白だった。

とはいえ、ここで自分の一存で契約を果たしていいものか、というのもアイリスフィールの考えだった。

確かにここで綺礼の提示した条件に則れば、切嗣も、自分達も無事。それは最も望んだ結果だ。綺礼の発言通りなら、いかに切嗣が警戒し

ていたとしても、何らかの形で契約をするはずだ。

しかし、何故かわからないが、アイリスフィールは綺礼を行かせてはならないような気がした。言葉で表現は出来ないが、言いしれぬ不安が、アイリスフィールにはあった。

「早くしろ。時間がない。交渉に応じるか、この場で死ぬか。二つに一つだ」

全く焦るような素振りも見せず、綺礼は手にした黒鍵に力を入れる。

死がより一層近づいても、舞弥は何も言わなかった。本心では応じるなど言いたいが、切嗣の命令を守るのなら、交渉に応じるなど言えず、かといって応じろとも言えない。それ故に、アイリスフィールに任せるという意思表示でもあった。

どちらを選んだとしても、決して良くない事が起きる。

ならー。

アイリスフィールは胸に手を当てて、綺礼を力強い眼差しで見た。

「承りました。言峰綺礼。契約に応じます。一時ですが、貴方の戯言を信じましょう」

「……感謝する。女を手にかけるのには抵抗がある」

黒鍵の刃を消して、懐にしまいこむ。

綺礼はアイリスフィールから切嗣用の『自己強制証明』セルフギアス・スクロールを受け取ると、すぐさまアインツベルン城へと駆け出した。最早、二人に興味はないとその背中が語っていた。

「……申し訳ありません、マダム。私が不甲斐ないばかりに……」

キヤレコを向けるが、引き金を引く指がピクリともしないことで、銃口を下ろし、申し訳なさそうに舞弥はアイリスフィールに謝罪の言葉述べた。

「いいえ。舞弥さん。あなたには何の落ち度もないわ。私もごめんなさい。二人で決めたことなのに、約束を破ってしまって」

アイリスフィールもまた勝手に姿を現してしまったことへの謝罪をするが、それでも後悔はなかった。結果として誰も死なない。生きること切嗣から学んだアイリスフィールはこの結果を決して悲観



することはなかった。

ただ一つ、悔やむとすれば、それはあの代行者を信じて送り出すほ  
かなかったという事実のみだった。

(……やはりな。私では人間を殺せないか)

未だ震える自分の手を見て、綺礼は冷静にそう思った。  
可能性は十分にあった。

切嗣を殺せなかった時、魔術の干渉でないと知り、真っ先に疑った  
のはその線だ。

殺せなかったのは他でもない自分自身に人を殺す覚悟が足りない  
だけなのではないかと。

結果から言ってしまうえば、それは正しかった。

自分には人を殺す覚悟も度胸もない。人の死を、その重さを背負う  
度胸がないのだ。

本能的にそれを止めてしまう。排除しなければならぬと頭の中  
で断じていても、その実、綺礼は最後の一线を越えられないでいた。  
だからこそ、回りくどくあんな物を用意した。殺せないのなら、自  
分の手を汚す度胸がないなら、その度胸をつけるよりも、別の手段を  
講じたほうがいい。つまるところ、人を殺すか殺さないかという選択  
を強いられた綺礼は、その選択から逃げたのである。

自分が殺せないから、切嗣に殺させる。

適材適所といえば聞こえはいいが、結局のところ罪を背負うことを  
綺礼は良しとしなかった。

舞弥でそれを改めて確認した綺礼は、切嗣の元へ向かう。既に戦い

は起きているのか、外にいても聞こえる爆発音は、ケイネスが切嗣の術中に嵌っていることの証明でもあった。

既に破壊された窓から侵入した綺礼は、中の惨状を見て、静かに息を呑んだ。

これが本当の言峰綺礼ならば、この程度の惨状では眉一つ動かさないであろうが、こちらは違う。

これから赴くのはまさしく死地。間接的に一時同盟を組んだとはいえ、ここは無数に仕掛けられた罠の宝庫だ。ケイネスのために仕掛けられた罠は、あの契約の対象外。それによつて死に至つたとしても、切嗣には何の非もないのだ。

幸いだとすれば、その惨状を辿つていく事こそが最も安全で、そしてロードと切嗣の居場所を教えてくれる近道という事である。

「……？」

そこではたと気づく。

足元に糸ほどの光る筋が垂れている。

微量だが、それが水銀の雫だとわかると即座にその場から飛びのいた。

直後、綺礼が先程までいた真上の天井が円形に切り抜かれ、ポカリと空いたその開口部から、コート裾を翻して階下へと降りてくる影があつた。

「貴様は……あのネズミではないな？」

綺礼の顔を見て、降り立った影の主ーケイネスは疑問の声を上げた。

彼の礼装たる『ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液』は自動索敵を組み込まれているが、それは目があつて相手を視認しているわけではなく、空気振動を判別して、気温の変化から熱源を察知しているだけに過ぎない。

本来なら切嗣を探すために行つていた自動索敵で、たまたま切嗣よりも綺礼の方が先にかかったただけなのだ。

綺礼も綺礼で、ケイネスの全身をくまなく見て、小さく舌打ちをする。

ーーまだ無傷か。しくじつたな。

遅れて侵入したこと、アイリスフィールや舞弥とのやり取りで、綺礼はてつきりケイネスは肩に一撃もらっている頃だろうとタ力をくくっていた。

しかし、その実ケイネスは未だ無傷。よりにもよって、切嗣が怒らせるよりも早くにケイネスと邂逅を果たしてしまっていた。

「まあいい。貴様もあの男の仲間だろう。魔導の面汚し共め。――Scalp!」

「っ!」

ケイネスの宣告とともに、それに応じて伸びた銀の鞭が左右からはさみ込むように綺礼を襲う。

この狭い通路だ。左右を塞がれてしまつては、綺礼に回避する術はない……常人ならば。

けれども、綺礼は知っている。

その攻撃が組み込まれたもので、軌道は単調なものであることを。それにあれだけ攻撃の意思を見せれば、避けることは容易い。

ケイネスの詠唱とほぼ同時に後ろに飛んでかわした綺礼は、黒鍵を投擲する。

人間の投擲速度にして、それはありえない速さであるが、飛来する銃弾やクレイモア地雷にも瞬時に対応できる自動防御はその程度の威力と速さに遅れをとりはしない。

すぐさま防御態勢を取り、ケイネスを黒鍵から守る。

無論、綺礼としてそれはわかっている。

わかっているからこそ、投げた。その際にケイネスの目の前から逃走するため。

外ではなく、中へ。一時同盟の相手である切嗣と合流するために。

「これは……成る程。代行者か。揃いも揃って卑賤の輩ばかりとはな」

ケイネスの中にあつた僅かな怒りの炎が再度燃え上がる。

よりにもよって、魔導の名門でありながら、機械仕掛けの小細工に頼るネズミに、更には魔導の尊さを理解しない代行者を使役しているなど、手段を選ばないというにはあまりにも度し難い。一人でさえも

許容できないというのに、それがもう一人などと断じて許せるはずがない。

「ゴミ共めが。死んで身の程を弁えるがいい」

再度、自動索敵の為にその形態を変化させた水銀が、二匹のネズミを探し出す。

それは実に数秒にも満たない時間だった。どれだけ逃げようとも、この城内にいる限り、この水銀の索敵からは決して逃れることは出来ない。

意気揚々と歩みを進めるケイネス。

だが、はたして。

逃れられない運命にあるのはどちらか。

「探したぞ、衛宮切嗣」

死神のごとき代行者が目の前に現れた時、切嗣の心境はとても穏やかではなかった。

ロードだけならば、切嗣も遅れはとらない。知らず識らずのうちに狩る者が狩られる者に変わっていることにも気付かせず、素早くその命を絶つ自信さえあった。

しかし、その代行者がいるのなら話は別だ。

外法の者をさらなる外法を以ってして狩る切嗣の思考を唯一読み取り現れる男。

この聖杯戦争において、切嗣の天敵である人物が殆ど目を置かずして、目の前に現れた。

当然だ。これは聖杯戦争。目を置かずして邂逅を果たすのは必定であった。

かの代行者を、綺礼の姿を捉えた瞬間、すぐさまキャレコの銃口を向け、発砲しようとする……が、それよりも先に何かの文書が投げら

れる。

何だ？

それを考える間もなく、目前まで迫っていた綺礼が口を開いた。「そう慌てるな。私は、何もお前を葬るためにここに来たわけではない。同じ標的を持つ者同士、一時休戦と行こうではないか」

「……何？」

これには流石の切嗣も問い返さずにはいられなかった。

綺礼がロードを狙うのは当然だ。相手はマスター。この聖杯戦争において、マスター殺しは常套手段でもあるし、切嗣も元よりそれを狙っている。

だが、それを何故切嗣と共に行おうとしたのか。

勝機があるなら自分一人で挑めばよし、仮にこちらの手段を知って、ロードを殺せると判断したのなら、それを待って仕留めたところを後ろから狙えばいいだけの話だ。何も同盟を組む道理はない。

「ロード・エルメロイにはここで脱落してもらおう。確実にだ。衛宮切嗣。確かにお前の戦術は完璧だろう。だがな、お前はセイバーやランサーの掲げる騎士道とやらを甘く見過ぎだ。アレは正当なる果し合いの場を設けるためなら、ランサーをこの場に超越すだろう。ロード・エルメロイの意識があろうとなかろうとな」

つまりとところ、綺礼が一時同盟を組むにあたっての言い分は、切嗣の詰めของ甘さではなく、サーヴァントとの意識の差にあるという事だった。

事実、綺礼の知る原作において、セイバーはランサーがケイネスの元に向かうのを制止するどころか送り出している。無論、それは二人における緒戦の相手であった事も起因しているだろうが、そうでなくとも、セイバーはランサーがマスターを救出する事を是とし、正面から己が武技を以って倒すことをよしとするだろう。

どの道放っておけば切嗣が殺すとはいえ、アヴェンジャーがキャスターを屠ることを前提条件とした場合、ランサーは二槍のまま、マスターを妻であるソラウに代えて参加する事になる。

それでは駄目なのだ。不確定要素は徹底的に排除する。

ここにはキャスターに加え、ランサーも脱落させるつもりで綺礼は臨んだのだから。

「同盟を組むにあたって、『自己強制証明』セルフギアス・スクロールを用意した。私達はロードが倒れてもすぐには手出しが出来ん。無論、それを信じるお前ではないことは知っている、だが、少なくともロードを排除するまではお前も私も互いに危害を加えることはできん。何の気兼ねもなく、ロードを排除できるというわけだ」

もつとも、契約を結べばの話だがと綺礼は締めくくる。

足元を見れば、一瞥するだけでそれが『自己強制証明』セルフギアス・スクロールである事は理解した。

聞きたいことがないわけではない。寧ろ、『自己強制証明』セルフギアス・スクロールを使用してまで、切嗣と手を組み、ロードを排したい理由も気になる。

だが、それよりも早くに、悠然とした足取りで、ケイネスが曲がり角から現れた。

「どうした？もう逃げんのか、ネズミ共」

余裕綽々のケイネスが、二人を見据える。

「二人一緒とはありがたい。一々ネズミを追いかけて回すのは面倒だ。」

自らの礼装に絶対の自信を持つケイネスは、目の前の二人が逃げるだけしか能のない相手だと完全に見下していた。

いくら機械仕掛けに頼ろうとも、自らの礼装を突破できるはずもない。

何の警戒も懐かずにケイネスはゆっくりとした足取りで二人の元へと歩いていく。

「どうする？この場で三竦みに持ち込むか、それとも一度休戦するか。二つに一つだ」

警戒をそのままに切嗣は文書にさらっと目を通す。

確かに内容としては問題はない。信用出来なくとも、この呪いは綺礼に解けず、それがあれば後ろから刺される事はない。

ならば、どうするか？今はどちらに持ち込めば、最小限のリスクで目的を果たせるか。

考えるまでもない。三竦みに持ち込むよりもこの場で敵を一人に絞り込んだ方が安全かつ確実に葬れる。それが魔術師ともなると尚更だ。三竦みに持ち込む理由がなかった。

個人の感情を殺し、あくまでも機械的に思考を働かせた結果、切嗣は即座に一時休戦を飲み込んだ。

そして距離が十メートルほどになったとき、切嗣が手にしていたキャレコを発砲……しようとしたところで、綺礼が手で制した。

「待て。お前が何をしようとしているのかはわかるが、やるのはまだだ。やるなら一撃で殺せ」

その制止を無視しようにも、銃口にかぶせられた手が邪魔で引き金が引けないと判断した切嗣は小さく舌打ちする。

綺礼は空いている右手で黒鍵を三本投擲し、有無を言わせず、切嗣を担いだ。

いくらあの礼装が優れているとしても、単一である限り、同時に防御と攻撃は出来ない。まして、それが組み込まれた術式なのであれば、尚更機転は効くはずもないとらんでの逃走方法だ。

そして綺礼の読み通り、ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液はさききに防御に転じた。

その隙に綺礼は駆け出し、その場から離れる。成人男性を一人背負つていようと、鍛え上げられた肉体にはさしたる問題はなく、枷たりえない。

索敵の範囲内にとどまりつつ、決してケイネスが攻撃出来ない位置で足を止める。

今の時点においても、ケイネスにとって自らは狩る側。切嗣と綺礼は狩られる側だ。

それは実力に裏打ちされた自信であると同時に、大きな間違いであるのだが、それに未だ気づいていない。

まだ好機は十分に……否、多分にあった。

あれ程狙いやすい敵もないな、とほくそ笑みつつ、綺礼は担いでいた切嗣を下ろした。

「数十秒は来まい。今の内に、奴を一撃で殺す算段をつける」

切嗣は何も言わない。既に頭の中であの魔術師を殺す算段は付い

ている。それは、綺礼が言うところの一撃ではないだろうが、それでも確実性はある。

「とはいっても、まあ単純だ。衛宮切嗣。お前は奴の頭か心臓を狙え。いかな魔術師といえど、何の対策も無しに急所を破壊されては打つ手はあるまい。隙は私が作る」

「どうやってだ？」

こればかりは切嗣も聞かねばならなかった。

別に目の前の男が匣を買って出るならそれも構わない。そしてそれに失敗して死んだとしても、切嗣にはマイナスどころかプラスにしかならない。

だが、それが失敗して、自分もまた窮地に立たされる可能性がないわけでもない。

なればこそと問い返した。

「貴様の銃……キャレコと言ったか。それを貸せ。お前がやろうとしていた事を、私がしよう」

「っ……い」

切嗣は息を呑んだ。

この男、一体どこまで自分の行動を読んでいたのかと。

ヴォールメン・ハイドラグラム

月 霊 髓 液の弱点を見抜いていた切嗣は、先程ケイネスにキャレコを発砲しようとした折、ある事を狙っていた。

それはキャレコの発砲から阻まれ、不可能となったが、綺礼はその一連の戦術を読み、理解していたと言いつつ放ったのだ。

これが恐怖と言わずして何だというのか。暗殺者が、その行動全てを読まれるというのは即ち死に直結する。そしてそれを綺礼は平然とやってのけるのだ。現時点においては無害のこの男が、切嗣にとっでは今追ってくる魔術師よりも遙かに恐ろしい存在だった。

そんな事など露知らず、綺礼は手を出す。

もちろん、銃の事などさして詳しくない綺礼であるが、発砲出来る状態にあるのはわかっている。反動を制御するだけの力は持ち合わせている以上、後はケイネスに防御させるだけの命中率があれば良いのだ。元より、それは牽制にしか使わないのだから。



切嗣は迷った。

この提案を断つても、この男はおそらく牽制を買って出る。成功確率は下がるし、綺礼の死亡率も上がる。願ったり叶ったりだ。

だが、それでケイネスを殺す機会を逃してしまつては意味がない。ケイネスが来て、綺礼が来ているということはキャスターはセイバー、ランサー、アヴェンジャーの三人のサーヴァントを相手にしているのだ。自らの工房でない場所でキャスターが三人を相手に大立ち回りが出来るとは思えない。ケイネスが倒れる前に、お互いのサーヴァントが帰還するだろう。その時また上手い具合にマスター同士の戦いになるかは運任せだ。とても効率的とはいえない。

ならば――今は。

「……いいだろう。今は、お前を利用してやる」

「ふつ、それでいい。元より、そういう契約だ」

信頼も信用もない関係であるが、この局面で道具として使うのなら、十分な駒だ。一人でするよりも十分に効率的だ。

キャレコを受け取る綺礼はすぐさまケイネスの歩いてくる方角に向けて、銃口を向けた。姿は見えないが、その気配で、隠そうとしない足音でわかる。

「十秒だ。十秒経ったら撃て」

「わかった。しくじるなよ」

綺礼の挑発じみた言葉に、切嗣は眉一つ動かさない。

弱点はわかった。隙を作る人間もいる。狙いの動きは微々たるものの。ここまでの条件があつて、衛宮切嗣の手元を狂わせる可能性など微塵もなかった。

十数メートル先で、姿を現したケイネスは、銃口を向けられてなお、ほくそ笑んでいる。

既にキャレコが効かないのはわかっているし、切嗣の手に握られたコンテナーも見たところ大した事はなさそうだと、高をくくつていた故の危機感の無さだった。

相手は防御膜を突破できない。警戒する価値すらない。

一步、また一步とネスミを追い詰めたつもりのケイネスは相手に絶

望感を与えるつもりで近づいていく。

だが、これが切嗣にさらにチャンスを与えることになっているのを、ケイネスは気付かない。既に頭部に定められた狙いは、例え遮蔽物の向こう側に姿が消えようとも、位置関係が変わらないのであれば、あつてないようなものだ。それこそ、その遮蔽物が軌道を変えるだけの耐久性を兼ね備えていなければ。

衛宮切嗣という男をもっと警戒していれば、聖杯戦争を『聖戦』ではなく『戦争』だと認識していれば。

そんな後悔をするのも、死した後だ。そして何より、苦しまずに済むことが、彼にとつての救いなのかもしれない。

時は来た。

きつちり十秒数えた綺礼は、引き金を引く。

反動で跳ね上がりそうになるキャレコを半ば力づくで抑え、ばら撒くように発砲する。

「馬鹿め……無駄な足掻きだ」

防御膜の向こう側で笑いを零すケイネス。

弾幕が尽きるのは数秒後。その瞬間、ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液がケイネスの

命令と共に二人を襲う。

尤も、その数秒後が訪れる事は無いのだが。

ケイネスの頭部に狙いが定められていたコンテナーの引き金が引かれる。

キャレコの弾幕に対応するように展開された防御膜は、その威力と攻撃範囲故に薄く広がっている。そして一旦薄く広がってしまった液体に、瞬間変形を遂げるだけの圧力をかけるのは不可能だ。偏に流体力学の限界だ。

よつて、新たな大威力の攻撃に対し、水銀は即座により強固な防御形態を取ろうとしたものの、当然間に合うはずもなく。

鏡面のような水銀の膜に、ズボリと黒い大穴が空く。そして貫通したスプリングフィールド弾は、その標的の頭蓋を貫き、脳漿を地面にぶちまけさせるに至った。

悲鳴も、怒りによる罵声も無い。

ただの水銀の溜まりに、崩れ落ちるその体には、既に生命活動を感じさせるものは何一つなかった。

## 交錯する想い

「…………ふむ。確かに死んでいるな」

頭部を失ったケイネスだったものを見て、生死を確認した後、ふうと息を吐いた。

二度目の死線。慣れたつもりでいた綺礼だが、こうして死体を見下ろしているのは初めての体験だった。

まじまじとももの言わぬ物体と成り果てたケイネス。

これで二人目が脱落した。原作のことから鑑みても、ケイネスがここから蘇生することはまずありえない。

そう確信した途端、綺礼は酷い眩暈に襲われた。

さらにぶち撒けられた脳漿を見て、激しい嘔吐感に苛まれる。

死線を越えたのは二度目だ。だが、人の命を奪う手伝いをしたのは、これが初めてだ。

ケイネスを直接的に死に至らしめたのは衛宮切嗣である。

けれども、そうなるように仕向けたのは、ここで死ぬように仕向けたのは他でもない己自身だった。

今すぐ惨めにその場にくずおれ、こみ上げる嘔吐感に抗うことなく、全てを吐き出したいという衝動。

殺した相手が雨龍龍之介なら。あのような人でなしなら。これ程罪悪感はなかったのかもしれない。

平静を保つことさえも億劫になる。もしも、今切嗣が襲ってくれば、呆気なく綺礼は殺されてしまうことだろう。

(違う。これは仕方のないことだ。生きる為には…………仕方のないことなんだ)

自分に何度も言い聞かせるように心の中で反復させる。

「…………これで契約履行だな」

はたと切嗣の言葉で意識を戻す。

そうだ。今はそんなことを考えている場合ではない。

ケイネスは死んだが、まだランサーはいる。いくらマスターを失っても、魔力供給を行っているのはその妻であるソラウ。消えるまでに

は他のマスターと比べて幾分時間はある。それまでに代わりのマスターを見つけれれば終わりだが……。

「ランサーは私のサーヴァントが始末するだろう。それで完璧だ。半日後には、また敵同士だ」

それこそが正しい形だ。切嗣と綺礼は一時的な利害の一致以外に同盟を結ぶ事などありえない。綺礼自身は、時臣を勝たせる為に、切嗣は己自身のため、真つ先に排除すべき相手なのだから。

用がなくなれば、早々に立ち去るのみ。

アインツベルン城から立ち去ろうとして、ふと一つの疑問が綺礼の足を止めた。

「……一つ。貴様に聞きたい事がある」

慣れた手つきで煙草に火をつけた切嗣は相槌こそ打たなかったが、その場を離れない事が話を聞いているという返答と同じだった。

切嗣からしてみれば、聞く意味はないが、この得体の知れない男の正体を掴めるかもしれないと考え、おそらく意味もないであろう話を聞く事にした。

「貴様も聖杯戦争に参加している身だ。経歴がどうであれ、聖杯にかける願いは自らでは成就する事が叶わない大望なのだろう」

もちろん、誰しもがそういうわけではない。ケイネスは経歴に箔をつけるためである以上、聖杯を必ずしも望んでいるわけではない。

しかし、綺礼は知っている。

切嗣が聖杯にかける願いを。アインツベルンの悲願とはかけ離れた、この男の理想を。

そして、知っているからこそ気になった。

「しかし、だ。貴様の願いは。全てを投げ打つても叶えるべきものか？」

「……何？」

これには切嗣も反射的に疑問が口から漏れた。

「貴様にはアインツベルンに妻が一人と娘一人。そして仕事のパートナーが一人いるな。そのいずれもが貴様を愛しているのだろう。だからこそ、あの二人は貴様の元に行かせまいと立ち塞がったわけだ

が」

そう。全ては愛する男を守らんとするため。

その為に、アイリスフィールも、舞弥も、綺礼の前に立ちはだかつた。

セイバーの本当のマスターだから。そんな理由からではない。確かにそこには、人としての情があり、愛があった。

ならばこそ、問わねばならない。

「衛宮切嗣。貴様の願いはその者達よりも尊いものなのか？」

素朴な疑問だった。

切嗣を愛する者がいる。切嗣もまた愛する者がいる。

その存在自体が既に尊いものだ。必ずしも全ての人間が得られるものではない。嘗ての、本来の言峰綺礼がそうであったように。

切嗣は答えなかった。

――否、答えられなかった。

世界の恒久平和。それこそが衛宮切嗣の願いであり、嘗て正義の味方を志した一人の男の終着点と言えた。

今まで多くの命を奪った。大を生かす為に小を切り捨て、手段を選ぶことはしなかった。例え、思い描いていたものでなかったとしても、あの日の惨劇を繰り返さない為にと。

自分の力のみでは世界から争いを根絶できないとわかっている。

だから、アインツベルンに誘いを受け、聖杯の存在を知った時、切嗣にとってまさしく天啓にも等しかった。

今まで奪った命も、生み出した惨劇も無駄にはならない。

万能の願望機を持って、願いを成就させる。

その為に妻を殺す決意はした。大聖杯へと繋がる小聖杯であるアイリスフィールは、サーヴァントが脱落し、その魂がくべられていく度に人としての機能を失い、最後には小聖杯へとなる。

切嗣が勝ち抜こうが、勝ち抜きまいが、聖杯の完成は文字通り。アイリスフィールの死を意味していた。

そんなことはわかっている。そして、アイリスフィールはそれをわかった上で、娘には、イリヤスフィールには幸せであってほしいと願

い、何より夫の理想を叶えたい為に死を受け入れている。

舞弥もまた同様だ。切嗣の部品パーツであるならば、自らの死を怖れず、命懸けで切嗣の援護をする。聖杯戦争の途中、命を落とすような事があっても、切嗣の為に死ぬのなら、それで本望だ。

その全てを切嗣は承諾している。

……だが。

それが、己が願いが、彼女達よりも尊いのかと、そう言われて、切嗣は言葉を失った。

終ぞ己が力のみで叶えられない願いだ。万能の願望機でもって叶えなければ、絶対に不可能な。そんな大望だ。この機を逃せば、切嗣にはもうチャンスがない。

けれども、はたしてその願いは妻達よりも『尊い』ものなのか。

切嗣の中に答えはなかった。

いや、答えはあった。

けれども、何の迷いもなく、何の憂いもなく、確固たる信念を持って、それを良しと答えられなかった。

その様子に、綺礼は踵を返した。

答えられなかった事こそが答えだ。

そして、それ故に綺礼はただ一つ。決心をした。

——この男にだけは敗北してはならない、と。

例え、サーヴァントを失っても、抵抗する力を失い、地べたに這いつくばっても。

理解している。衛宮切嗣の願いを。

それ自体は今までもこれから、誰もが願うことだ。実に素晴らしい理想だろう。

だが、それはただの『理想』であり、願い努力する程度であるからだ。

断じて、『愛しき者を捧げる』という過程を経てまで達成すべきものではない。

言峰綺礼あの男とは別の理由かもしれない。

けれども、確かに。

言峰綺礼  
自分にも、確固たる理由で衛宮切嗣と戦う理由ができた。

side out

ランサーが主の死を察知したのは、ケイネスが死して間もなくのことだった。

通常、サーヴァントとマスターはいずれか一方が甚大な危機に陥れば、もう一方にも気配でそれが伝わる。

それは魔力供給と契約者を別個にするという変則的な契約でも、十分に機能している。

だというのに、それすら察知できなかったのは、ひとえにケイネスが危機に陥る間もなく、命を落としたことに他ならない。

相手の手際の良さに感嘆するほかない。一切の危機感を感じさせず、一撃の元に倒すというのは、並にできることではない。己がマスターよりも、相手のマスターの方が上だったのだろう。

そう考えて、それでもランサーは歯噛みし、顔を歪めた。

どちらにせよ、またも忠義を果たせなかったのだ。騎士として、仕える者として、終ぞ主の信頼を勝ち得ることも、その命を守ることさえもできなかったのだ。

「どうした、ランサー？」

そんなランサーの表情を見て、尋常ではないことを察したのだろう。隣にいたセイバーの問いかけに、ランサーは静かに答えた。

「……我が主が……命を落とされた」

「っ……それは」

セイバーもそれで察した。

ランサーの表情と言葉。彼のマスターがこの地に足を踏み入れ、そして誰の手によって命を落としたのか。全てを察したのだ。

自然と手に力がこもった。

どのような手段を取ったのか知らないが、マスターが、切嗣がケイ



ネスを屠ったとセイバーは直感で感じ取っていた。

そして主従の契約が切れた以上、サーヴァントを現世に留められるものはない。例え、魔力供給を行っていたのが妻のソラウであっても、その全てを彼女が行っているわけではないのだ。

最早、ランサーは早急にマスターを見つけ、再契約を果たさぬ限り、消滅するのが道理である。

それがサーヴァントというものだ。

しかしー。

「……黒いサーヴァント。クラスはわからぬゆえ、今はそう呼ばせてもらおう」

ランサーは、その場から離れるでもなく、アヴェンジャーに声をかける。

すぐにこの場を離れようとしていたアヴェンジャーも、その声に一度動きを止める。

「俺はこのまま消える。この聖杯戦争で俺が決めた主はただ一人。それは揺るがぬ事実だ。そしてその主を守りきれなかった今、俺が聖杯戦争に参加する意味も、その権利もない」

「……回りくどいですね。御託はいいんです。あなたも時間はないでしょう?」

「ふっ、そうだったな。率直に言おう。俺はこのまま消えるが、ただでは消えん。せめて敵の首級の一つも捧げずして消えるなど騎士の名折れだ。黒いサーヴァント、貴様の首は獲らせてもらおう」

二槍を構え、ランサーは静かに闘志を燃やす。

ランサーに新たなマスターを得るといふ選択肢は初めからなかったのだ。

今世で新たな主を得た時から、忠義を尽くすべき相手はケイネス一人。聖杯などには何ら興味はなかった。

そしてケイネスを失った今、ランサーは最後の力でもって、初戦の相手であったアヴェンジャーを討ち取る事こそが、唯一の忠義であった。

その騎士道溢れる精神に、セイバーは感嘆にも似た息を漏らす。

このセイバーには、ランサーの想いが痛いほどに伝わっていた。この英霊と武を競い合うことが出来ていたのなら。

聖杯を求め、英霊となったセイバーだが、それでも時代を超え、様々な時代で名を馳せた武人たちと死合う事は望むところでもある。自らもまた戦場で武勲を立て、名を馳せた英霊であるからだ。

しかし、それは叶わぬ願いだ。

ランサーの目的はあくまでアヴェンジャーにあり、その結末がどうであろうとセイバーと闘う余力などありはしない。

高潔なまでの騎士道精神。

セイバーはランサーから数歩離れ、その闘いを見守る事にした。

この気高いサーヴァントの最後の決闘を目に焼き付けるために。

しかし、アヴェンジャーはランサーの主張とその騎士道精神に表情を歪めていた。

何と美しいことか。何と気高い事か。

ランサーはアヴェンジャーが自らと最後の死闘を繰り広げると信じて疑わない。この状況下で、闘うメリットなど何一つないこの状況で。

ランサーはたった今。アヴェンジャーの懸念材料を自ら投げ捨てたのだ。マスターを失ったサーヴァントを危惧する理由は、サーヴァントを失ったマスターと新たに契約すること。その条件は満たされている。キャスターのマスター、雨生龍之介がそうだ。

それを無くすためにアヴェンジャーはマスターを失ったランサーに逃がす隙を与えず屠ろうと考えていた。

けれども、それをランサー自身が否定したのだ。新たな契約は結ばず、このまま消えゆくのみと。

そしてそれをランサーは必ず実行するだろう。反吐がでる思いだが、確信していた。

ならば、ランサーと相対する事に何の意味もない。それどころか無益に他者に情報を与えるだけだ。ランサーの自己満足のためにアヴェンジャーが何かをしてやる理由など何一つなかった。

故にー。

「はっ。獲れるものなら獲ってみなさい。愚かな騎士」

剣に這わせた黒い怨嗟の如き魔力がうねりをあげ、炎となってランサーを襲う。

「その程度っ！」

だが、ランサーの持つ長槍は魔を打ち払う槍。どれほどのものであろうと、魔力であるのなら、穂先に触れば途端に霧散する。

視界を覆い尽くす黒炎を振り払い、アヴェンジャーへと迫る。

……はずだった。

「っ……!？」

ランサーは我が目を疑った。  
なぜならば。

黒炎を払った先、そこには既にアヴェンジャーの姿はなかった。

「それで。そのランサーとセイバーを撒いて、帰ってきたわけか」

「ええ。騎士道精神なんて見ていて反吐がでるだけです。それに目の前でそんなものを見せられてはー」

踏み躪りたくなるじゃない。

滑稽だと笑うアヴェンジャーに「やれやれ」と頭を振る綺礼だが、責める気は毛頭なかった。

正直なところ、アヴェンジャーの判断は正しい。消えることが確定しているランサーと戦う道理などないし、ましてセイバーの前だ。対策を講じられるような機会を与えるなど馬鹿らしすぎる。

理由はどうあれ、アヴェンジャーは何も間違っていない。目的通り、キヤスターを倒した。当初の予定で言えば、アーチャーがキヤス

ターを倒すことだが、それはアーチャーの性格を考えると不可能に近い。時臣には『セイバーの情報収集に向かったのち、凶らずもキャスターと交戦。これを単独で撃破』と伝えた。横取りに近かったとはいえ、セイバーとランサー。どちらとも手を組んでいなかったことで、綺礼の手には報酬の追加令呪が宿ったが、それまでだった。

結果的には時臣に利益をもたらしている。サーヴァントは二騎脱落。令呪も綺礼が一面獲得し、他の陣営に報酬の令呪はないのだ。

父の璃正神父も、最初こそ驚きはしたが、綺礼の働きを大いに褒めた。

何事も予想外の出来事はつきものだ。どちらにせよ、遠坂が聖杯を手に入れられる体制が整いつつある。

令呪が四面にもなれば、少しばかり無茶をすることも出来る。綺礼もアヴェンジャーもだ。

本来の流れを大きく変化させた今、備えあれば憂いなし。といった具合。これからは誰にも先が見えないのだ。例え見えたとしても、それらは憶測の域を出ない。

「残るサーヴァントはセイバー、アーチャー、ライダー、バーサーカー、そしてお前の五騎。その内真名がわからないのはセイバーとバーサーカーか。狙うのはこの二騎だが……」

「バーサーカーはあまり相手にしたくありませんね。残念ながら、技量という一点においては、私はバーサーカーに敵わない。ええ、技量だけです」

技量は、という部分を念押しにいうアヴェンジャー。それ以外は負けていないというアピールなのだが、少なからず事実ではある。スベックで言えば全てにおいてアヴェンジャーが劣っているわけではない。思考力が極度に低下しているバーサーカーでは、いかな英霊といえど謀略には弱い。最も正気を失っていないバーサーカーなら話は別であったのだろうが、あのバーサーカーは、正気を失っており、次いでマスターも正気とは言い難い。正面から相対する必要はないと言えた。

とはいえ、アーチャーの宝具とバーサーカーの宝具の相性が極端に

悪いのも事実。早々に始末しておくに限るのだが、バーサーカーのマスターは時臣ただ一人を狙っているのが現状で、他陣営に仕掛けにけるほどの体力もなければ、技術もない。もう一度、すべてのサーヴァントが出揃うような事態にでもならない限り、本拠地に乗り込まなければならぬわけだが、あそこには蟲の翁がいる。こちらも相性自体は悪くないが、乗り込むには少々リスキーだ。

ならば、セイバーはどうか。

そう考えて頭を振る。セイバーは最優のクラス。そしてその呼び出された英霊もかなりのものだ。となると、こちらも対策を考えずに挑むのは無謀の極みだ。

「……では、一先ず様子見だな。私達が行動を起こさずとも、他の陣営が動きを見せるだろう」

「あの金ピカぼつちにでも、闘わせればいいじゃない」

金ピカぼつちとは酷い言われようだな、と思いつつも、強ち間違いではないあだ名に綺礼は内心ほくそ笑む。

アヴェンジャーがアーチャーを嫌っているのは大いにわかる。傲慢なその性格は、王としての振る舞いなのだろうが、他者からしてみれば、度し難い程に鬱陶しい。なまじあのアーチャーが優れすぎているだけに核心を突きまくる発言は、当事者にしてみれば殺意すら覚える。

「アーチャーか。アレは自ら敵を倒しに行くタイプではない。それに、未だセイバーとバーサーカーの詳細がわからない以上、我が師も迂闊には動かないだろう」

綺礼自身は、セイバーとバーサーカーの素性も宝具も知っているのだが、現時点においては、それだと信用させるだけのものを両者共に見せていない。

(もどかしいな。知っているというのに、知らないふりを通すというのは)

とはいえ、生き残るためには仕方のないことだ。

ここで大きなイレギュラーを起こした以上、これ以上は自分の死に繋がりがかねない。

一先ず様子見に回ることを時臣に伝え、束の間の休息を取ることとした。

まだ知らない。

最早物語は始まり<sup>ゼ</sup>ではないところに向かっているということに。

璃正神父を通じて、綺礼の活躍を耳にした時臣は、聖杯を手に入れるまで確実に一歩ずつ進んでいることを感じ、自然と笑みがこぼれていた。

自分が狙っていた令呪の獲得こそ叶わなかったが、キャスターに続き、ランサーの脱落。アーチャーが参加せずしてこの二騎の脱落は、令呪程でないにしろ、十分なものだった。まして、令呪は協力者の綺礼に渡っている。結果から見れば、時臣にとって有利に働いていると言えた。

このまま行けば、或いはこのまま他のサーヴァントとは戦わずにアヴェンジャーとアーチャーが残り、最後に互いのサーヴァントを自害させて終わるという呆気ない幕引きになるかもしれない。とはいえ、過程はさしたる問題ではないため、それでも構わない。

問題があるとすれば、やはりバーサーカーだろう。

マスターである間桐雁夜の素性を知っているため、警戒するに値しないと考えていたが、アヴェンジャーもアーチャーも、バーサーカーとの相性はあまり良くない。バーサーカーを足止めしつつ、マスターを屠るという方法を取らなければいけないわけだが、それも互いのサーヴァントが共に嫌悪する類のものであるために、実行に移しがたない。

(まあ、そこまで焦る必要はない。戦局は大きく動いた。様子見に徹していても、他の者達が動くだろう)

理想的なのは、潰し合い、疲弊しているところを叩くことだが、そういう点においてはギルガメッシュは壊滅的に不向きだ。これが他のサーヴァントであったなら、時臣の戦術に賛同していたかもしれないが、ギルガメッシュは己が認めた相手以外には慢心してしまう。彼が王たる所以であるのだが、それで戦う事すらしないとすると、お膳立てるのになかなか骨が折れる。

そういう意味では、やはり綺礼に任せると他なかった。

そうでなくとも、全幅の信頼を寄せている綺礼からの提案はしっかりと考慮している。つい先刻も、綺礼からの提言でキャスターのマスターがこのこと工房から出てきたところで『誅を下した』。本人は何をされたのか、気づきもしないうちに灰と化したことだろう。

それこそキャスターが先に討伐されていた為に追加令呪は綺礼に宿りはしたが、もう少し早ければ時臣の手には、マスターの権利を得た当初と同じように、三画の令呪が存在していたに違いない。

とはいえ、たればを深く考えてしまう程、時臣は追い詰められていない。

予想外の事態はつきものであるにもかかわらず、ここまで殆どが遠坂にとって有利に働いている。何も悲観することはないのだ。

「待ち侘びた……此度こそ、聖杯は我が遠坂に」

雲一つない夜空に輝く月を見て、時臣は笑みを浮かべるのだった。

## 贗作達

「うぐっ!？」

綺礼の目覚めは、突然腹部に走った衝撃によるものだった。

現在が聖杯戦争中であるが故に、その衝撃が走ると同時に布団から飛び退きつつ、臨戦態勢をとる……が、敷いていた布団の近くに立っていたのは他でもないアヴェンジャーだった。

例によつて、気まぐれで睡眠を妨害したのだろうかと考える綺礼。

アヴェンジャーはよく気まぐれに綺礼に嫌がらせをする。とはいっても、実に子どもじみたものなので、軽くスルーするか、お望み通りの反応を返すのだが、どうにもアヴェンジャーの様子がおかしい事に気がついた。

何時ものようなしたり顔でもなく、人を馬鹿にしたような様子もなく、真剣な表情でアヴェンジャーが綺礼を見ている。

何があつたのか、綺礼が問いかけるまでもなく、アヴェンジャーは口を開いた。

「話があるんだけど」

「話? 今後の動向については既にー」

「違うわよ。聖杯戦争は関係ない。あんたの事」

アヴェンジャーは首を横に振って、綺礼の言葉を否定した。

しかし、綺礼からしてみれば、ますますわからない。

今の今まで、興味がないとばかりに綺礼の事情を殆ど無視してきた彼女が、突如手のひらを返したように意見を変えた。おまけにその様子からして、只事ではないのは誰の目にも明らかだった。

一先ず臨戦態勢を崩し、正座する綺礼。

はたからみれば説教されているように見える光景だ。問い詰めているという点においてはあながち間違ではないが。

「それで? 話というのは?」

「アンタの過去を見たわ」

その一言で綺礼は驚きに目を見開いた。

サーヴァントは夢を見ない。だが、マスターと霊的なつながりがあ



るために、睡眠時には時折互いの記憶層に迷い込み、夢として過去を見ることがあるのだ。

綺礼はその事を完全に忘れていた。

そして、目の前にいる自身のサーヴァントは、文字通り綺礼が何者であるかを知ったのだ。

「胡散臭い上に何か考えてるとは思ってたけど……アンタ、全部知っててこの聖杯戦争に参加したってわけ？筋書きさえわかっていたら、余程のことがない限り負けるわけないものね」

アヴェンジャーは初めて非難するような言葉を綺礼に向けた。

ぐうの音も出ない。憑依した直後であるが故にロクな問答も出来ずに聖杯戦争参加を余儀なくされた綺礼だが、そんな事を言っても言い訳にはならない。

何故なら綺礼が『第四次聖杯戦争を知っている』から。

全てのサーヴァントを知り、マスターを知り、流れを知った。

手持ちのサーヴァントこそ違えど、同じ道順をたどれば、自然と綺礼は最後まで残る。そして最後だけ、結末だけを変えれば、綺礼は晴れて勝利者となれるのだ。

問題があるとすれば、それは中身のみ。

「言い訳はすまい。しかし、アヴェンジャー。一つ問う。どこまで見た？」

「どこまで？殆ど全部よ」

誤魔化しようのないところまで来ていた。

ほぼ全てを知られているとなると、おそらくはこの体が己のものである事さえも知られている。そして元の体を通して見てきた全ての物語も。

こればかりは完全に綺礼に非があつたと言える。

生き残るためとはいえ、せめて必要な記憶以外には何らかの形で記憶操作を行うべきだった。

であれば、仮にばれたとしても、誤魔化しようはまだあった。

しかし、これでは誤魔化す事も出来ないどころか、知られてはならないことまで知られてしまった。

最早打ち明けるほかない。それ以外の選択肢ともなれば、それはもう令呪を用いるしかないからだ。既に物語の流れが変わっている以上、出来うる限り、令呪以外の方法で解決するしかない。

「……出来れば、話したくはなかったのだがな。見てしまったものは仕方がない。正直に話そう」

座れ、とは言わなかったが、空気を察してか、アヴェンジャーは綺礼と向かい合わせに座った。

「私がここに来たのは数年前の話だ。特別な事をしたわけでもないし、狙ったわけでもない。目覚めた時には、私は言峰綺礼になっていた」

「じゃあ、やつぱりー」

「ああ、言峰綺礼とは似ても似つかぬ別人だ。中身だけだがな。本当の言峰綺礼はとても空虚な人間だ。自分の愉悦も知らぬ程にな」

「……」

「こちらに来てすぐは流石に取り乱した。目も当てられないほどにな。本来であれば、元に戻る方法を探すべきなのだろうが、そうも言ってはいらなかった。私の手にはこれが宿ってしまったからな」  
そう言つて、綺礼は令呪をアヴェンジャーに見せた。

令呪が宿つてしまった以上、聖杯戦争参加の是非を問われる。参加したくないというのなら早々に棄権する。早い段階であれば聖杯が他のマスターを用意してくれる。

しかし、綺礼にはその権利はなかった。

「私の父とアーチャーのマスターは古い知己だな。聖杯戦争に参加し、彼を支援しろと言われた。断ることも可能だったのだろうが、何せこちらに来て数日。別の事に手いっぱい気づけば、承諾したことにされていたよ」

「……その結果がこれつてわけ?」

「大雑把に言うとな」

アヴェンジャーの問いを綺礼は肯定する。

アヴェンジャーも、夢を通して見た過去の出来事と相違ない事が分かり、それ以上は何も言わなかった。流石に夢の中では綺礼の心情ま

でわからなかったものの、それでも見た光景と綺礼の話の照らし合わせしてみれば、答えはすぐに出た。

「私はうまく脱落したかった。師を勝利に導く事が何より最善の生存方法だと思っていた。だから、私はあの時、アサシンを召喚するつもりだったのだ」

「?ちよつと待ちなさい。それじゃあ、私をどうやって呼び出したわけ?」

「わからん。触媒は用意していなかった。お前はおろか、フランスのどの英霊にも所縁のある聖遺物はなかった。……夢で見なかったのか?」

「言つたでしょ。私が見たのは殆どよ」

確かにアヴェエンジャーはそう言っていた。殆ど全てを見た。

必ずしも、夢は全てを見せるわけではない。偶然にも、アヴェエンジャーは自身が召喚される光景を目の当たりにはしていなかったのだ。それはある意味当然といえば当然なのだが、何故自分が呼び出されたのか、肝心な部分を確認することが出来ないでいた。

しかし、綺礼の言葉が正しければ、アヴェエンジャーは意図して呼び出されたのではなく偶然。そして、サーヴァントを召喚するにあたり、綺礼がアサシンクラスを狙っていたのだとしたら、よほど強い繋がりが無い限り、アヴェエンジャーが呼び出されることはないのだ。

そして、それはつまり――。

「……アンタと私が似た者同士ってわけ?」

「……気に入らんのは分かるが睨むな。私も意図してお前を呼び出したわけではない」

「言われなくてもわかってるわよ」

綺礼が言わなくとも、アヴェエンジャーにはわかっている。

自分を意図して召喚する事など不可能であることは。誰よりも知っている。

それ故にアヴェエンジャーは顔を顰めた。

不快感からではなく、嫌悪感でもない。

自分の望みが叶っているという事に僅かでも胸を躍らせてしまった

事にだ。

聖杯にかける願いとは別の希望。

そもそも聖杯戦争に召喚される事さえも奇跡に等しい自分呼び出したマスター。

他ならない綺礼こそが、この世界においてアヴェンジャーを召喚せしめる唯一にして絶対の触媒だった。

考えてみれば、何の事はない。

召喚された当初からアヴェンジャーには一つの疑念があった。

負ける事が定められていると告げられたにもかかわらず、綺礼に付き合っていたのは、どうやって自分を呼び出したか、それを知りたかったからだ。

訊けばすぐにわかることではあった。けれどもそうしなかったのは、単にアヴェンジャーが捻くれているだけだからであるが。

そして結果としては至極単純であった。

触媒など存在しない。するはずがない。

在ったのは、互いに引き合う同一の存在。

例え何もかも似ていない者同士だとしても。

「しかし、だ。以前にも言ったが、私には聖杯を求める理由がない。あるのは他のマスターに狙われる危険だけ……いや、聖杯が降臨した後  
の惨劇ぐらいだな。それを回避するために私は時臣師を勝たせ、そしてキリのいいところでリタイアするつもりだ」

しかし、どうあっても、決してアヴェンジャーが願いを叶えられないのも事実だった。

確かに過去は見た。この言峰綺礼の全てを、夢という形でアヴェンジャーは知った。

だから、なおのことわかる。

綺礼が一体どれ程の想いで、おおよそ自傷行為にも思える鍛練を重ねて来たのかが。

全てを投げ出せたにもかかわらず、投げ出さなかった。

考えうる限りの言い訳を持って、己を納得させ、聖杯戦争に臨んだ綺礼の心情が。

ただ一つ、『生きたい』という至極単純な願望の元に、言峰綺礼という存在は成り立っていた。

「……もしも、私が今ここでアンタを殺すって言ったら？」

「それは困る。私は死なないためにこの聖杯戦争に参加した。いや、せざるを得なかったというべきか。もしも、私が聖杯戦争に参加しなかったというだけで、世界が滅んでしまったら。それはそれで事だろう？」

そんな事はある得ない、と一蹴したかったアヴェンジャーだが、もう見てしまっている。

確かにごく僅かであるが、その可能性が無いわけではない。おそらく、綺礼が参加しなくとも、勝者は同じになるだろう。

けれども、確実にとは言い切れなかった。あくまでもアヴェンジャーが見たのは綺礼の『知識』であり、それは未来を視たわけではないからだ。

イレギュラーが現れば、必ず結末は変わる。

それも綺礼は理解し、その上で自ら結末を決める道を選んだ。

思惑通り、遠坂に聖杯を取らせる道を。

その上で自らはキリのいいところで脱落し、教会の保護を受ける。もちろん、その後は何もしない。原作と違って、アヴェンジャーが敗退すれば、文字通り綺礼は敗北者なのだから。

「だが……そうだな。お前に殺されるなら、私……いや、俺は何も言わない。言う権利がない。寧ろ、最初に裏切らずにここまで付き合ってくれた事に感謝したいぐらいだ」

「……………はあ？自分が何言ってるのか、わかってるの？」

アヴェンジャーは綺礼の言葉を理解するのに、数秒の時間を要した。

それもそのはず。

綺礼の目的はあくまでも『生きる事』。

その為に敗北者となる事を前提として参加した聖杯戦争であるし、先程のアヴェンジャーの言葉にも困ると答えた。

だというのに、数分と待たずして、綺礼の口から出たのは全く正反

対の言葉。さしものアヴェンジャーもこれには驚きと戸惑いの入り混じった表情で綺礼を見た。

「意外か？これだけ手を尽くしているというのに、簡単に生への執着を手放す事が」

「意外っていうか、馬鹿にしてるとしか思えないわよ。あんなもの見せられた後じゃ尚更ね」

「あんなもの……か。それならば尚更わかるだろう」

「何がよ？」

「俺は確かに『この世界に殺されない為に』手を尽くした。俺の知る言峰綺礼を演じて、限りなく本人に近い立ち居振る舞いもしてきたつもりだ。多少は違えど、誰も俺を疑う事はしないだろう」

何故ならそうしてきたから。

初めは違和感があったかもしれない。

だが、成り代わった時期が時期であったために、綺礼には疑いの眼差しが向けられず、それどころか演技のレベルが高くなるにつれ、『気持ちの整理がついてきた』と父でさえ勘違いしていた。

「しかし、それだけだ。俺がしてきた事は言峰綺礼がしてきた事だ」

要領を得ない綺礼の言葉に苛立ちを募らせつつも、アヴェンジャーは思考を働かせる。

別に理解してやろうとしているわけではない。

わからなかったと思われるのが気に入らず、教えられるのが癪なのだ。

だからこそ、アヴェンジャーはガラにもなく、綺礼の言葉の意味を探った。

そして、答えはすぐに見つかった。

何故なら綺礼もまた――。

「アンタ、もしかして」

「流石にわかるか……いや、或いはそれこそがお前と私の『縁』なのかもしれないな」

そう言っつて綺礼は立ち上がった。

これ以上は話しても意味はない。互いの何を知ったとしても、目的

など変わりはしないのだから。

寧ろ、それ以上はこれからの行動を鈍らせかねない。

ゆえに正しい選択だ。

だからー。

「待ちなさい。話は終わってないわよ」

アヴェンジャーは引き止める。

正しい選択など、アヴェンジャーには最も縁遠いことだ。

綺礼が話をやめたいというのなら、否が応でもやめさせない。

それがアヴェンジャーの、ジャンヌ・ダルク・オルタの流儀だ。

どこに呼び出されようとも、いかなる状況であろうとも、それだけは変わらない。

何せ、相手がかの英雄王であつても、それは変わらなかつたのだから。

「聖杯に願いがないとかなんとか言つてたけど、そっちになくても私にはあるわ。いくら、私がアンタのサーヴァントで言う事を聞かざるを得ないとしても、私を呼び出したんだから、義務は果たしてもらわよ」

「義務……？」

義務とは一体なんなのか、皆目見当もつかない綺礼は首を傾げた。

「サーヴァントが聖杯を欲してるんだから、マスターのアンタが諦める事なんて許されないわ。生き残るために負ける？はっ！笑わせないでくれる？なんでそこで勝つて生き残るって選択肢がないわけ？」

思わず、綺礼は息を呑んだ。

アヴェンジャーの言葉は世迷言でも、冗談でもない。

綺礼を通して、多くの事を知った。

聖杯が正常でない事も。降臨させてしまえば何が起こるかも。

その上でアヴェンジャーは綺礼にこう言っているのだ。

『自分の為に勝て』と。

決して、アヴェンジャーから頼むような事はしない。そんな事は絶対に。

だから、自分から手伝わせる。

望みがないなら作らせる。負けたいというのなら意地でも勝たせる。

綺礼の望む敗北など絶対にさせない。

「馬鹿みたいに鍛えまくったんでしょ。それを腐らせるぐらいなら、全部私のために使いなさい。それでもって、聖杯を取るわよ。『この世全ての悪』だかなんだか知らないけど、私には関係ないわ」

綺礼をよそに話をどんどん進めていくアヴェンジャー。

それでもそのはず、決してアヴェンジャーは綺礼を叱咤激励したいわけではない。

ただ、綺礼のつまらない奸計を失敗させたいだけなのだ。他ならない綺礼自身の手で。

その時の綺礼が自らの行動に後悔する様を見る。あまつさえサーヴァントが自分の願いを叶えているとあれば、鉄面皮を思わせる厚い面の皮も剥がれるに違いない。

三年もの月日をかけてまで挑んだ聖杯戦争。

その目的を達成できないとなれば、さぞ悔しいことだろう。何せ、この世界に来てから行ったこと全てを無に帰すわけなのだから。悔しくないはずがない。

それでいい。今の今まで本性を見せなかった男が、ようやくその一端を見せたのだ。これぐらいの仕返しはして当然である。

「私に……勝つための闘いをしろというのか?」

「ええ。もちろん、選択権はないわよ。アンタに勝つ気がなくても、私が全員倒せば関係ないでしょ」

「私が令呪を使ったらどうする?」

「くだらない命令なんてはね除けるわ」

（ろくな対魔力もないのか……言ってくれるな。それにはね除けるか……）

本当に令呪を無効化したいのなら、腕を切り落とすまいし、言葉を発せないようにさせればいい。それが出来ないような柔なサーヴァントではないし、本気で勝ちにいくというのなら、可能性は十分にあるだろう。



もつとも、それは綺礼も手段を選ばなければの話であるが。

何故ならば、聖杯を取りに行くということはアーチャーを、英雄王ギルガメツシュを相手にすることなのだから。

「肝に銘じておきなさい。私を召喚したということはあなたもまた、地獄の業火に身を焦がす運命なのだから」

そう言い残してアヴェンジャーは霊体化する。

言いたいことを言って姿を消した己のサーヴァントに、自然と溜め息が零れた。

こちらの事情も気持ちも御構い無し。反論も意見の余地もない。

しかし、言っていることは的外れでもない。正鵠を射ているとまでは言い難いが、言っていることは何一つ間違えてはいないのだ。それが尚のことタチが悪い。

「生き残る為に勝つか。簡単ではないのだがな」

しかし、それを初めから度外視していた自分も滑稽だ。

例え、筋書き通りに敗退したとしても、自分が絶対に助かる保証など何処にもなく、そして自分の師を勝たせる為に動くということは、筋書きを無視するということに他ならないというのに。

(勝つも負けるも同じということか……ならば)

どちらも行く先は同じだというのなら、何も成さないより何かを成す方がよほどいいだろう。

己の足跡さえも未だ残せていない自分には。

「ー暇つぶしに立ち寄ってみれば、随分面白い話を聞かせるではないか」

「ッ……!?!」

「どうした、キレイ?道化を演じるというのであれば、最後まで貫くがいい。この程度で剥がれるようではまだまだ未熟だぞ?」

以前のように突如として現れたギルガメツシュに、綺礼は目を剥いた。

否、以前のようにとは言い難い。

何せ、ギルガメツシュは今しがた霊体化を解いたのではなく、さも初めからそこに居たと言わんばかりに姿を現したのだから。

「見どころのある雑種だとは思っていたが、ここまでとはな。我を以ってしても、貴様が、いや貴様の中身が異世界の人間であるなどは終ぞ至らなかつただろうよ。誇るがいい」

それだけではない。

ギルガメツシュの紡ぐ言葉の全てが物語っている。

先程の会話全てを、ギルガメツシュは聞いていたのだと。

ただの一人にも知られてはならないそれを、自身のサーヴァントはおろかよりにもよって師である時臣のサーヴァントに、あの英雄王に知られてしまった。一番知られてはいけない相手に。

「しかし、それだけに惜しい男よ。貴様の自己矛盾はあまりにも稚拙かつ単純過ぎる。あの贋作の小娘にさえわかってしまうほどにな。それに苦惱する様を見ても良いが……そうもいくまい。奴は贋作だが、聖女である事には変わりはない。どういう理屈で様変わりしているかは知らぬがな」

(やはりこの男……気づいているな)

ギルガメツシュとアヴェンジャーが顔を合わせたのは数回しかなく、会話自体はほぼしていないにも関わらず、アヴェンジャーがどのような英霊であるかを見抜いているギルガメツシュに綺礼はただ息を呑んだ。

「だが、時臣などよりはよほど面白みはある。どうだ？ いつそあの贋作を棄て、我の臣下となるというのは？」

「……何？」

「貴様の目的。生物の原初にして、全ての生命が持ち合わせる生存本能。つまりは死への絶対的な恐怖。それを回避する事であろう？ であるならば、我が臣下となるが良い。貴様が我を愉しませるといふのであれば、生きる価値はある」

あまりにも唐突なギルガメツシュの提案。

要約すると『アヴェンジャーを棄て、ギルガメツシュと再契約する』というものであった。

そして、ギルガメツシュが綺礼に価値を見出しているうちは生かすと言っているのだ。

とんでもない提案に目を丸くする綺礼。

提案自体は、綺礼の目的を達成するという点においては実に申し分なかった。

このままいけば、ギルガメツシユは少なくとも聖杯戦争が終わり、生きる意味を見失った綺礼の苦悩を見届けるまで生かす事だろう。

聖杯戦争を無事に終えるという一点において、ギルガメツシユとの契約は殆ど目的の達成だと言っても過言ではなかった。

臣下の礼を尽くしている時臣を、よもや自ら見捨てるというのは綺礼自身も想定外であったが、相手は英雄王ギルガメツシユ。凡人たる自分には理解が及ばないのは当然の事だった、

「我自らの誘いだ。本来ならば選択の余地などありはしないが、此度は貴様にくれてやろう」

そして、ギルガメツシユは選択権を綺礼に渡した。

無論、綺礼の為などではない。

時臣の口から、言峰綺礼と時臣の関係性などは聞いている。

その上で綺礼に選択を迫っている。

もちろん、猶予などはあるはずが無い。今、この瞬間に答えを出さなければならぬ。

だからこそ、ギルガメツシユは迫っているのだ。

「……この際、どのような方法で存在そのものを隠していたかは訊くまい。お前に知られてしまったのは自分の運がなかったと諦めよう。いや、そもそも聖杯戦争に参加せざるを得なくなってしまったこと自体、運がなかったのだろうか」

自嘲気味に綺礼は笑う。

思えば、重要な局面にあって、綺礼にとって都合の良い展開になった事などなかった。言峰綺礼に憑依したという不幸に始まり、そして今に至るまでだ。

「しかし、数奇なものだ。こうして言葉を交わしている英霊はアヴェエンジャーとお前だけだが、揃いも揃って『生き残りたいなら勝て』と来たものだ」

「無論だ。我と共にある以上、敗北などは赦さぬ。敗北するというこ

とは即ち死だ。遺憾だが、それはあの贗作めも同じであろう」

「簡単に言ってくれるな」

確かに過去に名を馳せた英雄達からしてみれば、聖杯戦争は自分達が駆け抜ける戦場の一つでしかないのだろう。死への恐怖など殆ど無いだろうし、そもそも自ら望んで参加している以上、誰一人として嫌がっている者はいないはずだ。

故に綺礼のような凡人の考えは理解できるはずも無いだろう。敗北と死は殆ど同じ意味であるがために。

「さあ、どうする？我と贗作、どちらを選ぶかは貴様の自由だ。どちらを選ぶうと我は貴様を咎めぬし、手を下すことは無い。もつとも、今宵は見逃すが、我の前に『敵として』姿を現わすのであればその限りでは無いがな」

決して強制力はなく、あくまでも自分で決めろ。

そんな意図を持ったギルガメツシュの言葉に、綺礼はふつとほくそ笑んだ。

「答えか……そんなものは既に決まっているぞ、英雄王」

「そのようだな。では、述べてみよ。貴様の答えを」

「私は……いや、俺はアヴェンジャー女と共に勝つ。彼女を召喚した時から、既に決まっていた事だ」

考えるまでもなかった。

どれほど英雄王ギルガメツシュが優れていたとしても、どれほどの敵が待ち構えていたとしても。

既に決められている運命なのだ。

アヴェンジャーを召喚したその時から、言峰綺礼の運命は彼女と共にあるのだと。

不器用ながらも彼女が言葉を紡ぎ、綺礼と共にある事を決意したように。

綺礼もまた、彼女とある事を決意した。

その言葉を聞いてなお、ギルガメツシュは口元を歪めた。

予想外というわけでも無い。否、それどころかギルガメツシュにはこの答えは予想通りであったのだろう。

しかし、どちらを選択したとしても、愉快だと言わんばかりの笑みをギルガメツシユは浮かべていた。

「あえて修羅の道を進むか。愚かな選択だが、それも悪くない。貴様とあの贗作の幕は我が手ずから――何？」

ギルガメツシユが一瞬眉を顰め、笑みを消す。

さしずめ師から帰ってきてほしいと懇願されたのだろうとタ力をくくっていた綺礼は、これを機会とばかりに帰らせようと試みる。

「退屈であるのはわかるが、我が師も先祖代々の悲願を達成せんと思気込んでおられるのだ。セイバーのマスターのこともある。可能な限り、我が師の側に――」

「断る……と言いたいだが、そもその必要は無いようだ。あの男、最後まで何の面白みも無い男であったな」

「?・どういふことだ?」

ギルガメツシユの言葉に首を傾げる綺礼。

それもそうだ。何故なら今のギルガメツシユの言葉では――。

「わからぬか? 我は今しがた『はぐれ』サーヴァントになったということだ。礼に対し報いる道理はないだろうよ」

――遠坂時臣の死を意味するものであったからだ。

我、復讐者となりて

「はっ……はっ……はっ……！」

静寂に包まれた住宅街を走り抜ける一人の男。  
言峰綺礼は、焦燥感に満ちた表情で脇目も振らず、遠坂邸に向かっていた。

サーヴァントも連れずにマスターが一人で出歩くななど愚行以外の何者でもない。

だが、人目を憚かる魔術師の儀式である聖杯戦争においては真昼間から戦闘を行うのは、魔術の秘匿を蔑ろにするものであり、特に今のような時間帯は、行動を起こすものなどいない。

であるからこそ、ギルガメッシュの言葉に綺礼は耳を疑った。

何故ならば、それは同盟相手であり、師でもある時臣の死を意味しているからだ。

あり得ない。あり得ない。あり得ない。

そんなことがあるはずがない。

本来、聖杯戦争は夜に行われるはずのものだ。

魔術師ですらない雨龍龍之介はともかく、他の陣営ならば必要最低限のルールを守ってしかるべきである。

だというのに、何故今、遠坂時臣が死ぬような状況に陥るのか。

ギルガメッシュの機嫌を損ね、殺されたのなら理由としては納得できる。

しかし、件のギルガメッシュは今現在も綺礼の家に滞在しているうえ、そもそもギルガメッシュでさえも、時臣の身に起こった異変に気づいたのだ。あの英雄王ギルガメッシュをして、既に殺した上で他人が殺したように見せかけるといふ下手な小芝居を打つはずがない。

であるならば、それは他の陣営による他殺に他ならない。

そして考えられる可能性は一つしかなかった。

人気のない遠坂邸に着いた綺礼は勢いよく門を開く。

結界は機能していない。時臣が聖杯戦争中であるにも関わらず、結界を解くなどという愚行は犯さない以上、既に結界を機能させられる

状態にないということは明白であった。

まず向かったのは、地下にある工房であった。

聖杯戦争が近づくにつれ、時臣はよく工房にこもっていた。全ては盤石を期す為というのものもあるのだろうが、魔術師である以上、工房が一番落ち着くのだろう。

しかし、工房に時臣の姿はない。

であるならば、と綺礼は時臣の書斎へと向かう。

あそこでは、時臣が綺礼を師事していた頃に話し合いながら語らいあつた場でもある。

時臣の癖は知っている。彼は気が良くなると、部屋にある大きな窓から外を見ながら紅茶を飲む癖がある。夜の時は共にワインを口にしたこともあつた。

部屋に近づくにつれ、鼓動が加速する。

僅かに開いた扉の前に来た時、最初に感じたのは臭いだった。

明らかな血の臭い。言峰綺礼となつてから、幾度となく嗅いだ血の臭いだ。

それにより、幾分冷静さを取り戻した綺礼は、警戒しつつ、扉を吹き飛ばす。

もしも、まだ実行犯が残っているのなら、何か細工をしている可能性があつたからだ。

凄まじい音と共に扉は吹き飛ぶが、別段仕掛けはなく、また部屋の中に人間の姿はなかつた。

あつたのは……人間だったもの。

「……申し訳ありません、我が師よ」

頭部を吹き飛ばされた亡骸。その服装から、何よりこの邸宅に今現在いるのが彼一人ということから、その亡骸が時臣のものであると理解するのにそう時間はかからなかつた。

亡骸付近にはガラスの破片が散つたままである事。自分以外に何者かが侵入した形跡がない事から、綺礼が時臣を殺害した犯人を特定するのに時間はかからなかつた。

(衛宮切嗣。やってくれたな……っ！)

拳を強く握りしめる。

あの男が、目的の為にはルール違反すれすれの行為さえも平然と行うことを綺礼はもつと理解しておくべきだった。

ランサーのマスターを葬るために行ったホテルの爆破解体が良い例だ。一步間違えればペナルティを与えられかねない大胆不敵な策略。

目的の為ならばどんな手段でも用いるのが衛宮切嗣だ。

ギルガメッシュを相手どるにセイバーではリスクが大きいと判断し、マスターを殺す事でその戦力低下ないし、消滅を狙ったのだ。

予想外であるとすれば、それはギルガメッシュの単独行動スキルが高く、マスター探しを急ぎ行う必要がない事だ。

無論、ギルガメッシュが自ら新たなマスターを探す事はないだろうが。

どちらにしても、時臣もよもや日も沈まぬ内に狙撃されるなどとは露ほどにも思っていなかっただろう。大事な場面でうっかりをしでかす遠坂の血統であるが、こればかりは例え己でも無防備に頭を吹き飛ばされていた可能性が高い。魔術師然とした時臣が予測できる道理など何処にもなかった。

ゆえに綺礼は己が許せなかった。

もしも、倉庫街の一件で切嗣を葬っていたのなら。

一言、時臣に忠告していたのなら。

こんな結果にはならなかっただろう。

たればを考えても意味はないと理解していても、綺礼はそう簡単に割り切れはしなかった。

演じていたとしても、時臣とは良い師弟関係を築いていた。

それだけではない。葵とも凜とも、間桐に養子として出されるまでは桜もそこにはいた。

遠坂との付き合いはそれほどまでに深いものだった。家族といっても遜色がないほどに。

「凜……すまない。私は君の父上を『運命』から救うことができなかつた」



懺悔する。

元より、この世界で彼は死ぬ運命だった。

この戦争は所詮、十年後の為の始まりでしかないのだ。

けれども、その運命に抗うつもりだった。

綺礼は死なず、そして時臣に聖杯が渡る。

例えば汚染されていたとしても、願望機としてではなく、根源へと至るために使用されていたのなら、原作での大火災は起きなかったかもしれない。

仮に起こるような事態になっても、それは必要事項でしかなかった。

殆ど計画通りに進行しているはずだった。

衛宮切嗣さえ排除できていたのなら。

『魔術師殺し』の通り名を改めて実感した。

確かにあれは魔術師の天敵だ。

このような方法で暗殺されたのも、時臣だけではないのだろう。

今まで何人も魔術師達がこうして思いもよらない方法で葬り去られたのだ。何も時臣に限ったことではない。

相手が悪かった。全てはその一言で片付いてしまうほどに。

だが、それで済ませられてしまうほど、綺礼達の関係は浅くはなかった。

誰かに誓ったわけではない。

ただ、出来ることなら死なせたくはなかった。

救えたはずの者達を見捨て、己が生に執着してもなお、遠坂時臣を死なせたくはなかった。

聖杯戦争を目前に控えた日。凜が口にした言葉。

『綺礼が味方だから、お父様は絶対勝てる』。

それは心の底から向けられていた信頼。或いは好意。

結果としてそれを踏み躪ってしまったという罪悪感が綺礼の胸中を占め、そして新たな決意を宿らせる。

もしも、どのような形であれ『修正力』が作用したとしても。

自分は『衛宮切嗣に勝つ』のだと。

「我が師、遠坂時臣。貴方は最高の師でありました。願わくば安らかなる眠りを。そして、これからの戦。どうか見守っていただければ幸いです」

胸の前で十字を切り、黙禱を捧げる。

「ちよつとー何勝手に飛び出してー」

霊体から実体へ。

姿を現したアヴェンジャーが言いかけて、言葉を飲んだ。

「……アヴェンジャーか。すまない。少し冷静さを欠いていた」

「……それ、あんたの師匠よね？変に気取ってるいけ好かないやつ」

「ああ。お前から見れば、彼の振る舞いはそう見えたかもしれないな」  
確かにアヴェンジャーからしてみれば、時臣の貴族然とした振る舞いは鼻についただろう。正直なところ、どんな振る舞いだろうが、難癖をつけるのは目に見えているが、アヴェンジャーにとってはそんな礼節の正しさはともかくとして、それを当然だと振る舞う時臣の事が好きではなかった。

もちろん、現在もそうだが、それ以上は何も言わなかった。

空気を讀んだわけではない。ただ、何が起きたかを悟ったからであり、綺礼の雰囲気明らかに変化したからだ。

どこか本心をつかませない飄々としたものではない。

冷静に務めている中にも感じる激情。

どのような結果であれ、どのような意志であれ。

綺礼はアヴェンジャーと同じように復讐の炎を宿しているということに。

もつとも、その復讐心が向けられているのは衛宮切嗣だけにではないのだが。

「アヴェンジャー。今までの非礼を詫びる。意図的でないにしても、呼びかけに応じてくれたお前を、俺は蔑ろにしていた」

「ええ、全くその通りね」

「許してくれとは言わない。全ては行動で示す。アヴェンジャー、俺と一緒に戦ってくれるか？」

アヴェンジャーに向き直る綺礼はそう言って、手を差し出した。

予想外の行動にアヴェンジャーは一瞬目を丸くした後、すぐに眉根を寄せて、手を叩こうとする。

「……まあいいわ。どちらにしろ、あんたも私も行き着く先は同じ場所よ。せいぜい足掻きなさい」

ぷいっとそっぽを向きつつも、アヴェンジャーの手は綺礼の手を取っていた。

この時をもって、ようやく綺礼とアヴェンジャーの意思は一つとなった。

時臣の死を璃正神父に伝えた時、当然というべきか、驚きを隠しきれなかった。

父の心中は察するに余りあり、聖杯の行方云々よりも親友の息子をこのような形で見送ることになってしまったという哀しみの方が強かっただろうし、聖杯の事についても完全に諦めている様子だった。

綺礼はそんな父に対して、決して『代わりに聖杯を獲る』とは宣言しなかった。

勝敗の問題ではなく、覚悟の問題であり、意思の問題だ。

綺礼にとって聖杯自体はどうでもいい。アヴェンジャーの願いを叶えるために必要なだけであり、勝ち取ったとしても、綺礼が根源に至ることは決してしないからだ。そして仮に時臣の蘇生を願おうとも、それが成就できないことを知っている。

故に綺礼は悲嘆に暮れる父に対して何も伝えることはしなかった。本人はともかく、綺礼にとっては父とは言い難い存在であるが、こ

の世界に来てから今綺礼がこうしていられるのは、璃正神父のお蔭である事は紛れも無い事実だった。

父ではないが恩人。

そんな人物に対し、綺礼は一体なんと言葉をかければいいのかかわからなかったのだ。

速やかにその場を去り、向かったのは郊外から離れた邸宅。

御三家の一つが拠点とする洋館だった。

まだ陽は落ちていないというのに、どこか不気味さを感じさせるのは魔術的な仕掛けがあるからだろう。

『入らないの?』

霊体化したアヴェンジャーが門の前で立ち止まった綺礼に問う。

「用があるとはいえ、今無断で入れば宣戦布告になりかねん」

魔術師の拠点に土足で入るということはつまるところそういうことだ。何をされたとしても文句は言えないどころか、非はこちらにある。

ゆえにー。

「視ているだろう? 間桐臓硯」

何もいらないであろう場所に言葉を投げた。

アヴェンジャーもその行動に疑問を感じることはない。

綺礼の言うように誰かの視線を感じ取っていたからだ。

「ー何用かの。雁夜めでなく、この老いぼれを名指しとは」

声が聞こえたのは背後からだ。

咄嗟に黒鍵を手にしたのは自己防衛によるものだが、そこまでだ。決して投げることはしない。

「趣味が悪いな。間桐の翁。正面から来た相手にそのような場所から声をかけるとは」

視線だけを横に動かすと数メートル先、日影に佇む矮軀が見えた。

「呵々ツ。いやなに。儂も代行者主のような相手はいささか分が悪い。ましてサーヴァントを連れているとなれば、正面から相対するのは自殺行為じゃ

「惚けたことをいう。そちらを殺しに来たのなら私は真つ先に家に火

をつけている」

もちろん、ただの火ではなくアヴェンジャーの炎でだ。

ただの火で焼いては本当に燃やしたいモノは燃えない。それこそ間桐臓硯がこの地を離れていない限り。

「して、重ねて問うことが何用かの。このような時間に正面から堂々と他のマスターが拠点とする地に訪れたともなると、よほどの理由があるのじやろう？」

深い皺の奥に落ち窪んだ眼差しが綺礼を射貫く。

この化け物を相手に一切の嘘や建前は通用しない。そんなことをすれば殺される、などということは現在の状況から鑑みてもまずあり得ないことだが、話が拗れるのは確かだ。

もつとも、今の綺礼は嘘も建前も使う必要がないのだが。

一つ息を吐き、綺礼は間桐臓硯を見据えて言い放った。

「単刀直入に言う。――間桐と同盟を結びたい」

綺礼からの提案に臓硯は驚きこそしたが、拒否をすることはなかった。

そもそも決定権はバーサーカーのマスターである間桐雁夜にあるのだから、臓硯が返事をするというのもおかしい話だが、綺礼としては臓硯に予め同盟の話を持ちかけることにも意味はある。

応接間に通された綺礼はソファアに腰を下ろして、雁夜の到着を待っていた。

半死半生。まさに生ける屍のような状態なのだから、家の中とはい

え到着には少ししかかるだろう。

『……ここすごく気持ち悪いんですけど』

「否定はしない。だが間桐の魔術特性を考えれば仕方あるまい」

『……それはさぞ陰気な魔術なんでしょうね』

間桐の魔術を知らないアヴェンジャーであるが的を射ている。

間桐邸の外観と臓硯を見れば、想像に難くないかもしれないが。

その時、扉がゆっくりと開かれる。

二人が視線を向ければ、そこには息を切らした男が扉にもたれかかりながら立っていた。

『……なにあれ』

「あれが間桐の魔術の一部、ということだろう。というか、お前は『視ている』はずだが？」

『言ったでしょ。殆ど全部って』

全てを知っているわけではない。と念を押すアヴェンジャーに綺礼は「そうか」とだけ返したのは部屋に入ってきた男が満身創痍と言っても遜色ない体を引きずって席に着いたからだ。

「こうして見ると随分辛そうだな。間桐雁夜」

直で見れば、その深刻さがよくわかる。

確かにこれを見ればなぜこの男が生きているのかという疑問を持つのが常人というものだろう。

「……あんたが、同盟を持ちかけてきた相手か……」

「言峰綺礼。知っての通り、遠坂時臣の弟子だった者だ」

遠坂時臣の名を出した途端、雁夜の目に激情の炎が灯る。

それは仕方がないことだ。雁夜が聖杯戦争に参加した理由に深く関わっているのだから。

そしてわざわざ出会い頭に爆弾を投下したのは、既に自分の素性を雁夜が知っているであろうこと。それを理由に話が途中で拗れることを防ぐためだ。

話し合いに入る前に問題は排除しておくべきだろう。

「遠坂時臣は我が師であり、また同盟相手だった」

「……その遠坂の弟子がこんな落伍者に何の用だ」

雁夜は隠しきれない怒りを孕んだ物言いをする。

雁夜にとって時臣は誅を下すべき相手。初恋の人から人並みの幸せを奪い、剩れ己が娘をこんな薄汚い魔術の家に送り込んだ憎き存在なのだ。

ならば、時臣との同盟相手であると公言した綺礼を快く思うはずなどない。

今にも掴み掛かってきそうな雁夜にも綺礼は顔色を変えることはない。予想できていた反応であり、雁夜には綺礼を殺すことなどできはしない。心構えではなく、単純な実力の問題だ。

「単刀直入に言おう。遠坂時臣は死んだ。ほんの二時間ほど前にな」  
「な……っ!？」

綺礼が言い放つと雁夜の表情は驚愕に包まれる。

雁夜自身、どういつた経緯で話を持ちかけてきたのかある程度想定はしていたが、これが一番確率の低い可能性だった。

遠坂時臣という人間を心底嫌っている雁夜だが、その実力は確かであると理解している。同じ御三家であり、自分とは違って正しく魔術を研磨してきた人間だ。弱いはずがない。

その時臣が死んだと聞かされたのだ。驚かないはずがなかった。

「ど、どういふ……ぐっ」

雁夜の興奮に反応するように刻印蟲が蠢き、雁夜が苦悶の声を上げる。

「落ち着きたまえ」

「っ……はあ……なんの冗談だ」

一呼吸置いて雁夜は訝しむように綺礼を見る。

時臣が死んだ、と言っているがこれは聖杯戦争で綺礼は時臣の同盟相手。もしかしたら騙し討ちをするために嘘をついているのではないかと疑っているのだ。

しかし、綺礼は首を横に振るだけだ。

「本当……なのか？」

「私の言葉で信じられないなら、監督役に問えばいい。残りのマスタ―の人数をな」

到底信じられる話ではないが、綺礼が嘘をついているようにも見えず、監督役に問えば嘘か真かわかるのだ。こんなわかりやすい嘘をつく利点が綺礼にはない。

(でも、もしこいつが言ってることが本当なら……)

この怒りは、憎しみは、どこに向かえばいいのか。

臓硯に対する恨みや憎しみとは別のものだ。同一視すべきものではない。

後悔させてやると誓った。あの母娘から幸せな時間を奪った時臣も臓硯も。

しかし、時臣は死んでいると告げられた。

戦うどころか、そもそも邂逅さえ果たしていないというのに。

自分のあずかり知らぬところで死んだと。

途端、言い知れぬ虚無感が雁夜を襲う。

聖杯戦争に参加していた理由の一つが消えたのだから無理もない。

桜を遠坂に帰し、彼女たちの幸せな時間を取り戻すために結果的に時臣殺すという矛盾を抱えていた雁夜。それが他の人間の手で果たされていたのだから。

また一步聖杯に近づいた。憎き遠坂時臣は死んだ。

喜ばしいことのはずなのに……雁夜の胸にあったのはただの虚無感のみ。

それはあの男に後悔と絶望を与えられなかったからか、それとも――

「脱力しているところ悪いのだが話を戻すぞ」

綺礼の声で雁夜は我に帰った。

「同盟の話だな。私は師を殺した者に復讐を果たしたい。その為に君の力が必要だ」

「俺の力……?」

「ああ、君のバーサーカー。真名はわからないが理性を失ってあの技量。さぞ名のある英霊と見た。彼ならセイバーとでも互角、或いはそれ以上に――」

「待ってくれ」



「何かね？」

「今、セイバーって言ったか？それはつまりー」

ここでセイバーの名前が出てくるということはもしかやと雁夜が問うと綺礼は頷いた。

「君の想像通りだ。我が師を殺したのはセイバーのマスター。衛宮切嗣だ」

その名前を聞いて、雁夜は微かに覚えていた臓硯の言葉を思い出す。

アインツベルンに雇われた傭兵。魔術師の絶対の天敵を。

「我が師は確かに一流の魔術師だった。しかし、衛宮切嗣が相手では致し方ない」

「それじゃ、俺やあんたでも、勝ち目は薄いんじゃないか？」

必ず時臣に報いを受けさせると誓った身であったが、雁夜とて時臣が三流魔術師などと思っていたわけではない。力量差など関係なく、しなければならぬ事だったただけだ。

そして、そんな時臣を有無を言わず殺害せしめた人間に魔術師としても半端者である自分が相手になるのか。答えは否である。雁夜では例えコンデンターを使わずとも切嗣は勝利を収めるだろう。

ことこの聖杯戦争において、切嗣はほぼ全ての陣営に対して相性が良い。理由は簡単。魔術師であるからだ。

そして魔術師でないキャスターのマスター、雨龍龍之介も所詮はただの殺人鬼であり、傭兵である切嗣に敵う道理はない。

ただ一人の例外を除いては。

「そこは任せてもらって構わない。我が師や君には敵わない敵だとしても、私ならば勝てる」

「それはどういう意味だ？」

「相性の問題だよ。私だけが、あの男に対して優位に立てる」

言峰綺礼であれば。

魔術師ではなく、まして一般人でもない。

代行者として数多の魔術師や人外を狩り続けてきた綺礼であるならば、衛宮切嗣との相性は誰よりも良いと言える。

「それらを踏まえてもう一度是非を問いたい」

「いいの？あれで」

「いい、とは？」

「同盟の話よ」

アヴェンジャーの問いに綺礼は合点がいったように頷く。

「あれで構わんよ。元より、彼と同盟を結べるかは五分と五分。寧ろその場で断られなかつただけで上々。保留にしてもらえただけでも収穫だろう」

結論から言って、間桐との同盟は失敗に終わった。

元々、時臣の弟子である綺礼に対する印象は決して良いものではないのだから、こうなること予想済みである。

返答は保留として間桐邸を後にした綺礼は、一旦自身の拠点に戻り、来たる決戦への準備を行っていた。

「ライダーのマスターには話を持ちかけないわけ？癩だけどあのバカも強いと思うんだけど」

「ああ。放っておいても、ライダーはセイバーと戦う」

「なんでわかるのよ」

「奴らは共に聖杯を求める者だが、それ以前に『王』だ。であれば、戦いは必定だろう」

さらに突き詰めれば、あの二人の王道は決して相容れることはない。相反するものだ。

綺礼が何もしなくても、彼らは戦う。

だから間桐に同盟を持ちかけた。

時臣亡き今、最も行動の読めなくなつた雁夜が不確定要素なのだ。

「間桐雁夜の意味がどちらに転んでも、私たちのするところは変わらない」

「ええ。我が憎悪の炎で焼き尽くす相手が増えるだけのこと。相手が何者であつてもそれは変わらない。アンタは自分の敵のことだけ考えてなさい」

「……そうだな。俺のサーヴァントに敗北などあり得ない」

今朝の一件から口調こそ変わらないものの、アヴェンジャーの態度が軟化したように思えるのはたして気のせいなのか。

女子高生のような精神構造をしている彼女の心情など推して測ることなど出来るわけもないのだが、仮に機嫌が良いというのであれば、綺礼は今しかないと思つた。

「そういうえば、一つだけお前に聞きたいことがある」

「?」なによ、急に改まって」

「アヴェンジャー。改めて聞きたい。お前は聖杯にかける願いはあるのだな?」

「当たり前よ。私が騎士サマみたいに戦うためとか、仕えるために召喚されたと思う?」

小馬鹿にしたような物言いだ、確かにそうだ。デイルムツドやギルガメッシュのような聖杯を求めているサーヴァントは決して多くない。大多数のサーヴァントが聖杯に託す願いを持ち、召喚に応じるのだ。

なればこそ、アヴェンジャーも願いを持っているのは至極当然のことであり、それは今朝アヴェンジャーも自ら口にしていたのだから、綺礼も覚えている。

「お前は願いを持っている。……で、あればマスターとして、共に戦場を駆ける者として、俺はお前に聞いておきたい。……お前の願いを」

アヴェンジャーも聖杯を求めている。それはわかつた。

しかし、肝心な部分。彼女が何故聖杯を求めるのか。万能の願望機

たる聖杯に縋らなければならぬほどの願いとはなんなのか。綺礼は知らない。

故に問う。問わねばならない。

「……」

アヴェンジャーが顔を顰める。

無理もない。それはアヴェンジャーにとって最も訊かれたくないことなのだから。

まして問いを投げてきた相手が最も言いたくない相手だ。

そしてそれを綺礼は知らない。知る由もない。

アヴェンジャーの反応を見た綺礼は瞑目する。

「聞くべきじゃなかったか……いや、言いたくないのであればそれでいい。例え、お前の願いがなんであつても共に戦うと決めた。それは変わらない。だから忘れてくれ」

「別にいいわよ。……そのうち、話すから」

「?…なにか……」

「なんでもないわよっ!」

アヴェンジャーは怒鳴った後、霊体化する。

僅かに漏れた黒い炎が綺礼の前髪を少し焦がした。

「熱っ……少し無神経すぎたか」

焦げた前髪を人差し指で弄りながら、自身の無神経さに溜息を吐いた。

## 反則の切り札

間桐へ同盟を持ちかけた翌日。

綺礼はある人物を探して、市街を奔走していた。

もちろん、街中での襲撃の可能性もなくはないが、いくらなんでもホテル爆破という反則すれすれの事をやっているアインツベルン……もとい衛宮切嗣が、人が多く、無関係の市民を巻き込むような行為はできないのも事実だった。

もし、そのような事をすれば仮に綺礼を殺害ないし、怪我を負わせたとして、監督役からなんらかの罰が与えられるのは目に見えている。ホテル爆破では被害者が出ていない故に咎められなかっただけで、こんな市街で射殺でも行おうものなら、キャスターの時と同様、残りの陣営に徒党を組んで狙われることになる上、その暗殺もサーヴァントと共に行動しているマスター相手には限りなく成功率が低い。ただデメリットしか生じないような事を、切嗣がするはずもなかった。

危険度が限りなく低いことをわかった上で、綺礼はとある人物を探して奔走している。

それは聖杯戦争の関係者であり、既に関係者でないものだ。

『つたく、なんで呼んでもない時は来るのに、探してもいないのよ』  
「……仕方あるまい。アレはああ言う生き物だ。お前が常に憎悪の炎を抱いているようにな」

さしものアヴェンジャーもそれを否定することはなかった。

アヴェンジャーのそれは『性』のようなものだ。アヴェンジャーという存在を成り立たせるモノだ。それを直せと言われても不可能であるし、直す気もない。

『……はあ。ホントになんであんな目立ちたがりを探さなきゃならないのかしら。っていうか、もう消えてるんじゃないの?』

「残念ながらその可能性はゼロだ。弓兵には単独行動スキルがついている。あの男が自ら消滅でも望まん限り、必ずこの冬木の街のどこかにいるはずだ」

『……それじゃあ何？街の中のどこかにいる人間を探すってこと？』  
心底呆れたようにアヴェンジャーが呟いた。  
無理もない話だ。

いくら行動範囲が冬木の中だとしても、たった一日で見つけ出すのは困難を極める。とてもではないが、すぐに見つけ出すのは些か無理があるだろう。

それは綺礼もわかっている。アーチャー弓兵——英雄王ギルガメッシュがいくらその辺にいる凡人とは別種の存在だとしても、その辺を金ピカの鎧で歩いているわけがない。私服で歩き回っていることだろう。

既に手は打ってある。

「父に頼んで聖堂協会の人間を走らせた。流石にあの男クラスのサーヴァントになると野放しにしておくわけにはいかない、或いは私が再契約を果たして聖杯を手に入れると言ったら、承諾してくれたよ」

『はっ……聖職者がよくもそんなに嘘を吐けるもんね』

「何を今更。聖職者なのは俺じゃない」

今更人を騙すことに何の躊躇いがあるのか。

そんな悠長に構えていたから、時臣は死んだ。死なせてしまった。

もしも、ここで同じように体裁など気にしていたのなら、間違いなく次に死ぬのは自分だろう。二度の死線を潜り抜け、師の死を目撃して、綺礼はそう確信していた。

最早手段など選んでいる場合などではない。使えるものは何でも使うべきなのだ。

「……だ」

綺礼の視線の先にあるのは一つのビル……その屋上だった。

「どういうわけか、英雄王ギルガメッシュはこのビルの屋上に消えたらしい」

『あの金ピカが？』

解せない、とアヴェンジャーが疑問の声を上げる。

それは綺礼とて同じだ。おそらくほんの気まぐれで立ち寄ったか、はたまたどこか目的地に行く際ここを経由した可能性が高い。

しかし、情報として一番新しいのはそれである以上、立ち寄らない

わけにもいかない。会えればそれでよし。会えなければ新しい情報を待ちつつ、探し回るだけだ。

他の陣営にとつては脱落したサーヴァントであっても、綺礼にとつては決して捨て置けるはずのない存在であるが故に。

「……やはりいかないか」

案の定というか、やはりというべきか、ギルガメツシュの姿はそこになかった。

神出鬼没とも言えるあの英雄に自ら会いに行くというのも土台無理な話だが、少ない可能性にかけた綺礼としては落胆の色が隠せないでいた。

消滅してはいない。

高い単独行動スキルを持つギルガメツシュが戦闘を行なっていない以上、聖杯戦争が終結する前に消滅することはあり得ず、また冬木の地から離れることもできない。

冬木にいることは確かなのだ。しかし、それまでだ。

情報らしい情報がない。会いたくないと思っている時に限ってふらりとやってくる。それが英雄王ギルガメツシュに対する綺礼の印象だった。

実際、自分の過去がバレた時は一番来ないでほしいタイミングで姿を現した。そのせいで時臣は射殺されたとも取れるが、ギルガメツシュに言わせればそれは時臣が間抜けだっただけ、ということになるのだろう。相手が反則すれすれの行為を平然とやってのける相手だとわかっていながら、対策を取っていない時臣は確かに間が抜けてい

るのかもしれないが、それこそギルガメツシュが遠阪邸にいれば何の問題もない。責任の多くは綺礼にあるが、一端はギルガメツシュにもある。

……などと打ち明けた日こそ、綺礼の命日となるが。

アヴェンジャーを屋上に続く階段で待たせたのは杞憂だったか、と思いつつ、綺礼は踵を返す。

（願わくば今日中に見つかる事を祈るばかりだが……この調子では――）

「――我を覗き見る不逞の輩がいると思えば、よもや貴様の差し金だったとはな」

「っ!？」

誰もいない、と確認したはずの背にかけられた言葉に綺礼は勢いよく振り返る。

だが、そこには確かにいた。

黄金の甲冑を纏わずとも、溢れんばかりの威圧感を放つ偉大なる王が。

「よもやお前のような王の中の王が、私たちの目を欺くために姿を隠すとはな」

「言葉は選べよ、綺礼。我は寛大だが、無礼を全て許す訳ではない」  
「……そうしよう」

ギルガメツシュの面持ちこそ愉快気であるが、僅かに滲ませる怒気がそれを口先だけのものではないと認識させる。

「我は隠れていたわけではない。我の事を覗き見る輩がいたのは初めから気づいていた。その不敬は万死に値する……が、我もちようど暇を持って余していたな。少し遊んでやろうと思っただまでのことよ」

布で編まれた兜のようなものがギルガメツシュの手の中にあつた。それを見て、ギルガメツシュが突然現れたからくり綺礼は気づいた。

「ハデスの隠れ兜……成る程。それを使っていたわけか」

「他の雑種であれば素直に褒めるところだが……それは『知識』か？それとも『記憶』か？」



「後者だ」

即答した。

この男相手に下手な嘘は意味を成さない。

綺礼が憑依した別人であることをギルガメツシユの慧眼を以ってしても見抜けなかったのは、ギルガメツシユとの接触がほとんど無かったこと、そもそも他世界からの憑依転生という奇蹟が起こりうるなどあり得ない現象であったからだ。

それが露呈した今、綺礼がギルガメツシユを欺ける筈もない。

「つくづく愉快な存在だな。貴様がマスターであれば、少しは面白みがあったやもしれんな」

心底退屈そうにギルガメツシユは溜息を吐いた。

想いを馳せる……のとはまた違うのだろう。

ギルガメツシユは殆ど聖杯戦争から脱落した身である。マスターである時臣を失い、当のギルガメツシユ本人は新しいマスターを探すが欠片ほどもない。元より聖杯にかける願いはなく、自身の財を勝手に奪い合う輩を潰すための参加だったのだから、そこまでする意味もない。

「いや、違うな。此度の現界。マスターはくだらぬ男だったが、現世はなかなか愉しめた。多少名残惜しくはあるが、これも一つの結末だろうよ」

何より、ギルガメツシユはこのまま聖杯戦争に関わらず、消滅したとしても是とするだろう。それもまたギルガメツシユにとって一つの愉しみ方であるのだから。

「名残惜しい……か。アーチャー。いや、英雄王ギルガメツシユ。お前に一つ問いたい」

「我に問いを投げるか？よい、申してみよ」

「お前は聖杯に興味はない。あくまでも己が財を守るだけ……そうだな？」

「無論だ。この世遍く全ての財は我の物。それを奪おうとする輩は誰であれ、罪人であろうよ」

「ならばお前が聖杯に拘る理由はない……それでも聖杯戦争に復帰す

る意思はあるか？」

「何……う？」

ギルガメツシュが眉根を寄せる。

何故今更そんなことを気にするのか。

やる気の有無でいえば今しがた答えたように無いに等しい。もちろん、喧嘩を売られたのであればその限りで無いにしても、ギルガメツシュが能動的に参加する事は決して無い。

そうなれば必然、ギルガメツシュの復帰意思は無いということになる。それに気づかないわけがなく、復帰するつもりがないのであれば、警戒する理由はない。

「綺礼……貴様、何を考えている？」

「そうだな。私が勝つためのシナリオ……と言ったところか」

それを聞いた瞬間、ギルガメツシュが哄笑する。

綺礼が勝つためのシナリオ。その為にギルガメツシュを探していた。

そうなれば当然聖杯戦争参加者の誰しもが考えることだろう。

「ハハハハハハハハハッ！そうか！よもやそこまでなりふり構わんとはな！」

綺礼がギルガメツシュに会いに来た目的はただ一つ。

『ギルガメツシュとの契約』なのだ。

「元よりこれは戦争だ。体裁など気にしている場合でもない」

「然り。雑種である事に変わりはないが、そちらの方が幾分見所もあるうよ」

気づかぬ矛盾に苛まれ続けているところにも愉しみはある。

そして綺礼を駆り立てるものもまた、ギルガメツシュにとって退屈凌ぎには十分なものだ。

「それで？貴様のサーヴァント……あの贋作めはどうする？我の誘いを断り、奴を選んだのは綺礼。貴様のはずだが？」

一度綺礼はギルガメツシュの提案であるサーヴァントの鞍替えを断っている。

それ自体、ギルガメツシュに不敬を働いたと取られてもおかしくは

ないのだが、さして気にした様子は見せない。それよりも綺礼が一体どのような心境の変化でもってアヴェンジャーを切り捨てたのか、気になるのはその一点だった。

「無論、アヴェンジャーは嫌がったがな。これが最善の手段だと言いつ聞かせたら、渋々頷いてくれたよ」

散々罵倒された挙句、色々なものを買わされた上、それでもなお罵倒されたのは余談である。

「貴様の選択は正しいぞ、綺礼。貴様が我の臣下となり、我を愉しませる限りはその生命を保証しよう」

慢心していたとしても、ギルガメッシュは間違いなくサーヴァントの中で最強の一角。そしてこの聖杯戦争にあの赤い弓兵は存在しない以上、相性で敗北することもまずない。

時臣が勝利を確信したのも、当然の事なのだ。これで少なくともこの聖杯戦争中は死ぬことはないだろう。衛宮切嗣の危険性を正しく認識している綺礼であれば、暗殺される可能性も極めて低いと言える。

だがー。

「いいや。私の事は考えなくてもいい」

頭を横に振った綺礼にギルガメッシュの顔から笑みが消え、眉根を寄せる。

それは怒りによるものではなく、素朴な疑問だった。

綺礼と言葉を交わした数こそ少ないものの、その願いは『生きたい』という生物の本能によるものであることをギルガメッシュは見抜いていた。

実際、誘いを断った時もアヴェンジャーと共に勝利するという過程こそ変わったものの、やはり生き残るという目的は変わらなかった。

そして自身と再契約を果たそうとしているのも、その目的を果たすためであるとギルガメッシュは思っていた。

「ギルガメッシュ。お前はお前の認めた相手とだけ戦ってくれればいい。それ以外の相手はアヴェンジャーがするだろう」

「あの贗作めが、だと？」

「ああ」

そこでギルガメツシュは気づいた。

綺礼が自身に会いに来た本当の目的に。

通常であれば考えられない手段。

サーヴァントの同時使役をしようとしていることに。

ギルガメツシュがアヴェンジャーは切り捨てられたものだと思っていたのは、ギルガメツシュと話し合うのにアヴェンジャーが近くにはそれ以前の問題になり兼ねないと離れた場所で霊体化して待機しているからに他ならない。

例えどのような手段を使おうとも、綺礼がアヴェンジャーを切り捨てることだけは絶対にあり得ない。

ギルガメツシュはその可能性を全く考えていなかった。

そして綺礼の真意に気づくと共にギルガメツシュは先程よりも一層深い笑みを浮かべた。

「サーヴァントの同時契約。より勝利を確実なものとするにはこれが一番良いと判断した」

「確かにサーヴァントと二体契約することが出来れば、他より優位に立てよう。もつとも、あの贗作などいなくとも我一人で十分だがな」

ギルガメツシュ一人で複数のサーヴァントと戦うことは可能だ。慢心を捨てれば、アヴェンジャーを含めた今残っているサーヴァント全てと戦い、勝利することさえできるだろう。

しかしー。

「だが、それは正しくサーヴァントに魔力を供給することが叶えばの話だろうか？でなければ、時臣も貴様からサーヴァントを奪っていたはずだ」

ギルガメツシュの言い分は正しかった。

サーヴァントを同時使役することがなんのデメリットもなく戦力増強に繋がっていれば、時臣は綺礼にサーヴァントだけ召喚させて、その権利を譲るように要求したはずだ。

それをしなかったのはサーヴァントを同時に使役することで必要とされる魔力も二体分になり、サーヴァントが万全の状態で戦えなく

なるからだ。

そうなれば戦力増強どころか、弱体化したサーヴァントが二体。デメリットの方が大きい。

ましてサーヴァントが増えても令呪が増えるわけではない。一体だけでも使い所を見極めなければならぬというのに二体に増えれば一角使うことさえ殊更慎重にならなければならぬ。

よほど燃費の良いサーヴァントかつ魂喰いか自己で魔力を補給できる手段を持つサーヴァント以外は戦力が低下するだけだ。

更にいうなら、サーヴァントがそれに同意しない。

何故ならそれで聖杯を勝ち取っても願いを叶えられるサーヴァントは一組のみ。どちらかが脱落しなければならぬのだ。

それならば、初めから同時使役になど賛同しない。ランサーのような例外なら話はまた変わるが、やはり勝率を考えればそんな事はしないだろう。

そう、普通のマスターとサーヴァントなら。

「その通りだ、英雄王。私では一人のサーヴァントに魔力を供給するので精一杯だ。二体目のサーヴァントに魔力供給をしたところで十分な力を発揮する事はできない」

「ではどうする？ 我に供物でも差し出すか？」

「そこまで外道に落ちるつもりはない。……まして、それよりも効率的かつ絶対的な手段を私は知っている」

或いは最後の手段として、ギルガメッシュに供物<sup>魂</sup>を捧<sup>喰</sup>げるをさせることもあるかもしれない。そうなった時は真の外道に落ちることになるだろう。どれだけの言い訳をしても無辜の市民を犠牲にしたのだから。

それよりも良い手段があるうちはその選択だけはしない。

もつとも、こちらもあり人に褒められるような手段とは言い難いが、魂喰いをさせるよりは幾らかマシだ。

犠牲者は誰も出ない。出るとすればー。

「このような時間に……一体どのような用ですか？」

夜が訪れ、日付も変わろうかという聖杯戦争に相応しい時間に教会に姿を見せた綺礼に、璃正神父は厳かな雰囲気でも対した。

これが聖杯戦争中でないか、或いは時臣が存命中なら快くも受け入れられたが、どちらにも当てはまらない現状……特に約半数が脱落した今、聖杯戦争は佳境に突入したといっても過言ではない。

そんな状況で教会に訪れているところを誰かに見られようものなら、聖杯戦争の規定に反し、監督役と内通しているといういちやもんをつけられてもおかしくない。これも時臣なら言い訳も利いたのだが、一人息子の綺礼が相手であれば、尚更。

幸いにも、今日自分に監視の目が向けられないことを知っている綺礼にはその心配も無かったが。

「最後の決戦を前に大事な話を、と思ひまして」

「……よろしいでしょう。では、こちらへ」

いつになく真剣な表情に、璃正神父はすぐに追いつ返す事はせず、監督役として振る舞いながらも、それが父と息子としての、家族としての話であると察して奥の司祭室へ通した。

向かい合わせになるようにソファアに腰掛けた二人。

先に口を開いたのはやはりというべきか、綺礼だった。

「申し訳ありません。我が父よ、このような時間に」

「その通りだ。まだ脱落していないマスターが、私事で教会に来るものではない」

「返す言葉もありません」

監督役として正しい言葉だ。

如何なる私事があつたとしても、今はマスターと監督役。聖杯戦争に関係すること以外で教会を訪れるべきではない。それ以上に大事なことがあるなら、即刻聖杯戦争から辞退すべきだろう。

それが息子であるなら殊更辞退することを勧めるところだ。

確かに璃正神父は亡き時臣の遺志を継ぐと言つた綺礼に明らかにルール違反となる手助けこそしたが、元より聖杯を勝ち取り、根源へ至らんとしているのは遠坂であり、彼等が至つたところで何の意味も持たない。

もちろん、時臣の蘇生を願うなら大いに賛成するところだが、それでも綺礼の命よりも重要視すべきか否かと問われれば否である。綺礼が辞退すると言つても、決して咎める事はない。

しかし、綺礼の言葉に聖杯戦争を諦める意思是感じられなかった。

「まず、ギルガメッシュとの交渉は無事成功しました。今は選定に参加している次第です」

「うむ……万事抜きなく進んでいるようだな」

「はい。これで聖杯戦争を決するための準備が概ね整いました。後は……もしもの時の話です」

綺礼の指す『もしも』とは即ち『自身が敗退し、無事生還できなかった場合』つまり『死』という結末に他ならない。

現時点において、いずれの陣営もマスターは死亡している。敗北は死を意味するということだ。そう考えてもなんらおかしくない。

「とはいえ、私からの遺言は一つです。遠坂の娘……凛の事をお願いします」

「時臣くんのご息女か……そういえば、随分気に入られているようだったな」

璃正神父が凛と会つたのは数える程だ。

その中で印象に残っているのは楽しそうに話す姿。

話の内容こそ魔術に関するものだが、その表情は年相応の少女のもので、凛が綺礼に懐いているのはすぐにわかつた。

正直なところ、人付き合いが得意とは言い難い綺礼が遠坂とあそこ

まで親交を深めるとは璃正神父も思っていなかったが、遠坂と言峰の付き合いは聖杯戦争が終わった後も続くことを鑑みれば良い事だと思っていた。

「時臣師を亡くした以上、私が師に代わり、兄弟子として凜の面倒を見るべきでしょう。凜は強い子ですが、それでもまだ十にもならない少女。魔術師としての、遠坂の人間としての責務を負わせるのはあまりに不憫です」

時臣が死んだ以上、遠坂の当主は凜になる。

そうなれば今まで時臣がしてきた事を当主である凜がしなくてはならない。

いくら凜が聡明であってもまだ七歳の少女。出来ることなど殆どないだろう。

それを代わりにする人間がいる。正史でも一応綺礼が後見人となり、色々やっていた(良い結果とは言っていない)ことを考慮すれば、後見人になる人間は必要だろう。いくら遠坂葵が正常なままだとしても、彼女はあくまで『魔術師の妻』でしかなく、凜を支えるにはあまりに脆い。

であるならば、ある程度事情を知り、時臣を知り、善意で遠坂を支援する人間となれば、璃正神父が適任だろうし、そもそも現在の綺礼では頼れる人物が彼しかない。

璃正神父としても、頼まれずとも時臣亡き遠坂を支えるつもりではあったため、すぐに頷く。

「話はそれだけか？」

「いえ、もう一つお願いしたいことが」  
そう言って綺礼は懐から一つ宝石を取り出し、璃正神父の後方に投げ

「ーその令呪を貰い受けたいのです」

綺礼の言葉に驚く間も無く、璃正神父の頭部に衝撃が走り、視界がぐらりと傾く。

油断しきった状態から後頭部を襲った一撃は、璃正神父の意識を奪うには十分すぎる威力だった。



力なく床に倒れこみ、薄れゆく意識。

足音と共に何者かが綺礼の隣に立つ。それが今しがた自身に不意打ちを見舞った下手人であり、綺礼がその下手人と共に自身を謀ったという結論に至るのは、朦朧とした意識でも容易なことだった。

何のつもりだ、とそう問いかける璃正神父に綺礼は答える。

『全ての決着をつけるために』

「監督役……それも実の父親を背後から襲わせるなんて……っていつでも、中身は別人だったわね。あんた」

「ああ」

血縁的には父にあたるが、親としての情はない。

だが、恩人である人物を背後から襲わせる事に対し、何も感じないわけではない。

「責任は取るさ。全てが終わった後にな」

「……別にそれはどうでもいいわよ。それよりあんた令呪を奪い取るんじゃないの？ さっさと終わらせるためにこんな手の込んだ事したんでしょ」

アヴェンジャーは手に持った宝石を見て、辟易したように呟く。

色々な創作物である、所謂『首トン』だが、実際そんな事をやって気絶する確率はかなり低い。もちろん、サーヴァントの力であれば不可能ではないが、そうなれば今度は気絶させられた璃正神父に何らかの後遺症が残りがねない。

だから、綺礼は魔術に頼った。

首の根本は神経が集中している。そこに直接魔術を行使すれば効果は十分に望める。どちらかといえばこちらの方が成功率が高く、リ

スクは低い。そのために、わざわざ遠坂邸にあった宝石を数個くすねてきたのだ。

もちろん、しっかりと治癒魔術を施すつもりだ。

「そうだな。手早く済ませよう。父がいつまで気を失っているかはわからないからな」

綺礼は瞑目し、深く息を吐いた。

「――神は御霊なり。故に神を崇める者は、魂と真理をもって拝むべし――」

ヨハネ福音書4：24。

言峰綺礼となる上でそれを覚えるのは必要なことだった。

何年もの間、模範的な聖職者として生きてきた言峰綺礼が、一節すらも暗唱できないわけがない。

ごく短期間でほぼ全てを暗記するのは骨が折れたのと言うまでもなかったが。

綺礼が突然聖なる文言を口にしたことでアヴェンジャーは眉根を寄せたが、その声に呼応する形で璃正神父の右腕がカソツクの右袖の下から淡く光を放つ。

そしてそれと同時に綺礼の腕にはひりつくような鋭い痛みが走り、ひとつ、またひとつと令呪が転写されていく。

これこそ、監督役がなんらかの原因で続行が不能となった際、新たな監督役に引き継ぐための秘密の聖言。聖言によって保護することで魔術で抜き取る事を不可能とする術だった。

本来ならそれを知るものは監督役のみ……となっているが、この聖杯戦争の全てを知る綺礼だけは例外だった。

全ての令呪が転写されたのち、綺礼は璃正神父に治癒魔術を施す。

とはいえ、外傷と呼べるものは殆どなく、魔術によるダメージも同様であつたため、十数秒の治療を施したのち、更に魔術を行使する。

これだけ無防備であれば、魔術師でない人間に魔術を掛けるのは綺礼でも容易なことだ。

この戦いが終わるまで決して目を覚まさないように。

(父よ……いえ、璃正さん。貴方の期待を裏切つて申し訳ない。俺に

はこんなやり方しかできないし、俺が齎す結果も万人に非難されることだと思う。だから、俺の事はもう『息子』だとは思わないで下さい。言峰<sup>あ</sup>綺礼<sup>の</sup>も言峰<sup>俺</sup>綺礼<sup>も</sup>ー）

どうしようもない外道なのだから。

## 求める答え

(……遅いな。あの神父)

時刻は午前二時を示し、寒風が死に体に等しい雁夜の肌に突き刺さる。

雁夜でなくとも、この季節のこの時間に外を出歩くというのはいささか厳しいものがある。まして、刻印虫によって肉体を蝕まれ、常に死にかかっているといっても過言でない雁夜に今の状況はかなり辛い。

すぐにでも暖を取りたいところだが、そう出来ない理由があった。

昨日、雁夜は言峰綺礼に同盟を持ちかけられた。

初めは時臣の弟子である人間の持ちかける話に聞く耳持たないという姿勢であったのだが、件の時臣が既に死没しているということでは状況が変わった。

嘘か本当かは確認した。綺礼が嘘をついている可能性を考慮して、あえて受諾も破棄もせず保留にしたのだ。そして嘘か真か、答えはすぐにわかった。

結界が機能を果たしていない遠坂邸の書斎と思われる場所の床や壁に飛び散っていた血痕。実行犯がああ魔術師殺しとなれば時臣がどのような葬られたか想像に難くなかった。

自らの死を偽装して、という線も無くはなかった。

だが、時臣の事は憎いが性格も十分把握している。己が死を偽装し、暗闇で暗躍するような人間でない。それこそ他のマスターを暗殺しようなどと画策はせず、正面から討ち果たそうとする人間である。

故に信じるほかなかった。怨敵の死を。

時臣が死に、最強のサーヴァントであろうギルガメッシュが脱落したことで残すところ英霊はセイバー、ライダー、アヴェンジャー、バーサーカーの四騎。これを見て可能性が上がったと判断したか、臓硯は桜の純潔を食らい魔力を蓄えた秘蔵の刻印蟲を雁夜に与え、間桐邸から姿を消した。勝算が出来たとしてもあくまで雁夜の戦いであり、勝

てば僥倖程度にしか考えていない以上援護は期待するだけ無駄だ。間桐邸から姿を消したのも雁夜が聖杯戦争を勝ち残ると考えていないからだ。

とはいえ、元より臓硯の援護など必要としていない。己が力で聖杯を勝ち取るというスタンスであるのだから、寧ろ臓硯の顔を見ずに済むと清々しているところだ。

強いていうなら今の間桐邸を守る人間はおらず、魔術師殺しのような輩が侵入した時桜の身が危険に晒される可能性がある。

自分が死に体であることも踏まえて、無駄な行動は極力避けたいというのが雁夜の心境だ。

綺礼と約束はした。ここに来たのも同盟を結ぶ為だ。勝ちの目が薄いのは始まった時から変わらない。少しでも確率が上がるならという思いでここに来た。ただ、指定した時間が過ぎて少し経っている。あちらが無下にするというのであれば早々に切り上げて何か動きがあるまで間桐邸で様子見に徹するべきだろう。

「……そうだ。それにあいつは時臣の弟子なんだ。それならあいつは――」

「――すまない。随分待たせてしまった」

今まさにその場を離れようとした時、約束の人物が姿を現した。

もしも来れば悪態の一つでも吐いてやるつもりだった雁夜だったが、彼に抱えられている少女を見て、驚愕する。

「さ、桜ちゃんっ!?!」

綺礼が抱えていたのは間桐の少女。否、厳密には間桐の人間になった少女というべき存在。

雁夜がこの聖杯戦争に参加する発端となった少女を、綺礼が抱えていたのだから驚くのも無理はない。

「なんであんたが……っ、まさか!」

「ああ。君がいると事態がややこしくなるのでな。君がここに着いたのを確認したのち、間桐邸を焼き払わせてもらった」

聖杯戦争中に他のマスターが拠点を襲撃し、破壊するのはおかしなことではない。ケイネスがその良い例であろうが、厳密に言えばあの

時と今回は目的が違う。マスターを拠点ごと吹き飛ばして脱落させようとした切嗣に対し、綺礼はあえて雁夜がいないタイミングを見計らって間桐邸を襲撃したのだから。

雁夜の聖杯戦争における勝敗に間桐邸は関係ない。それは雁夜の現状を見ればすぐにわかるだろう。もしも雁夜を本気で援護する気があるならば、このようにボロボロの体を引き摺って歩く必要性もない。最低限、雁夜を補助する礼装なりがあるはずだ。

それが無いのはひとえに間桐の翁。間桐臓硯が此度の聖杯戦争を捨て、次回にかけているからだ。

今回の聖杯戦争で望んでいるのは間桐を裏切った雁夜が苦しむ様を見る為のもの。援護するどころか雁夜が苦しむ様を眺め、魂の渴きを潤すためのもの。まさに外道とも言える腐った性が生み出した『愉悦』だった。

ーもつとも、それも既に灰燼に帰したが。

「いや、なかなか骨が折れた。あの悍ましい化け物を亡き者にすることは一切のミスも許されなかったのだな。おまけに要救助者がいるともなれば、難度も上がるといふもの」

綺礼は毛布で身体を覆い、抱えていた少女ー間桐桜を公園のベンチに寝かせる。

雁夜は脇目も振らず、桜に駆け寄る。

もしやと考えた雁夜だが、桜の呼吸が聞こえること、胸が一定のリズムで上下していることを確認してホッと胸を撫で下ろすと綺礼を睨みつけた。

「……なんでこんな勝手なことをした」

「何故？ 簡単なことだ。間桐臓硯が邪魔だった。特に君と同盟を結ぶに当たって最大の障害だったのだな」

「臓硯を殺しただって？ そう簡単にあの化け物を殺せるわけがー」  
「殺したとも。使役していた蟲も、真に間桐臓硯と呼べる蟲もこの世から滅した。生憎とあの手の輩を葬るのは本職だ。逃げ道を潰してしまえば殊の外簡単だったよ」

魔術師の家系に生まれ、魔術師を嫌悪し奔走した雁夜は知らない。

臓硯のような異形、人の理から外れた存在を狩る者たちがいることを。

とはいえ綺礼が代行者と呼ぶ存在であることを、そもそも代行者がなんであるかを知らない雁夜にしてみればやはり臓硯がこうも簡単に葬られるというのは考えにくい。

別に評価しているわけではない。

五百余年。外法に手を染めてもなお生に執着したあの化け物が、有無を言わず封殺されるというのが雁夜にとってにわかには信じがたい事実だったからだ。

まして、臓硯を葬ることが出来るほどの実力者が未だに急造の魔術師を頼る理由がわからない。聖杯戦争に参加しているマスターの中で時臣以外の魔術師にほぼ興味がなかった雁夜に他の魔術師の実力こそわからないが、臓硯を殺せる時点で少なくとも綺礼の実力は極めて高いということだ。

それならサーヴァント同士が戦っている間にマスターを狙えばいいだけの話なのではないか？

雁夜がそう思ったところで綺礼は頭を横に振った。

「キミの考えていることは大体わかる。残念なことだが、この聖杯戦争で私が優位に立てる魔術師は衛宮切嗣のみだ。何よりライダーのマスターは常にライダーと共にいる。マスター殺しなど到底できたものではないよ」

「……だから俺の力が必要だっていうのか？」

「ああ。君ならば……いや、君だからこそ必要だ」

「俺も聖杯戦争に参加した魔術師だぞ？」

「わかっているとも。そのために私は間桐臓硯を殺し、間桐桜を救った」

お前の願いは知っている、と暗に言っている綺礼に雁夜は息を呑んだ。

確かに雁夜の望みは実質的に果たされた。

臓硯の死も、桜の解放も。時臣は切嗣に殺されている。

自分が命を懸けて果たそうとした願いは、奇しくも自分以外の、そ

れも魔術師と時臣の弟子によって果たされてしまった。

なんと呆気ないことか。今しがた、雁夜が聖杯戦争を勝ち残る理由が失われたのだ。

「もしも、だ。叶えるべき願いも果たされ、戦うつもりが無くなったというのであれば今すぐにもバーサーカーを自害させればいい。同盟を結べないのは残念だが、参加者が脱落することも私としてはありがたい。最も困るのは君が同盟を断り、かつ聖杯を諦めていない場合だ。流石にそうなると私も君を見逃すわけにいかなくなる」

当然のことながら雁夜が申し出を受けない場合、綺礼が不確定要素になり得る雁夜を捨て置くことはない。聖杯戦争に参加する者として全力で排除するだろう。

そうなった場合、圧倒的に不利な状況なのは間違いなく雁夜だ。ただでさえ、バーサーカーへの魔力供給だけで死に体になるのだ。戦うどころか逃げられるかさえわからない。

なにより、桜が近くににいるこの状況下で戦うのだけはなんとしても避けたい。

この少女を救うために聖杯戦争に参加したのだ。その聖杯戦争で、救うべき少女の命を脅かすようなことになればそれこそ本末転倒というものだ。おまけに雁夜のサーヴァントであるバーサーカーには理性がない。桜を救ってこの場を離れるなどという器用な真似は出来ないどころか下手をすると一番危険な存在だ。

それに、だ。  
(本当に臓硯が死んだなら、こいつの言う通り聖杯にかける願いなんてない)

強いて言うなら、遠坂に戻った桜が幸せな日々を取り戻すことぐらいだろう。もつともそれは聖杯がなくなるとも叶うものだ。雁夜は思っている。

あの家に帰れば、以前の暮らしに戻れば、壊れてしまった心も治るのだと。

「……俺は魔術師が嫌いだ。人を人とも思わない、あんな奴らと同じ血が俺にも流れてるのかと思うと反吐がでる」



「……」

「だが、どうにもアンタは俺の知る魔術師とは違うらしい」

雁夜と同盟を結ぶに当たり、臓硯は殺す必要があったかと問われれば否だ。雁夜が聖杯戦争で何をどうしようとするかと自身に害が無ければ臓硯は口出ししない。桜の救出も雁夜の願いではあるが、同盟を結ぶだけならこちらも綺礼がする必要はなかった。

それに雁夜の目的を知っているのだとすれば、桜を人質にする事で雁夜を意のままに操ることも出来たのにそれもしなかった。

だからこそ雁夜には綺礼がとてもあの遠坂時臣の弟子であり、魔術師であるとは思えなかった。

……そもそも正規の魔術師かどうか怪しい気がするが。

「ならば問おう、間桐雁夜。私と同盟を結ぶか否か」

「桜ちゃんをあのだ獄から救ってくれた……その恩人の申し出だ。ありがたく受けさせてもらう」

それが善意からでなかったとしても、桜が救われたのは紛れもない事実だ。桜を救うことが雁夜の目的であり、綺礼が同盟を結ぶためにそれを行なったと言うのならいよいよ雁夜には断る理由が見当たらない。

仮に利用されるだけにしても、桜が救われたという結果は紛れもない事実。後で自分がどう利用されることになっても、臓硯無き今、聖杯戦争参加時点に比べれば遥かに良い状態だ。

「同盟成立、だな」

「ああ。……俺に出来ることなんてたかが知れてるが、それでもまだ少しぐらいは無茶が利く」

後顧の憂いはない。一月と持たないのはわかっていることだ。この聖杯戦争で命を落としても、後悔などないだろう。

「そうか。では早速だが一つ頼みたいことがある」

ライダーが強引に執り行った先の宴で結界が破壊され、拠点をアインツベルン城から築九十年を数えるほどの老朽物件に移し替えたのは昨日の話だ。

攻略されてしまった場合の予備拠点として購入し、契約に際して元の暴力団と一悶着起こしかかる羽目になったものの、結果的には無駄な買い物にはならない。

「ーはずだった。」

「これは……ッ」

新たな拠点を離れたのは数時間ほど。

その間にこの予備拠点ー厳密には拠点内にある土蔵の扉が荒々しく破壊され、内部は無残な状態に成り果てていた。

襲撃されたのだと理解するのに時間はかからなかった。

「舞弥っ！」

土蔵の中で倒れる協力者ー否、『道具』の元に駆け寄る。

襲撃者がなんらかの罠を仕掛けていることを警戒しつつ、倒れている女ー久宇舞弥の容態を確認し、切嗣は僅かに安堵の息を漏らした。

殺されたわけでも、致命傷を受けているわけでもない。意識のみを奪われているだけだ。

故に切嗣が襲撃に気づくのが遅れてしまったわけだが、切嗣は悔やむことも嘆くこともしない。

そしてその安堵の息が、表情が、衛宮切嗣がまだ戻りきれていない証左だ。

彼女が意識を失っていないければ指摘していたかもしれないが、この

場にそれを指摘するものはいない。

切嗣は舞弥をその場に寝かせ、急いで土蔵を出る。

襲撃者の目的が聖杯の守り手であるアイリスフィールなのは明白。問題は襲撃者が誰であるかだ。

残されている陣営はライダー、バーサーカー、そしてアサシンとは思えない謎のサーヴァントのみ。

まずライダーはあり得ない。切嗣の使役するセイバーほどでないにしろ、あの手の輩はこのような卑怯な手段を嫌う。仮に奪いにくるにしても、舞弥に伝令役を任せて一騎討ちの場を設けようとするか、或いはセイバーが来るまでこの場に留まる可能性が高い。

そうなると残す二つの陣営。

普通に考えられるのはバーサーカー陣営だ。

なにせ、マスターが御三家の一つ、間桐だ。アイリスフィールが聖杯の守り手である事を知っていたとしてなんらおかしくはない。理由はわからないものの、アイリスフィールを連れ去るとすればこちらの陣営の方が考えられる。

しかし、切嗣の脳裏にはあの男の顔がよぎった。

根拠もなければ、証拠もない。

だというのに、切嗣はあの男が――言峰綺礼が関わっているのではないかと思えてならない。

切嗣は歯噛みする。

おそらく裏で暗躍を続けているであろう綺礼の策略が何一つわからないということに。

(一体なんなんだ、お前は……)

言い知れぬ焦燥感を募らせながら、影すら見えない襲撃者を探すべく、切嗣は拠点を発つ。

既に最終決戦までのカウントダウンが始まっているとも知らずに。

「これで、良かったのか？」

「ああ。これで衛宮切嗣は冷静さを欠く。襲撃者を唯一知る久宇舞弥は目を覚ますまでに時間はかかり、覚ましたところで彼女は襲撃者をライダーだと誤認している。その点については彼女の落ち度ではないが、いざいざにせよ、衛宮切嗣が無駄骨を折っている間にこちらも準備を進める」

綺礼が取った戦略はおよそ正史通りのものだった。

切嗣及びセイバーが離れたのを彼らが拠点を購入するより以前に取り付けていた小型カメラで確認したのち、宝具を用いてライダーに擬態したバーサーカーが拠点を襲撃。舞弥を無力化し、アイリスフィールを攫う。ここで舞弥を殺さなかったのは舞弥の生命力の衰えを通じて、切嗣に襲撃を感知させないためだ。その為に正史ではセイバーを無視させるために使用していた令呪を舞弥を殺さず、無力化させる為に使わせた。そしてその結果、切嗣は事が終わってから襲撃を知覚し、唯一情報を持ち得ている舞弥も目を覚ましたとして誤認したままだ。襲撃者が誰であるかを特定するにはそれなりの時間を要する。

綺礼の謀略に何も知らない雁夜は人知れず恐怖する。

今でこそ同盟関係にあるものの、時臣存命の際はこの男が仇敵と手を結んでいたのだ。仮にもこの男が謀略を用いて雁夜を抹殺しようとしていたなら、雁夜はともかく、桜にも被害があった可能性はあるのだから。

「さて、右手を出したまえ。間桐雁夜」

「？ ああ」

訳はわからないが、この男がなんの意味もなくそんな事は言うまいと、雁夜は干からびて筋のういた右手を綺礼に差し出す。

綺礼はその手を取ると、低く聖言を紡ぎながら、令呪の残滓に指を

這わせる。

たったそれだけの行為で、潰えていた二角の令呪は再び輝きを取り戻した。

「っ!? 令呪がー」

「ちよつとした裏技だよ。今の私は教会の保管する令呪をもっている。その令呪を君に再分配したまでだ」

なぜ綺礼が監督役が所有しているはずの保管令呪を持っているのか気になったが、さして重要な事でないと思いを放棄する。どういった経緯であれ、戦局を優位に進めているのは他でもない自分達であることが重要な事だ。

「……後はこの令呪を使ってセイバーと闘うって事でいいんだな?」

「ああ。だが、くれぐれも私が言ったことを忘れないように。ともすれば、君の命に関わることだ」

「……わかってる」

全力でバーサーカーが戦えば、雁夜は全ての刻印蟲を死滅させることとなり、その最期は凄惨なものとなる。なればこそ、セイバーとの闘いは正史のようにバーサーカーの思いのままに闘わせることなど出来るはずがない。雁夜のためだけではない。戦略の観点から見ても、バーサーカーに切り札を使わずに戦わせた方がより良い結果をもたらす。

その分、雁夜は苦しむ羽目になるが、それはこの聖杯戦争に参加した時点で受け入れている。今更なんの躊躇いがあるのかと雁夜は鼻で笑う。

倒すべき敵は死に、救うべき者は救われた。

雁夜にとって今の状況は延長戦のようなもの。恐れるものなどありはしない。

「ところで、本当に彼女が『聖杯の器』なのか?」

雁夜は屋上の床に倒れ込んでいる女―アイリスフィールを見て問う。

「正しくは彼女の『中身』だが……聖杯を降ろすにはあと二人以上のサーヴァントが脱落する必要がある」

「そのうちの一体が俺のバーサーカーってわけか」

「そういうことだ」

肯定する。

正直なところ、今すぐ自害させてしまっても構わないとすら思っている。そうしないのはこの後の戦いでバーサーカーが必要だからだ。

「ライダーか、セイバーか……俺はどっちの相手をすればいい？」

「セイバーだな。ライダーについては私のサーヴァントが葬るだろう。君は次など考えず、全力でセイバーとの戦いに臨んでくれ。それまでは体を休め、英気を養ってくるといい」

「そうさせてもらう」

頷くと雁夜は足を引きずりながら、その場を後にする。

足音がどんどんと遠ざかっていき、足音が完全に聞こえなくなった直後、それを見計らっていたように綺礼の隣にアヴェンジャーが姿を現した。

「ここまで予定通りね。イレギュラーを許さないほど完璧な作戦、とでもいえばいいのかしら？」

「起きられては困る。その為の小細工だ」

イレギュラーを起こしかねない人物も既にこの世を去った。現在、イレギュラーを起こしかねないのは寧ろ綺礼の味方側にしかない。

「どうするの？ 仮にこっちの作戦がバレて、セイバーのマスターとライダーのマスターが手を結んだら」

「その時はその時だ。敵は消耗せず、私の消耗が増えることになるが、大勢に影響はない。博打か大博打かの差だ」

「……………それでよくもまあ大勢に影響はない、なんて涼しい顔をして言えたものね」

呆れたような表情でアヴェンジャーは綺礼の顔を見る。

綺礼が見据える聖杯戦争の結末を、アヴェンジャーだけが知っている。

アーチャーも、雁夜も知らない。

綺礼の目指すエンディングはひどく独善的だ。

実際、聞かされたアヴェンジャーが即座に『アンタ、やっぱりロク

な死に方出来ないわよ』と口にしたぐらいだ。

にも関わらず、賛同したのはアヴェンジャーであるからだろうか。

それともー

「……考えるだけ無駄ね」

「? 何か言ったか?」

「何も無いわよ。さっさと行くわよ」

雑念を振り払うように踵を返すアヴェンジャーに綺礼は首を傾げながらも、決戦の地へ足を向けた。

ー決着は近い。